

徳 重 本 村

—福岡県宗像市徳重所在遺跡の発掘調査報告—

宗像市文化財調査報告書第52集

2 0 0 2

宗 像 市 教 育 委 員 会

TOKU SHIGE HON MURA
徳 重 本 村

—福岡県宗像市徳重所在遺跡の発掘調査報告—

宗像市文化財調査報告書第52集



2002

宗像市教育委員会

序 文

宗像市は福岡県北部の福岡市、北九州市のほぼ中間に位置し、周囲を山塊に囲まれた内陸盆地状の地理的景観を有しています。

昭和36年の国鉄鹿児島本線の電化や昭和38年着工の自由ヶ丘団地造成、40年着工の日の里団地造成などの土地開発により人口は急増し、昭和56年には市制を施行するなど急速な都市化が進められてきました。

今日では、「快適生活都市・学術文化都市・高福祉都市」をめざして、さらなる発展を続けています。

しかしながら、各種の開発はわたしたちの暮らしに利便性をもたらす反面、自然・歴史・生活環境の急激な変化は精神生活に不便をもたらす結果となりつつあり、開発と環境保護の調和を地球規模で見直す方向転換が迫られています。

近年では埋蔵文化財をくらしの環境の一部であるとの認識が少しずつ浸透しはじめ、本市においても開発に先だって、重要なものについては保存整備を図り、歴史遺産を後世に伝えようとする努力を地道に進めています。

本報告書は、平成10～12年度に実施した古墳時代の住居跡・古墳・墳墓及び中世の住居跡・墳墓遺跡である徳重本村遺跡の発掘調査成果をおさめたものです。

本書が、広く文化財保護行政及び学術研究に貢献することをお願いいたしますとともに、発掘調査全般にわたってご協力いただいた数多くの方々に、心からの感謝の意を表する次第です。

平成14年3月

宗像市教育委員会

教 育 長 川 崎 雅 光

例 言

1. 本書は、県道徳重朝町線建設に伴い、平成10～12年度に行った緊急発掘調査の調査報告書である。
2. 発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 徳重本村遺跡は、福岡県文化財番号330274～330290である。
4. 本報告書の遺物番号は、土器に関しては通し番号、鉄器・玉類は挿図毎に1から番号を付す。
5. 遺構の名称は次のように記号化した。
SB：掘立柱建物 SC：竪穴住居跡 SD：溝 SK：土坑・木棺墓・土壇墓
SO：古墳 SU：貯蔵穴
6. 測量は、国土調査法第Ⅱ座標系を用いた。遺構図の方位は磁北である。
7. 本書に掲載した平板測量図及び遺構実測図の作成は、安部裕久・白木英敏・岡崇・秋成雅博・松岡千鶴子・江崎靖隆・細川愛・白石麻子・野田雅・縄田雅重・吉田恵美・石川さやか・沖田正大・熊代昌之が行った。
8. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、縄田・秋成・松岡・名取さつき・江崎・細川・吉田・石川・熊代が行い、熊代が補填した。
9. 本書に掲載した遺構、遺物の製図は、中原美知子・多比良佳奈子・星裕子が、遺物の整理は、西村広子・田代貞子・田崎絃子・東和子・濱田広美が行った。
10. 本書に掲載した遺跡及び調査区の空中写真撮影は（有）空中写真企画、遺構の写真撮影は白木・岡・秋成・熊代が、遺物の写真撮影は白木・熊代が行った。
11. 現地調査および報告書の作成にあたり、3号墳出土勾玉の石材鑑定を福岡教育大学環境教育講座教授上野植一氏に、2号墳出土有袋鉄斧のX線撮影と5号墳出土赤色顔料の鑑定を別府大学文学部文化財学科助教授本田光子氏に依頼し、ご教授を賜った。また、以下の方々から貴重なご指導とご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。（敬称略）
石木秀啓・久住猛雄・平ノ内幸治・舟山良一・柳田康雄・吉留秀敏・近藤義郎氏をはじめ中国四国前方後円墳研究会の諸氏
12. 本書の執筆・編集は熊代が行った。
13. 本調査において出土した遺物および実測図、写真等の資料は、宗像市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 序 説	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	2
3. 位置と環境	3
4. 調査の概要	3
第2章 調査の記録	6
1. A区の調査	6
2. B区の調査	8
3. C区の調査	36
4. D区の調査	52
5. E区の調査	64
第3章 まとめ	83
1. 古墳築造時期について	83
2. 3号墳主体部出土勾玉について	84
3. 釣川中流域における前方後円墳の系譜について	85

挿 図 目 次

第1図 徳重本村遺跡分布地図 (1/25000)	4	第11図 2号墳主体部遺構実測図 (1/40)	15
第2図 A3区遺構配置図 (1/200)	6	第12図 2号墳盛土内鏡出土状況実測図 (1/2)	16
第3図 A4区遺構配置図 (1/200)	7	第13図 2号墳鉄斧出土状況実測図 (1/20)	16
第4図 ASP1遺構実測図 (1/80)	8	第14図 方形周溝墓遺構実測図 (1/40・1/20)	17
第5図 A区出土遺物実測図 (1/4)	9	第15図 円形周溝墓遺構実測図 (1/40)	18
第6図 ASP2出土ガラス玉実測図 (1/1)	10	第16図 方形周溝墓・円形周溝墓主体部遺構実測図 (1/40)	18
第7図 B区遺構配置図 (1/300)	11	第17図 2号墳出土鉄器実測図 (1/2)	20
第8図 B区2号墳現況測量図 (1/200)	12	第18図 2号墳・方形周溝墓・円形周溝墓出土遺物実測図 (1/4)	20
第9図 2号墳遺構配置図 (1/200)	13	第19図 6号墳石室遺構実測図 (1/40)	21
第10図 2号墳土層断面実測図 (1/80)	14	第20図 6号墳周溝遺構実測図 (1/60)	22

第21図	6号墳周溝出土遺物実測図 (1/3・1/4)	23	第50図	C-1・2号集石遺構実測図 (1/40)	54
第22図	7号墳遺構配置図 (1/60)	25	第51図	C-1・2号集石出土遺物実測図 (1/3)	55
第23図	7号墳主体部遺構実測図 (1/40)	26	第52図	C-1・2号集石出土遺物実測図 (1/3)	56
第24図	7号墳周溝出土遺物実測図 (1/3・1/4)	27	第53図	C-1・2号集石出土遺物実測図 (1/3)	57
第25図	2号墳盛土下遺構配置図 (1/200)	28	第54図	D区遺構配置図 (1/200)	58
第26図	B-SK14・15・16・17・20・21遺構実測図 (1/40)	29	第55図	3号墳土層断面図 (1/100)	59
第27図	B-SK18・19遺構実測図 (1/40)	30	第56図	3号墳主体部遺構実測図 (1/40)	60
第28図	B-SK7・34遺構実測図 (1/40)	32	第57図	3号墳主体部勾玉出土状況実測図 (1/2)	61
第29図	B-SK11遺構実測図 (1/20)	33	第58図	3号墳出土鉄器実測図 (1/2)	61
第30図	B-SK7出土鉄器実測図 (1/2)	34	第59図	3号墳出土玉類実測図 (1/1)	62
第31図	B-SK5遺構実測図 (1/20)	34	第60図	3号墳出土遺物実測図 (1/4)	63
第32図	B-SK5出土遺物実測図 (1/3・1/4)	35	第61図	4号墳主体部遺構実測図 (1/40)	64
第33図	1号墳遺構配置図 (1/100)	37	第62図	E区遺構配置図 (1/300)	65
第34図	1号墳土層断面実測図 (1/80)	38	第63図	5号墳・E集石墓遺構配置図 (1/100)	66
第35図	1号墳主体部・出土遺物実測図 (1/40・1/3)	39	第64図	5号墳主体部遺構実測図 (1/40)	68
第36図	1号墳出土鉄器実測図 (1/2)	40	第65図	5号墳主体部土層断面図 (1/40)	69
第37図	C-SU12遺構実測図 (1/40)	41	第66図	E-I-1～4号集石墓遺構実測図 (1/20)	71
第38図	C-SU12出土遺物実測図 (1/4)	42	第67図	E-I-5～7・II-1号集石墓遺構実測図 (1/20)	72
第39図	C-2区遺構配置図 (1/200)	43	第68図	E-II-2～4・III-1号集石墓遺構実測図 (1/20)	73
第40図	C-SC22～28遺構実測図 (1/40)	44	第69図	E-III-2号集石墓遺構実測図 (1/20)	75
第41図	C-SC30～33遺構実測図 (1/80)	45	第70図	E-III-3・4・IV-1～3号集石墓遺構実測図 (1/20)	76
第42図	C-SC23出土遺物実測図 (1/4)	46	第71図	E-IV-4～6・V-4号集石墓遺構実測図 (1/20)	78
第43図	C-SC25～33出土遺物実測図 (1/3・1/4)	47	第72図	E-IV-7～10号集石墓遺構実測図 (1/20)	79
第44図	C-SK61・64遺構実測図 (1/80)	48	第73図	E-V-1～3号集石墓遺構実測図 (1/20)	80
第45図	C-SK61出土遺物実測図 (1/3)	49	第74図	E-SK2遺構実測図 (1/20)	81
第46図	C-SK61出土遺物実測図 (1/3)	50	第75図	E区集石墓出土遺物実測図 (1/3・1/4)	82
第47図	C-SK61出土遺物実測図 (1/3)	51	第76図	E区集石墓出土鉄拓影 (1/1)	83
第48図	C-SK64出土遺物実測図 (1/3・1/4)	52	第77図	東郷高塚古墳出土土器実測図 (1/6)	87
第49図	C-SK64出土遺物実測図 (1/2)	53	第78図	東郷高塚古墳出土鉄器・玉類実測図 (1/2・1/3)	88

表 目 次

表1	徳重本村遺跡古墳一覧表	90
表2	徳重本村遺跡出土鉄器観察表	90
表3	徳重本村遺跡C区SK64出土鉄滓観察表	90
表4	徳重本村遺跡A区SP82出土ガラス玉計測表	91
表5	徳重本村遺跡3号墳出土玉類計測表	92
表6	徳重本村遺跡出土遺物観察表	93

図版目次

- 図版1 徳重本村遺跡周辺の航空写真（昭和53年撮影）
- 図版2 (1) A-3区全景（上から） (2) A-4区全景（上から）
- 図版3 **2号墳** (1) 2号墳全景 (2) 2号墳南北土層 (3) 2号墳後円部西側土層 (4) 2号墳後円部東側土層
(5) 2号墳くびれ部東側周溝土層
- 図版4 **2号墳・方形周溝墓** (1) 2号墳くびれ部周溝 (2) 2号墳主体部 (3) 2号墳主体部木蓋密閉粘土
(4) 2号墳後円部盛土内鏡出土状況 (5) 2号墳後円部鉄斧出土状況 (6) 方形周溝墓全景
(7) 方形周溝墓主体部 (8) 2号墳後円部全景
- 図版5 **6・7号墳** (1) 6・7号墳全景 (2) 6号墳全景 (3) 6号墳主体部 (4) 6号墳周溝遺物出土状況①
(5) 6号墳周溝遺物出土状況②
- 図版6 **7号墳・B区弥生時代遺構** (1) 7号墳全景 (2) 7号墳第1主体部 (3) 7号墳第2主体部
(4) 7号墳周溝遺物出土状況 (5) B区SK18 (6) B区SK14・15 (7) B区SK21 (8) B区SK20
- 図版7 **B区弥生時代・古墳時代・中世遺構** (1) B区SK16 (2) B区SK17 (3) B区SK7
(4) B区SK7鉄鍬出土状況 (5) B区SK11蓋石除去前 (6) B区SK11蓋石除去後 (7) B区SK5
(8) B区SK5遺物出土状況
- 図版8 **1号墳** (1) 1号墳全景 (2) 1号墳東側土層 (3) 1号墳西側土層 (4) 1号墳南側土層 (5) 1号墳北側土層
- 図版9 **1号墳・C-1・2区各遺構** (1) 1号墳陸橋部 (2) 1号墳主体部 (3) 1号墳主体部鉄鍬出土状況
(4) C区SU12 (5) C区SC22・23 (6) C区SC24～28 (7) C区SC30 (8) C区SC31
- 図版10 **C-2区** (1) C-2区全景 (2) C区SK61 (3) C区SK61遺物出土状況 (4) C区SK64
(5) C区1・2号集石遺構
- 図版11 **3・4号墳** (1) 3号墳全景 (2) 3号墳東西土層 (3) 3号墳主体部 (4) 3号墳主体部勾玉出土状況
(5) 4号墳全景
- 図版12 **5号墳・E区集石墓** (1) 5号墳・E区集石墓全景 (2) 5号墳主体部礎床検出状況
(3) 5号墳主体部礎除去後 (4) E区I-2号墓 (5) E区I-2号墓蓋石除去後
- 図版13 **2・6・7号墳・B区各遺構・C区SK61出土土器**
- 図版14 **1号墳・B区SK5・C-1・2区各遺構出土土器**
- 図版15 **1・2号墳・B区SK7出土鉄器** 2号墳出土鏡 3号墳・A区SP82出土玉 C区SK64出土輪・鉄滓
C区SU12出土土器

第1章 序 説

1. 調査に至る経過

平成8年9月25日付8宗土第492号文書で、宗像土木事務所長から県道主要地方道若松玄海線のうち、都市計画街路徳重朝町線の平成9～12年度工事予定の道路建設にかかる全長1000m、面積約25,000㎡の埋蔵文化財調査の必要性についての照会があった。

工事予定の範囲は、徳重本村遺跡として古墳時代の古墳群が集中して分布することがわかっていたため、10月に土木事務所の担当者とともに現地に入り、工事範囲に含まれる古墳の位置及び数量を確認した。この段階では路線上に10基ほどの古墳があり、調査の必要性を伝えた。

調査は土地の買収等の手続きと並行で進めることになり、平成10年度分の施行路線南端の拡幅工事については既存路線部分であることから工事着工とした。

平成10年度は、12月7日にA区の集落遺構及びC区の古墳調査に着手し、平成11年3月15日に終了した。

平成11年度は、A区の集落遺構、B区の古墳、C区の集落遺構、D区の古墳を調査することになり、4月22日に着手し、平成12年3月15日に完了した。

平成12年度には、E区の古墳と集石墓の調査を6月16日に着手し、B区の墳墓遺構の調査を最後に平成13年3月15日に現地調査を終了した。

文化財保護法にかかる手続きは下記のとおりである。

平成10年度

埋蔵文化財発掘の届出	平成10年11月30日付宗教社第628号
埋蔵文化財発掘調査の報告	平成10年12月24日付10宗教社第689号
埋蔵物発見届	平成11年3月31日付10宗教社第861号
埋蔵文化財保管証	平成11年3月31日付10宗教社第862号
発掘調査終了届	平成11年3月31日付10宗教社第868号

平成11年度

埋蔵文化財発掘の届出	平成11年5月17日付11宗教社第105号
埋蔵文化財発掘調査の報告	平成11年5月17日付11宗教社第109号
埋蔵物発見届	平成12年3月31日付11宗教社第877号
埋蔵文化財保管証	平成12年3月31日付11宗教社第894号
発掘調査終了届	平成12年3月31日付11宗教社第896号

平成12年度

埋蔵文化財発掘の届出	平成12年6月6日付12宗教社第178号
埋蔵文化財発掘調査の報告	平成12年9月21日付12宗教社第429号
埋蔵物発見届	平成13年3月30日付12宗教社第823号
埋蔵文化財保管証	平成13年3月30日付12宗教社第824号
発掘調査終了届	平成13年3月30日付12宗教社第835号

2. 調査の組織

4ヵ年にわたる発掘調査の組織は次のとおりである。

総 括	宗像市教育委員会	教育長	原田慎太郎（平成10・11年度） 川崎雅光（平成12・13年度）
		教育部長	織戸勝也（平成10・11年度） 桑野俊一郎（平成12・13年度）
		社会教育課長	井上弘（平成10～12年度）
		生涯学習課長	伊豆丸正敏（平成13年度）
		文化財係長	原俊一
庶 務 発掘調査		主査	安部裕久
		主査	安部裕久
		主任技師	白木英敏 岡 崇
		嘱託	秋成雅博（平成10・11年度） 熊代昌之（平成12年度）
		報告書作成	嘱託 熊代昌之（平成13年度）

3. 位置と環境

宗像市は、福岡県北部に位置し、福岡市・北九州市のほぼ中間点にあたる。市域は、三方を低い山塊によって囲まれた盆地状地形を形成し、北西方向に開く。市内を東西に貫流する2級河川釣川は、ここから玄界灘に向かい北流する。徳重本村遺跡は、宗像市の中央東側に入り組んで発達する丘陵群の東端に位置し、丘陵上およびその東裾に形成された中位段丘面上、標高21～40mほどに立地する。北側に釣川、東側に釣川支流の名残川によって形成された沖積平野を望む。当地域は、弥生時代より開発が進み、丘陵上や丘陵周辺に墳墓や集落など多くの遺跡が発見されている。周辺の遺跡は、名残遺跡群・富地原川原田遺跡・富地原森崎遺跡・富地原岩野B遺跡・田久瓜ヶ坂遺跡が調査され、弥生時代から古墳時代における集落・墳墓の実態の一端を明らかにしている。

名残遺跡群は、名残川の対岸に位置する遺跡で、弥生時代から古墳時代を中心とする複合遺跡である。中には、26基の古墳が所在する富地原梅木遺跡、多数の土壌墓・木棺墓・石棺墓・古墳の所在する徳重高田遺跡、礎床を有す組合式木棺を主体部とする2号墳を含む徳重仏祖遺跡など、徳重本村遺跡と時期的にも密接な関係を持つ各種の遺構が、名残川を挟んだ対峙丘陵上に位置している。特に弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置付けられる徳重高田遺跡の墳墓群は、徳重本村2号墳と時期的・立地的に密接な関係を持つと考えられ注目される。

田久瓜ヶ坂遺跡は、本遺跡の北西約1.2kmの地点に位置する古墳8基を始めとする古墳時代の墳墓遺跡である。中でも1号墳は、全長約30mの低墳丘の前方後円墳で、前期中頃に位置付けられる。また、後円部頂から九州では珍しい瀬戸内系の円筒棺を含む4基の埋葬主体が確認されている。

4. 調査の概要

本調査前に踏査およびトレンチによる確認調査を行い、遺構が認められた場所を中心に調査区の設定を行った。道路工事という性格上、調査区は南北に細長く延びており、これを北から順次A区、B区といった具合にE区まで調査区を設定し、丘陵頂部と裾部を調査したC区に関しては丘陵頂部をC-1区、裾部をC-2区とした。遺構は、各調査区毎に通し番号とし煩雑になると思われる場合は、遺構番号の前に各区のアルファベットを付した。また古墳は、調査区に関係なく通し番号とし、調査順に1号から7号墳までの番号を付した。

A区は、遺跡の北端に位置し、B区の位置する丘陵の北側裾、標高約21mの平坦面に位置している。調査は、調査対象区内に遺構確認のトレンチを設定し試掘を行った後、遺構が認められた場所を調査区とし、調査を行った。調査区は、南北に2ヶ所で調査面積は約450㎡。北側をA-3区、南側をA-4区とする。検出した主な遺構は、中世の掘立柱建物・土壌・多数の小ピットである。土壌からはガラス玉が92点出土している。また、表土下の包含層からも多数の中世を中心とした土器が出土している。



- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| 1 徳重本村遺跡 | 4 富地原岩野B遺跡 | 7 田久貴船前遺跡 |
| 2 名残遺跡群 | 5 富地原川原田遺跡 | 8 名残城遺跡 |
| 3 富地原森崎遺跡 | 6 田久瓜ヶ坂遺跡 | 9 朝町妙見遺跡 |

第1図 徳重本村遺跡分布地図 (1/25000)

B区は、A区南側の丘陵尾根線上、標高30～40mに位置する。踏査の結果、古墳の存在が確認されていたため、まず古墳の調査を行い、その後墳丘周辺の表土を重機で除去し遺構の検出を行った。遺構は、古墳3基（2号墳・6号墳・7号墳）・方形周溝墓1基・円形周溝墓1基・石棺墓1基・土壇墓10基・土壇多数を確認し、このうち2号墳は、出土土師器から、古墳時代前期初頭の前方後円墳であることが判明した。また、2号墳周辺において焼け垂みのある須恵器片や窯壁を採集しており、調査区外には須恵器窯の存在が予想される。

C区は、B区南側の谷を挟む標高37mの丘陵と丘陵の東裾部に位置し、丘陵部をC-1区、裾部をC-2区とした。C-1区は、踏査の結果古墳の存在が確認されていたため、まず古墳の調査を行い、その後周辺を掘り下げて遺構の検出を行った。C-2区は、確認調査の結果、遺構が確認されたため遺構面までを重機によって掘り下げ、調査を行った。遺構は、C-1区より、古墳1基（1号墳）と袋状竖穴1基・土壇多数を確認し、2区より方形住居跡10基・集石遺構・土壇多数を確認した。

D区は、C区南側の谷を挟む標高37mの丘陵上に位置する。踏査時に、古墳の存在が確認されていたため、古墳の調査を行い、その後、重機による表土の除去を行い周辺の遺構の調査を行った。遺構は、古墳2基（3号墳・4号墳）・土壇多数を確認したが、4号墳に関しては、調査区外の削平された傾斜面に所在していたため十分な調査を行えず残念な結果となった。

E区は、D区南側の谷を挟む標高34mの丘陵上に位置する。踏査時に、古墳の存在が確認されていたため、古墳の調査を行い、同時に重機による表土の除去を行い遺構の調査を行った。

遺構は、古墳1基（5号墳）・中世集石墓29基・土壇多数を確認したが、5号墳に関しては、削平が顕著で、墳形の確定に至らなかった。

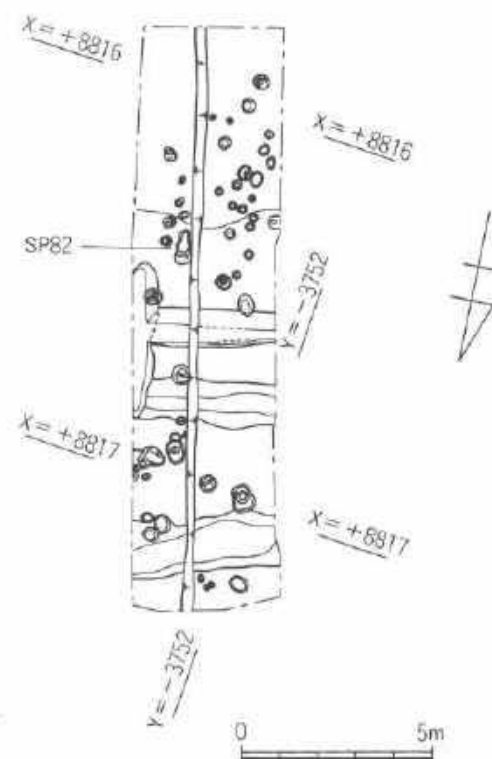
第2章 調査の記録

1. A区の調査

A区は、B区の位置する丘陵北側裾部の標高約21～23mの平坦面に位置する。調査は、遺構確認のトレンチを設定し試掘を行った後、遺構が認められた場所を調査区として設定し、調査を実施した。

SB1 (第4図)

A-4区南端に位置する東西棟の建物で、N-88°-Wを主軸とする2間×3間 α の掘立柱建物で、短軸(梁間)4.5m、長軸(桁行)7m α となる。柱間は、2m前後で、間に栢柱が入る。柱穴の掘方は、60cmから25cmの円形で、深さは、90cmから25cmである。建物の中心には、長軸方向に東柱と思われる柱列が検出され、建物外まで柱列が伸びているところから、底が存在した可能性



第2図 A-3区遺構配置図 (1/200)

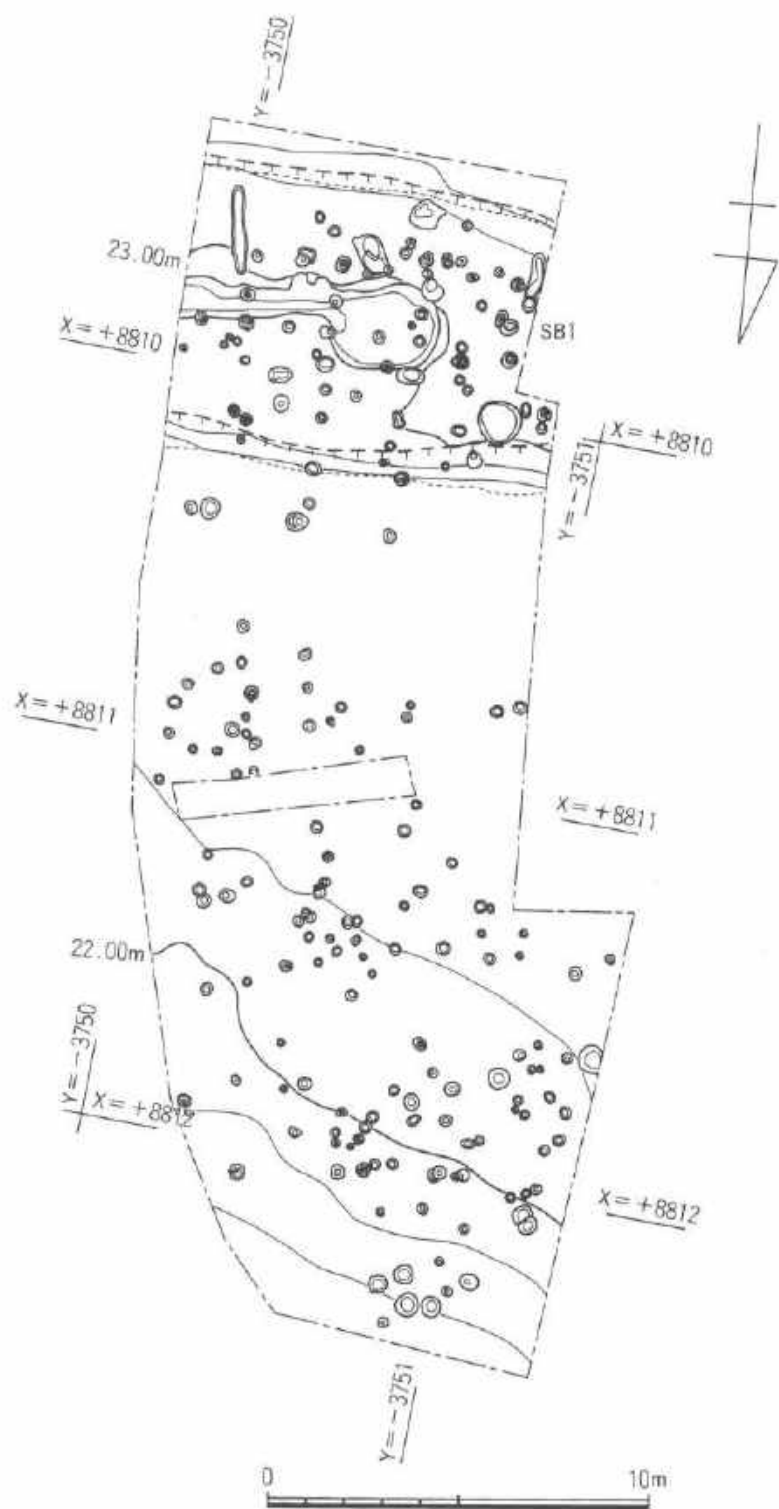
がある。また、建物中央の4つの柱は、棟持柱と考えられるもので、他の柱に比べ大ぶりの柱が深く掘り込まれている。建物北側に張出すように付随する柱穴の性格は不明であるが、寺社建築という向拝状の構造物と考えられる。なお、掘立柱建物西側の構造は、調査対象地外に伸びている可能性があり、全容は明らかにし得なかった。遺物は、各柱穴から土師器・瓦器が出土している。

SP82 (第3図)

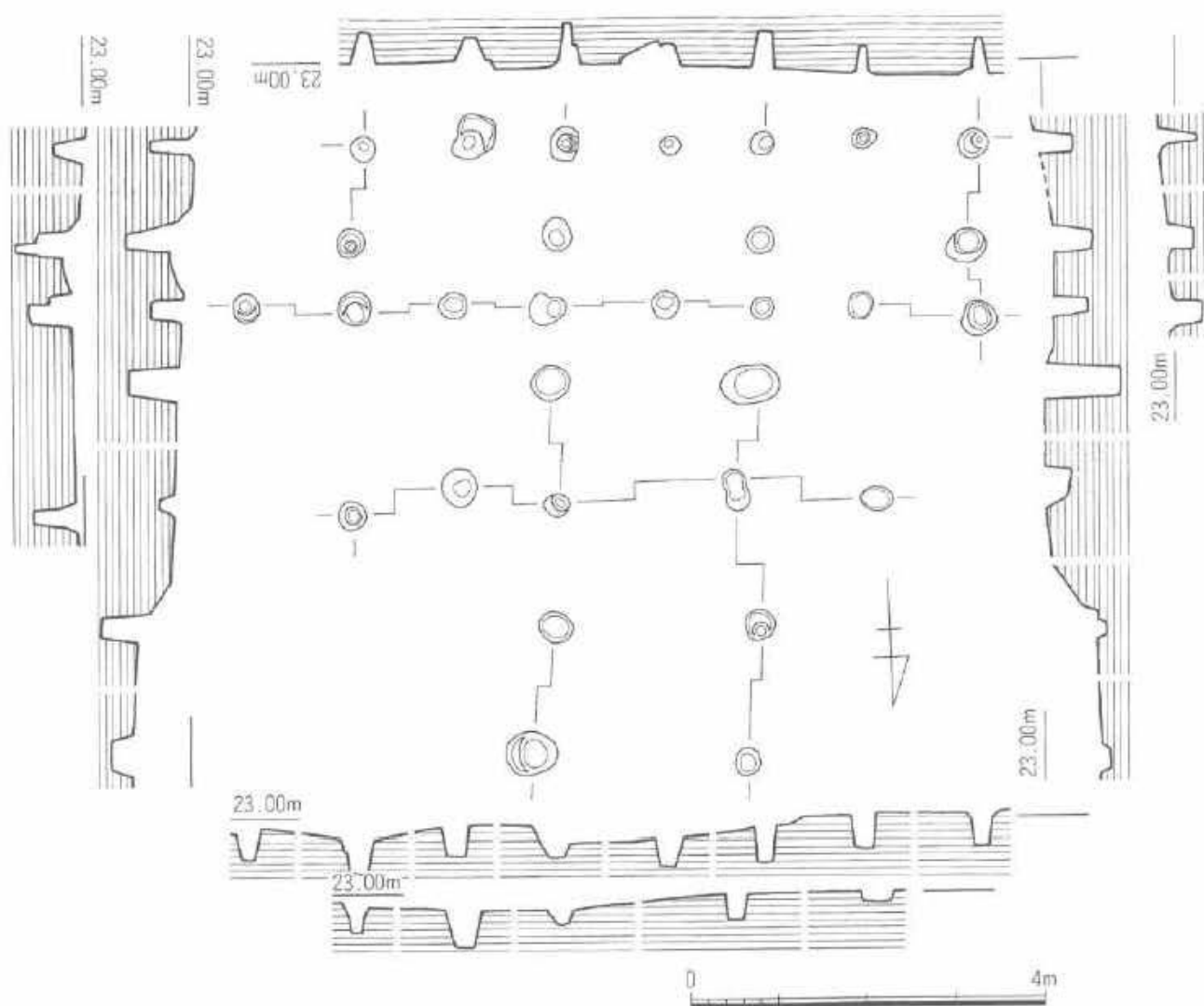
A-3区中央にある長軸90cm、短軸42～16cmの不整楕円形ピットで、埋土よりガラス玉92点が出土している。

出土遺物 (第6図)

埋土中より92点のガラス玉を検出した。ガラス玉は、直径0.24～0.41mm、厚さ0.09～0.25mmで、平均値は、直径0.32mm、厚さ0.21mmとなる。形状は、断面中位が膨らむ俵型で、色調は鮮やかな淡青色を基調とするものが大半を占め、濃紺色のものが3点出土している。



第3図 A-4区遺構配置図 (1/200)



第4図 A-SB1遺構実測図 (1/80)

2. B区の調査

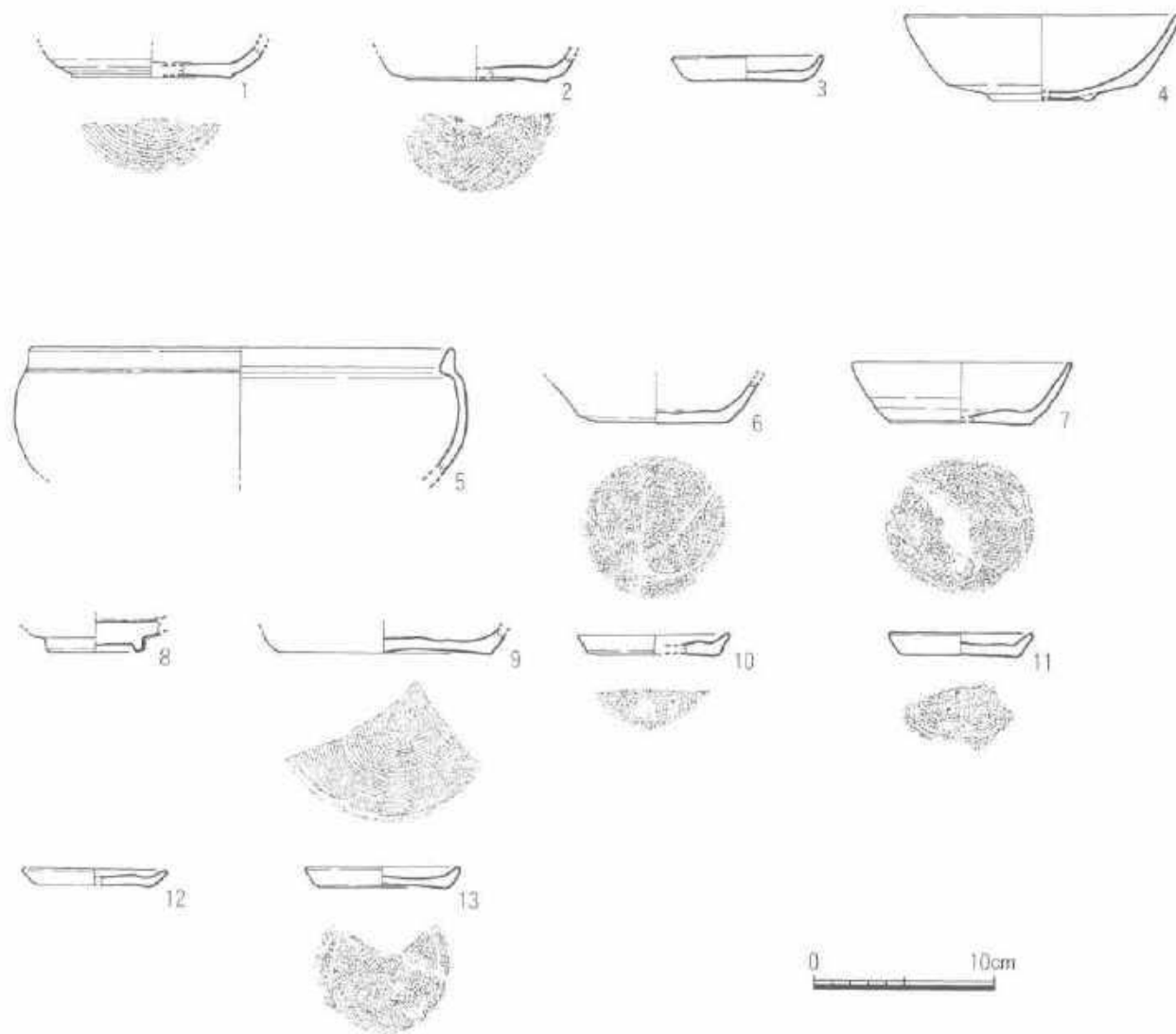
2号墳 (B区1号墳)

丘陵頂部の標高約37～40mに位置している。調査前、墳形は定かではなかったが、墳丘測量の結果前方後円墳であることが判明した。調査は、墳丘主軸方向および直交方向の前方部・後円部にそれぞれ土層確認のためのベルトを残し、主体部の検出および墳形・墳丘規模の確認を行った。

墳丘 (第9図)

全長18.7mの前方後円墳で、前方部長6.3m、後円部径12.4m、前方部前面幅6m、くびれ部幅4.5m、現状の墳高は、前方部最高所で1.4m、後円部最高所で2.7mとなり、前方部は直線的に広がる。また、幅1.4m、深さ0.2m前後の周溝が、後円部からくびれ部にかけて掘り込まれている。

墳丘は、地山整形と盛土によって行われているが、盛土の高さは現状で、前方部約0.4m、後



第5図 A区出土遺物実測図 (1/4)

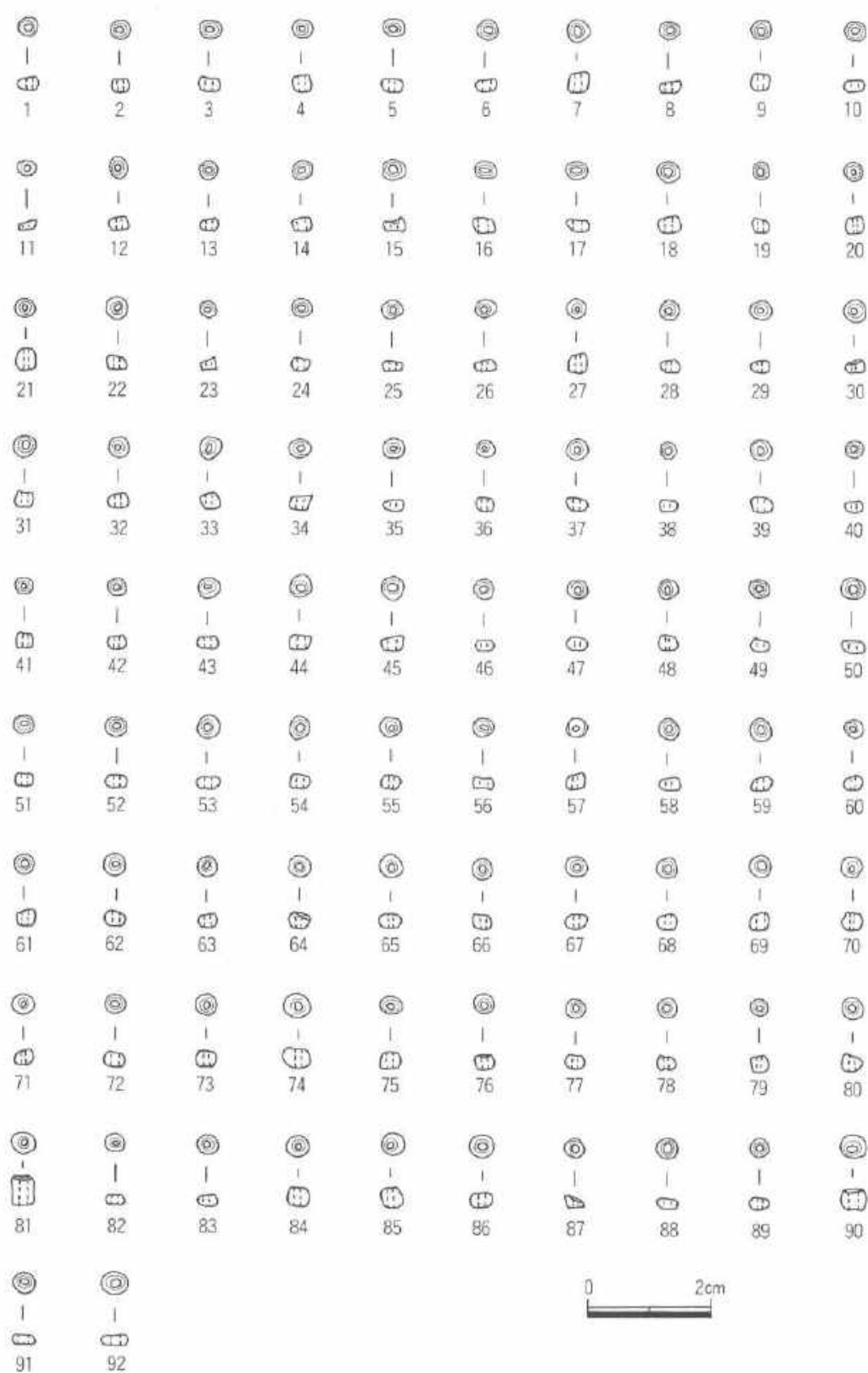
円部約1.1mであり、後円部に比し前方部はほぼ地山の削り出しによって整形されている。盛土は大きく分けて4層からなり、下層より順にⅠ褐色系土層、Ⅱ黒色系土層、Ⅲ白色系土層、Ⅳ橙褐色系土層となる。

墳丘構築過程は土層観察の結果から次のような手順で行われている。①地山の削り出しによる墳丘の整形と盛土による後円部平坦面の形成。②墓壇の掘り込みと埋葬祭祀。③Ⅱ層黒色土を用いた盛土。④盛土(Ⅲ・Ⅳ層)による墳丘の形成。この築造順序のうち、③の黒色土を用いた盛土は、主体部の掘方および埋葬祭祀に伴うと考えられる鉄斧が黒色土層以下から検出されている点から旧表土ではありえず、盛土と考えられる。

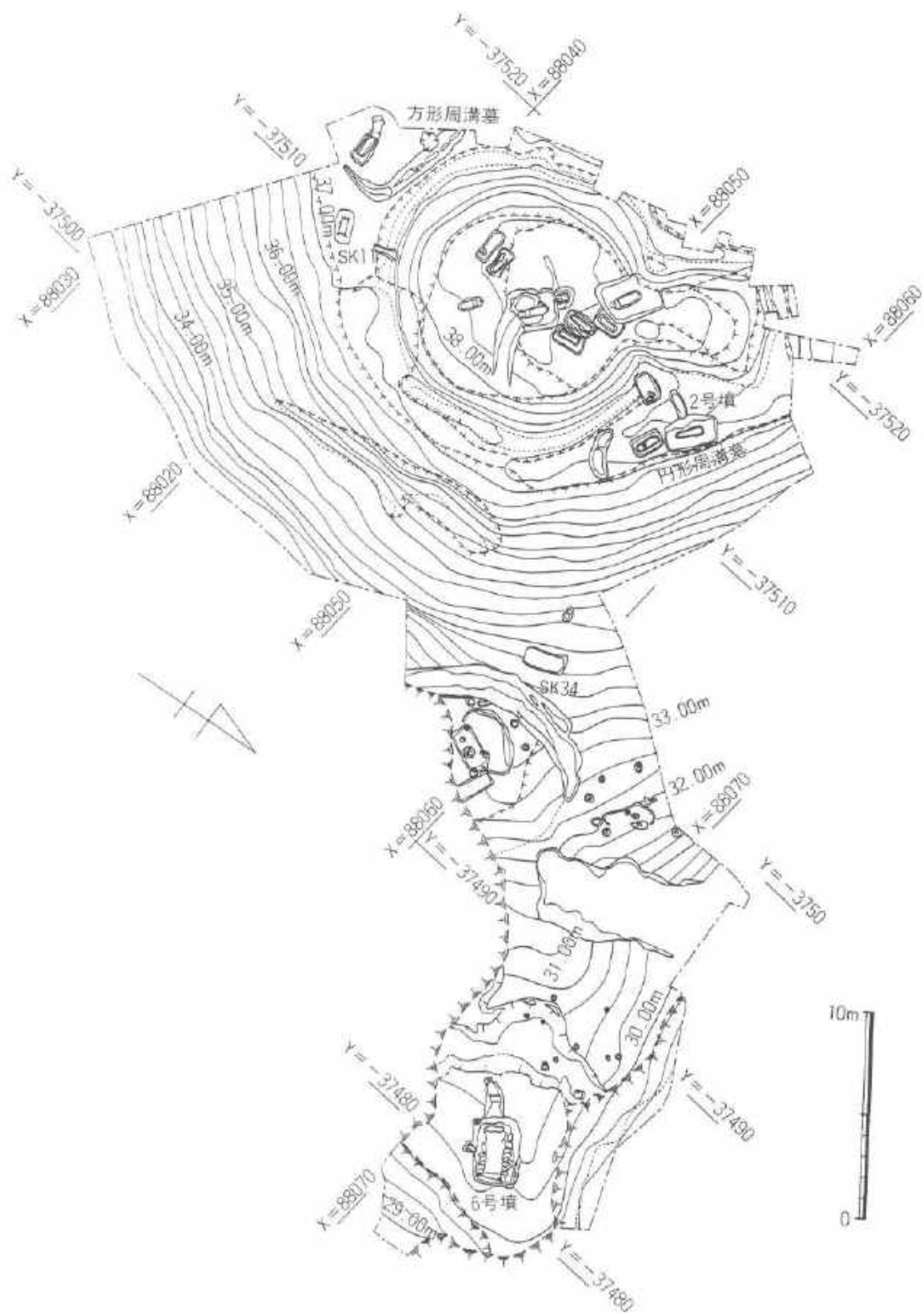
主体部 (第11図)

主体部は、後円部ほぼ中央に主軸をN-44°-Wにとる木蓋土壇墓である。墓壇は、Ⅱ層黒色土を除去後、2段掘りの長方形墓壇を検出したが、中央から東側を盗掘坑により攪乱されている。

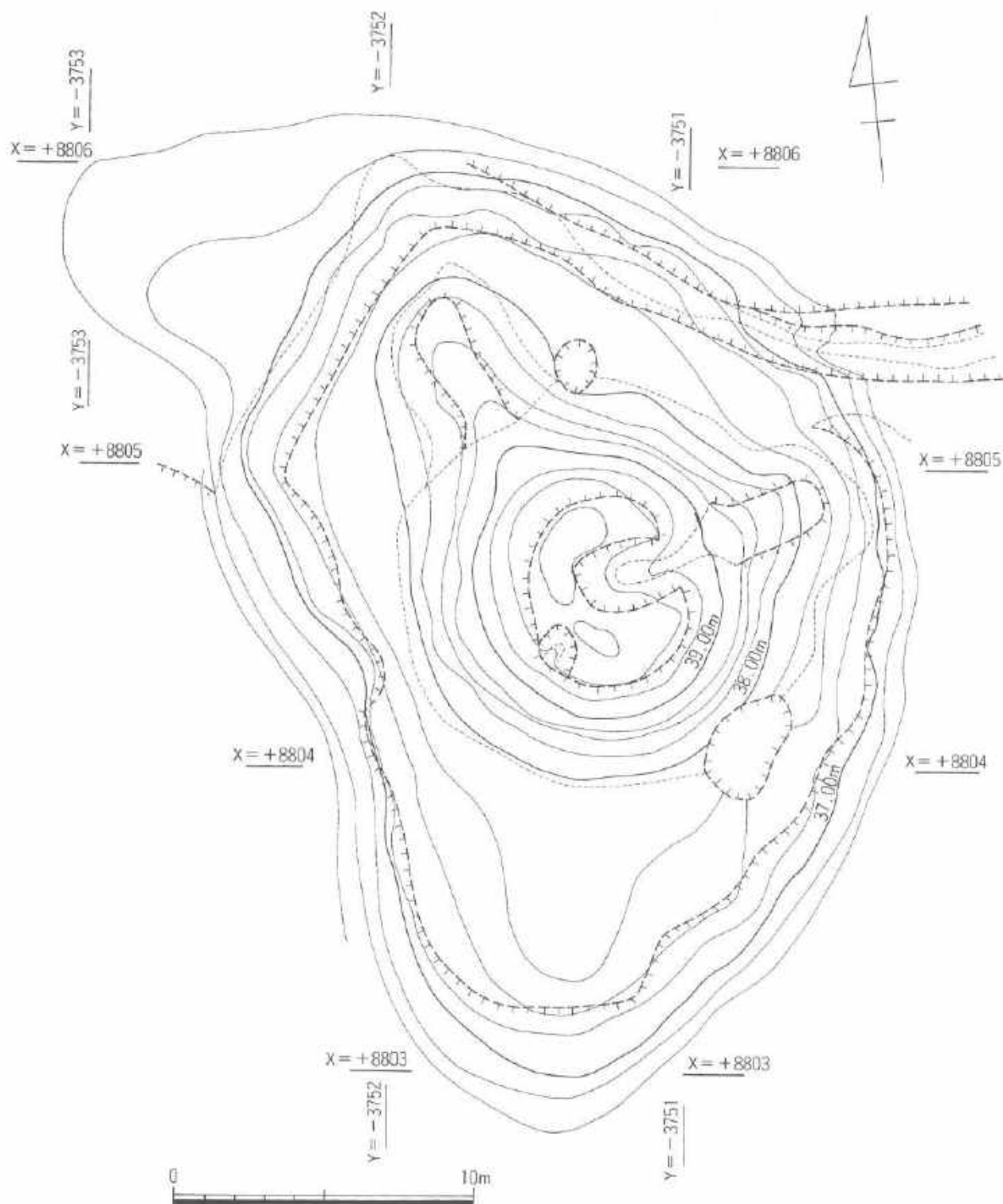
掘方は、墓壇長2.5m、幅2.2m、深さ0.5m、埋葬壇長1.38m、幅0.39m、深さ0.49m、内法長



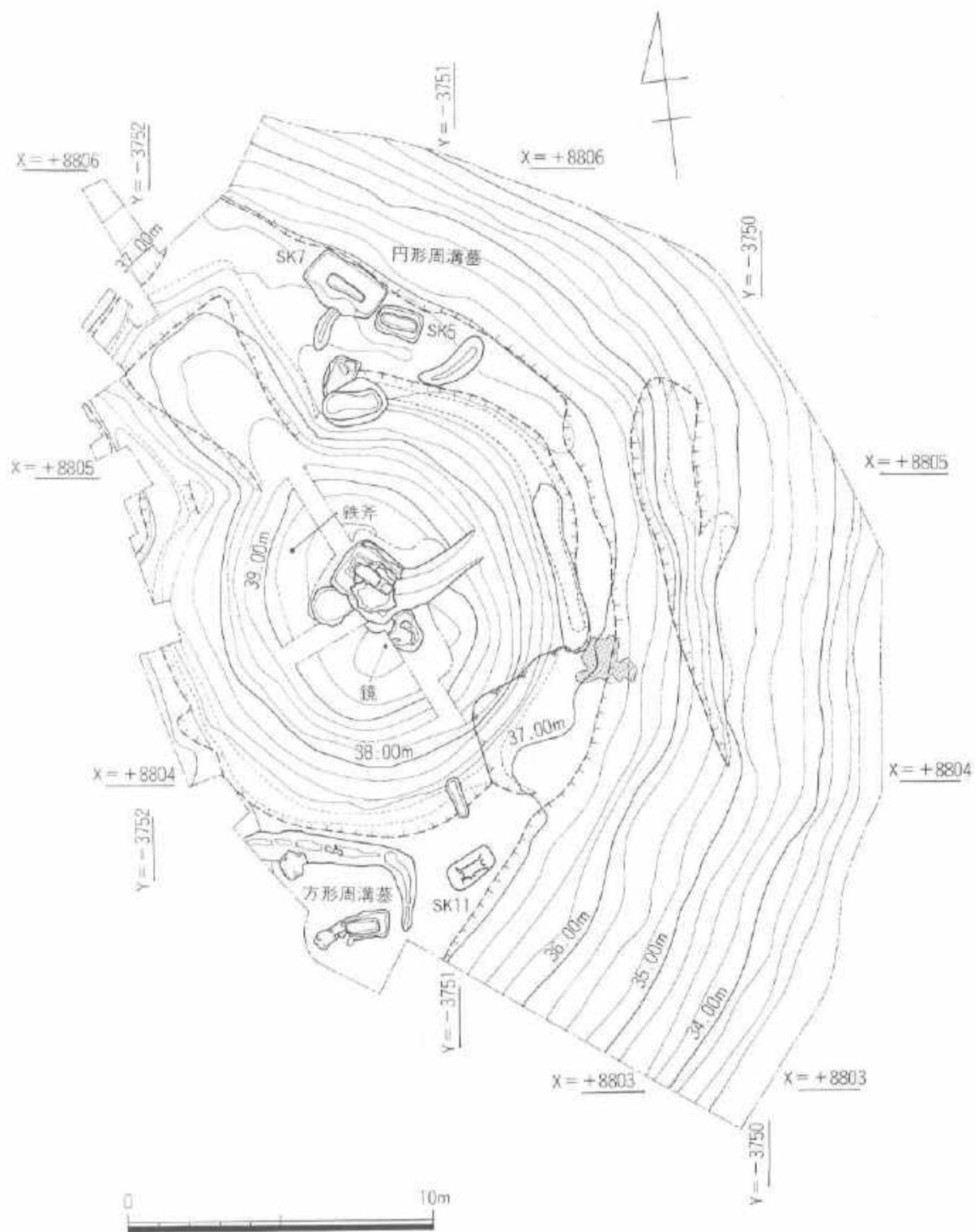
第6図 A-SP82出土ガラス玉実測図 (1/1)



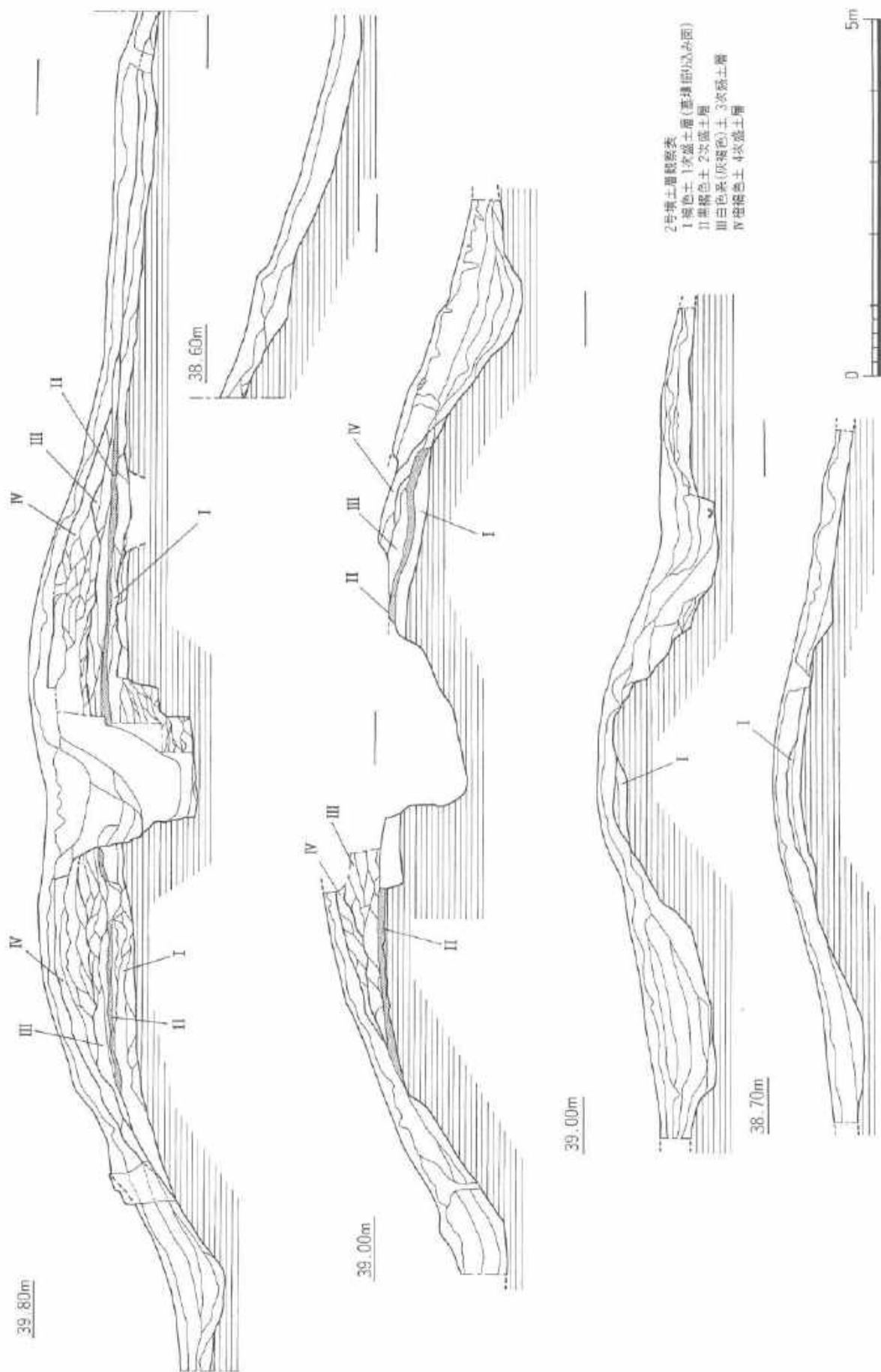
第7図 B区遺構配置図 (1/300)



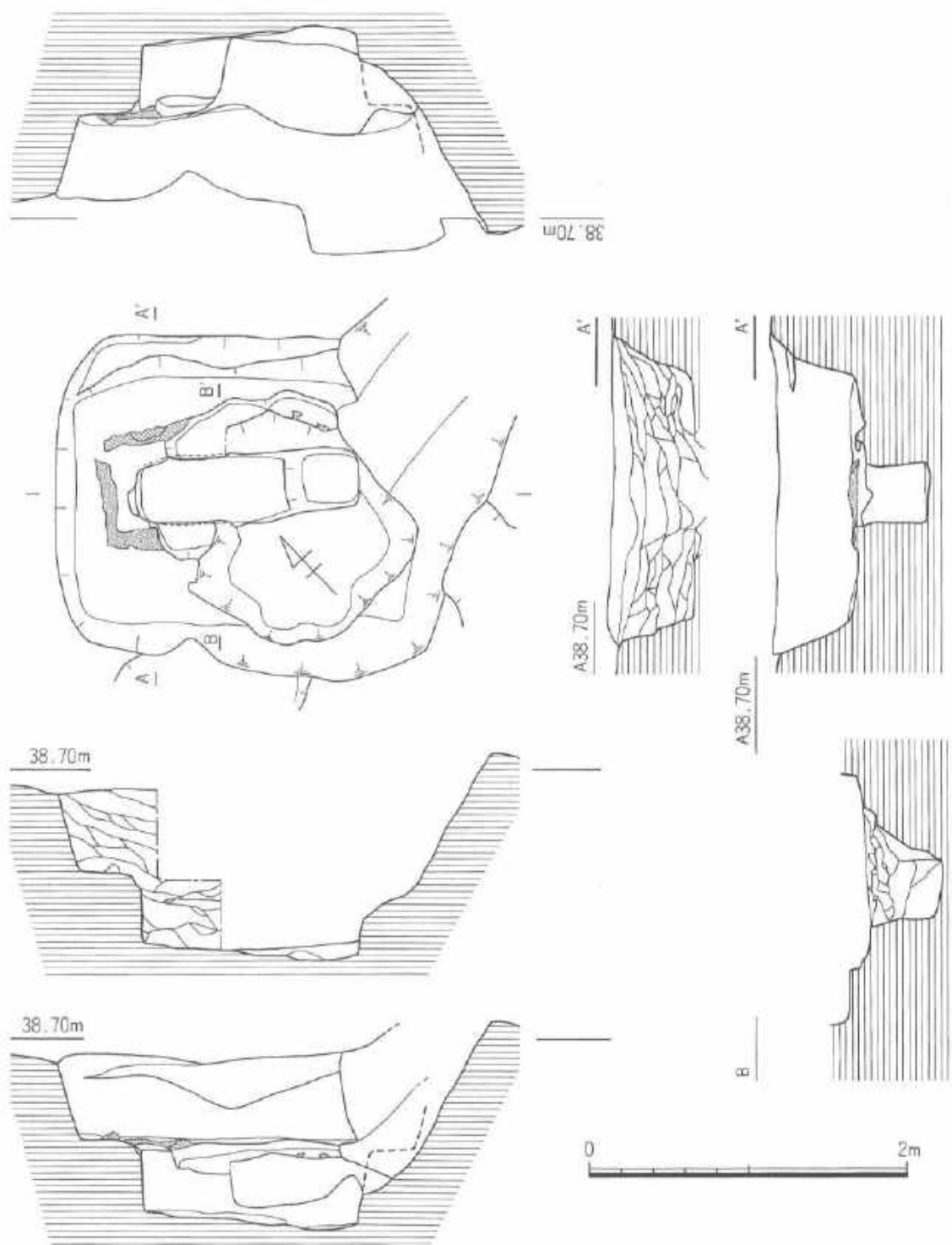
第 8 図 B区 2号墳現況測量図 (1/200)



第9図 2号墳遺構配置図 (1/200)

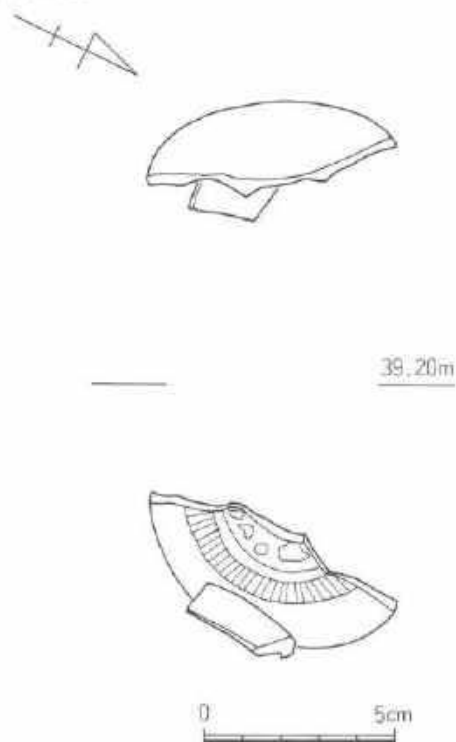


第10图 2号埧土层断面实测图 (1/80)

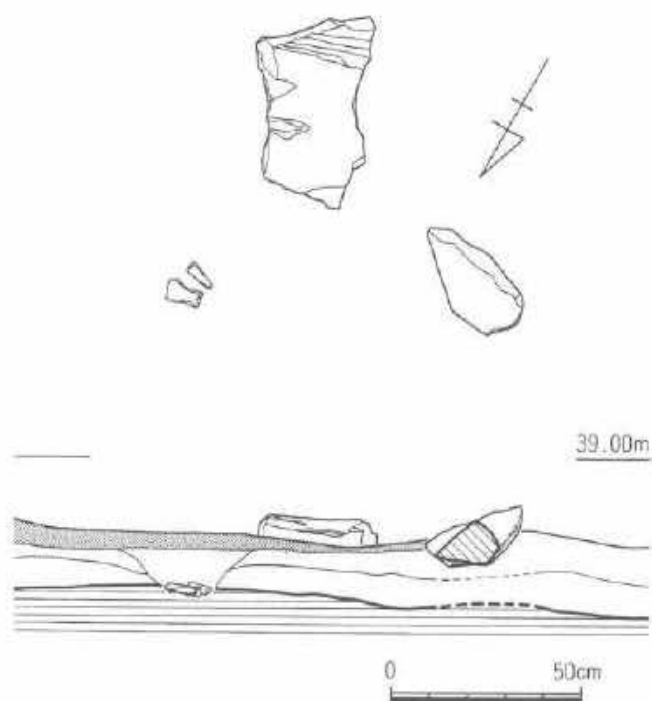


第11図 2号墳主体部遺構実測図 (1/40)

1.35m、幅0.41mで、埋葬墳上面北西側小口部にはコの字型に粘土が遺存しており、木蓋の密閉粘土と考えられる。埋葬墳床面は南東側小口部が一段掘り下げられており、頭位方向は北西と思われる。



第12図 2号墳盛土内鏡出土状況実測図 (1/2)



第13図 2号墳鉄斧出土状況実測図 (1/20)

出土遺物

主体部からの出土遺物は確認されていないが、後円部黒色土層下から埋葬祭祀に伴う鉄斧2点と後円部盛土中より獣形鏡1点が出土し、墳丘斜面および裾部から土器が出土している。

鏡 (第12図)

後円部盛土から出土した、面径8.7cmの獣形鏡で、3分の1を欠損する。鏡背面の文様構成は、紐座から重圈文帯・獣帯・二重円圈文帯・櫛園文帯・平縁となる。鏡面は、劣化が著しく獣帯文様の詳細は読み取れない。

鉄器 (第17図)

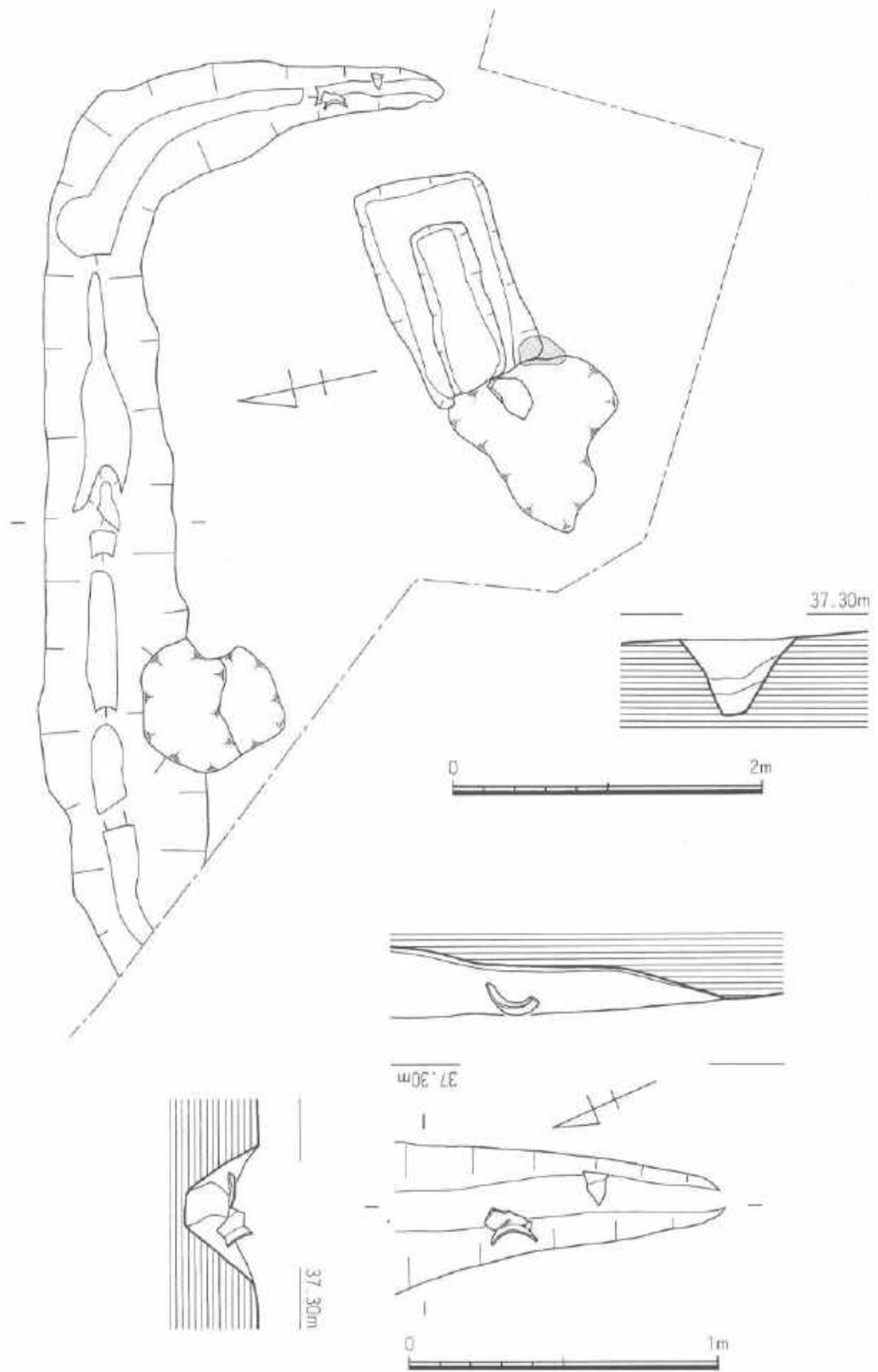
1・2は、Ⅱ層黒色盛土下より出土した完形の有袋鉄斧で、1は、基部幅4.4cm、刃部幅5.75cm、全長9.6cm、重さ130.11gを測る。刃部は緩やかに弧を描き、刃は片刃である。2は、小型の有袋鉄斧で、基部幅2.2cm、刃部幅2.2cm、全長7.4cm、重さ50.46gを測る。刃部は緩やかに弧を描き、刃は片刃である。袋部は、錆により肉眼では確認できないが、X線撮影の結果、図のような推定ラインを見出すことができた。3は、鉞の基部と考えられる。

残存長8.1cm、幅1.35cm、厚さ0.35cmで、断面形状は長方形を呈す。

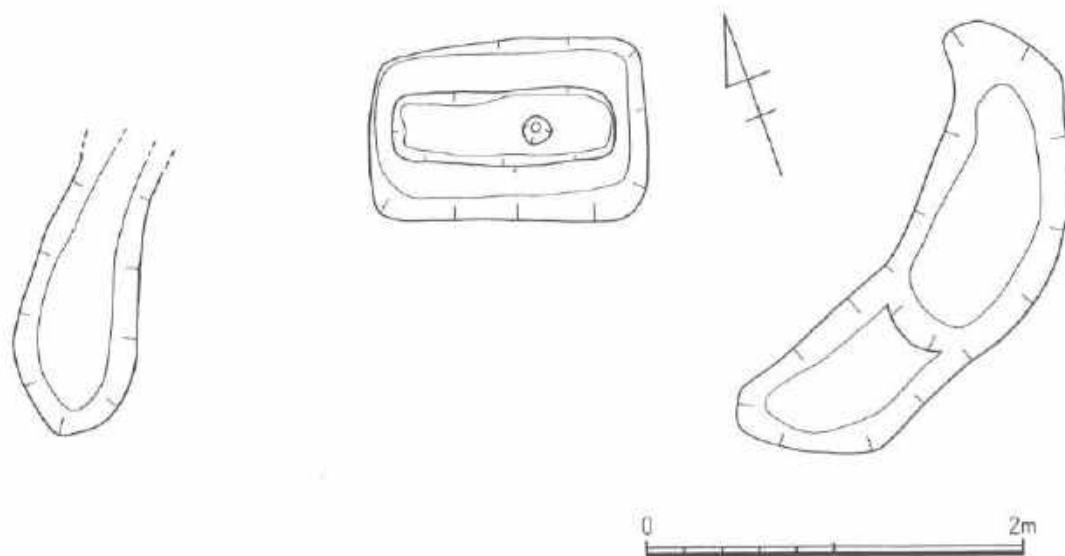
土師器 (第18図)

14・15・17・18は、二重口縁壺片である。14は、大きく外湾する口縁部片で、口縁端部は丸くおきめ、外面に2条の波状文と円形浮文を施す。

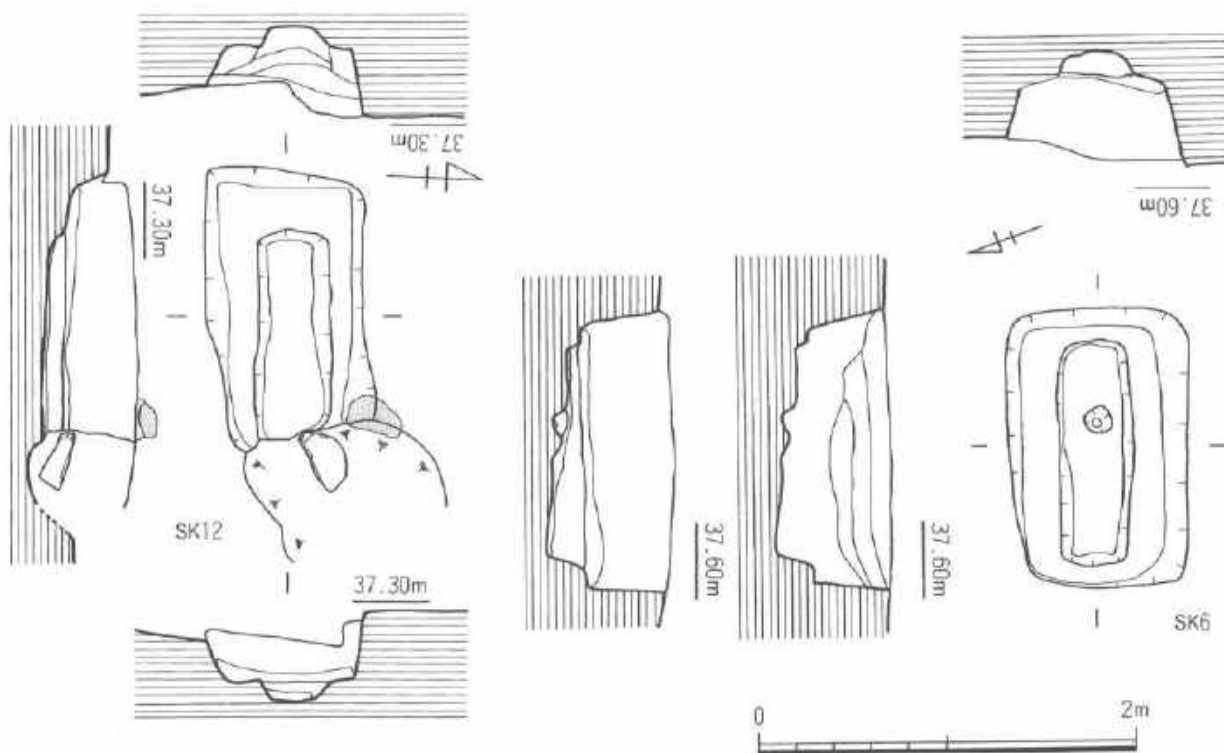
15は、短い頸部から大きく外に張出す1次口縁と外湾しながら立ち上



第14図 方形周溝墓遺構実測図 (1/40・1/20)



第15図 円形周溝墓遺構実測図 (1/40)



第16図 方形周溝墓・円形周溝墓主体部遺構実測図 (1/40)

がる2次口縁をもち、口縁部外面には波状文を施す。16は、壺片で、内面ケズリ外面ハケ調整である。17・18は二重口縁壺底部で、凸形の底部を有する。内面ハケ、外面ハケ後ミガキを行う。19は甕で、口縁端部は摘み上げている。

方形周溝墓

2号墳後円部南西に隣接して築かれた方形周溝墓で、調査区の南端に位置するため周溝と主体部を1基検出したに止まる。

墳丘（第14図）

盛土の有無は、確認できておらず墳丘は定かではない。また、部分的な調査のために規模を明らかにしえないが、現段階での規模は、長軸4.6 m、短軸3.8 mで、東側に陸橋部を有する方墳或いは方形周溝墓と考えられる。周溝は、最大幅0.9 m、深さ0.6 mの断面逆台形のもので陸橋部付近は幅約0.2 m前後、深さ約0.15 mと狭く浅くなっている。

主体部（SK12第16図）

主体部は、墳丘の東よりに1基確認されているが、墳丘中央部が未調査のため、中央部にも主体部の存在が予想される。主体部は、主軸をN-78°-Eにとる2段掘りの長方形土壇墓で、南西部を攪乱のため欠損する。掘方は、墓壇長1.4 m、幅0.82 m、深さ0.5 m、埋葬壇長1.06 m、幅0.4 m、内法長1.02 m、幅0.28 m、深さ0.2 mである。

遺物（第17図23）

周溝内出土の甕で、口縁部から肩部が残存する。内面ヘラ削り、外面タタキ調整を施す。口縁部は若干内湾しながら立ち上がり、口縁端部を摘み上げている。

円形周溝墓

2号墳東側くびれ部に隣接して築かれた2条の弧状溝を伴う土壇墓で、円形周溝墓と考えられる。

墳丘（第15図）

南側の溝は、2号墳周溝を若干切る形で掘り込まれ、北側の溝はSK7により切られている。

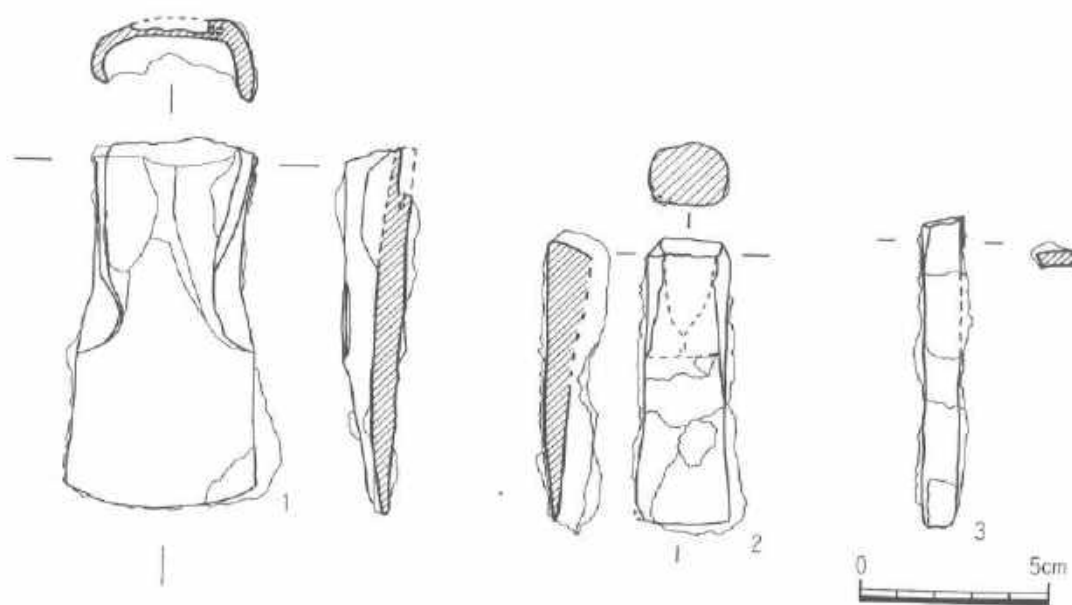
墳丘の有無は不明である。墳丘規模は、径約5 mの不整円形で、西側は、2号墳の溝を共有しており、東側は溝を掘り込んでいない。

主体部（SK5第16図）

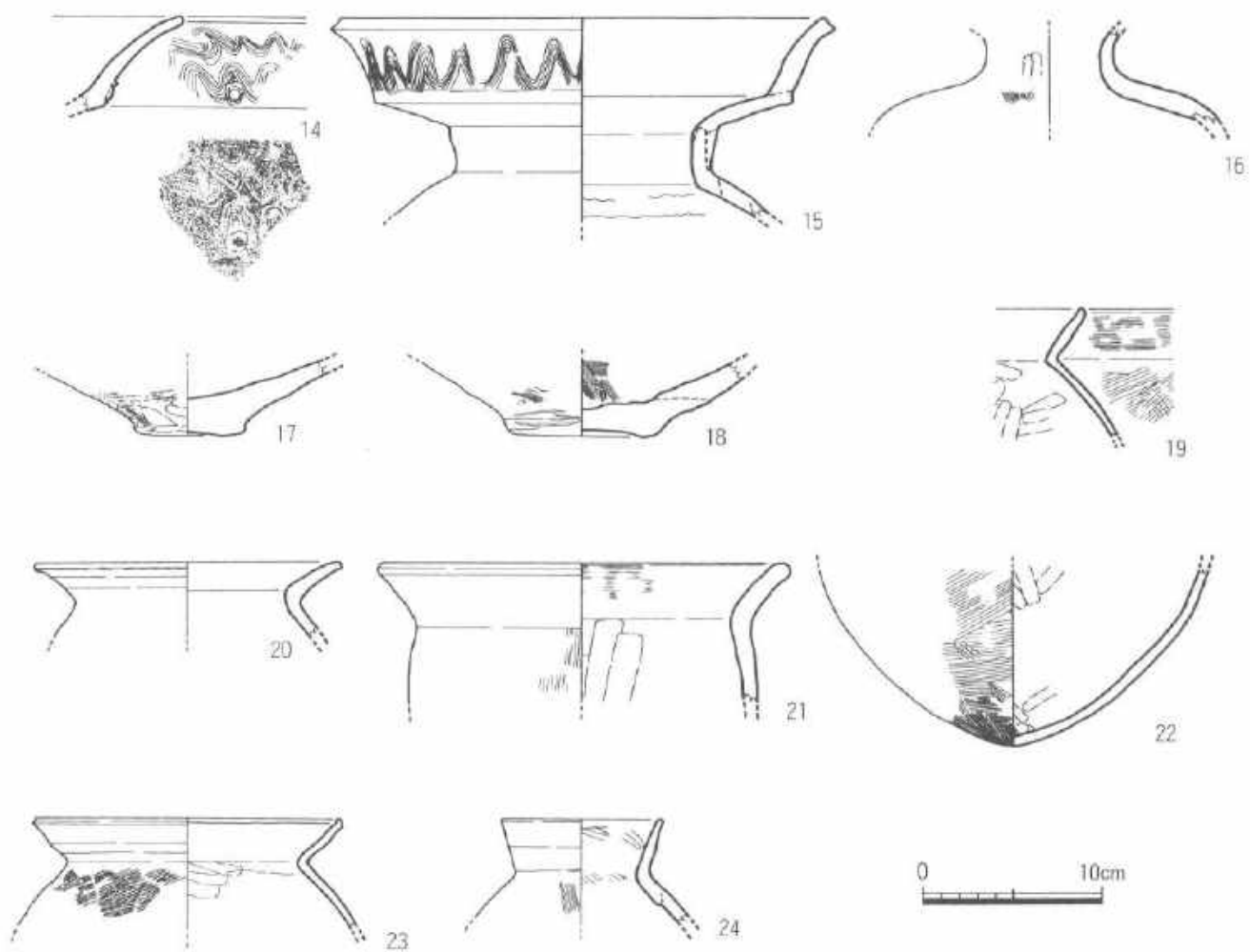
主体部は、主軸をN-70°-Wにとる2段掘り土壇墓で、掘方は、墓壇長1.48 m、幅0.96 m、深さ0.48 m、埋葬壇長1.18 m、幅0.38 m、深さ0.1 m、内法長1.08 m、幅0.3 mである。

遺物（第17図24）

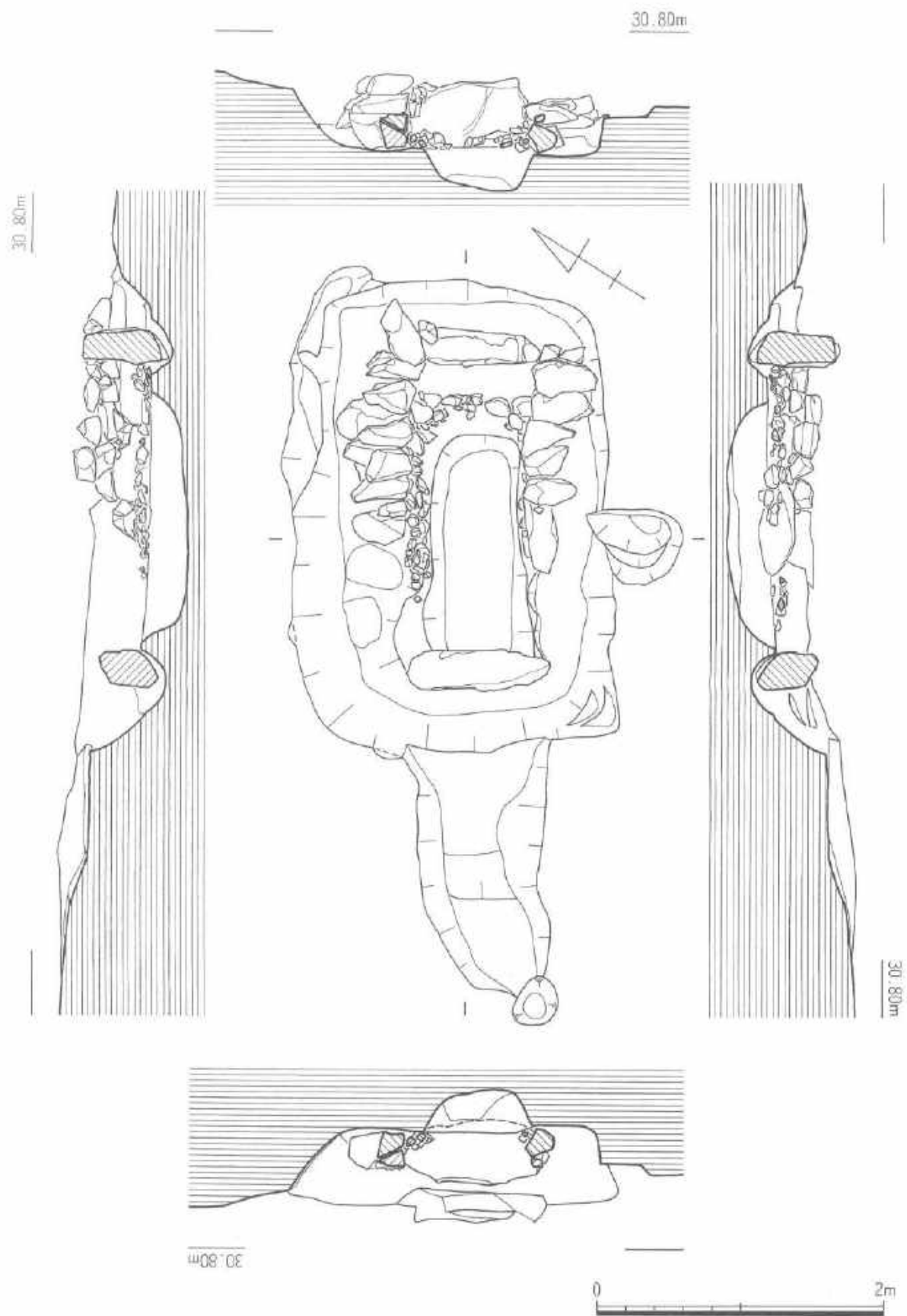
南側周溝から出土した直口壺で、口縁部から肩部までが残存する。口径8.8 cm、残存高5.6 cmで、調整は、内外面ともにハケ調整後ナデを行っている。



第17図 2号墳出土鉄器実測図 (1/2)



第18図 2号墳・方形周溝墓・円形周溝墓出土遺物実測図 (1/4)

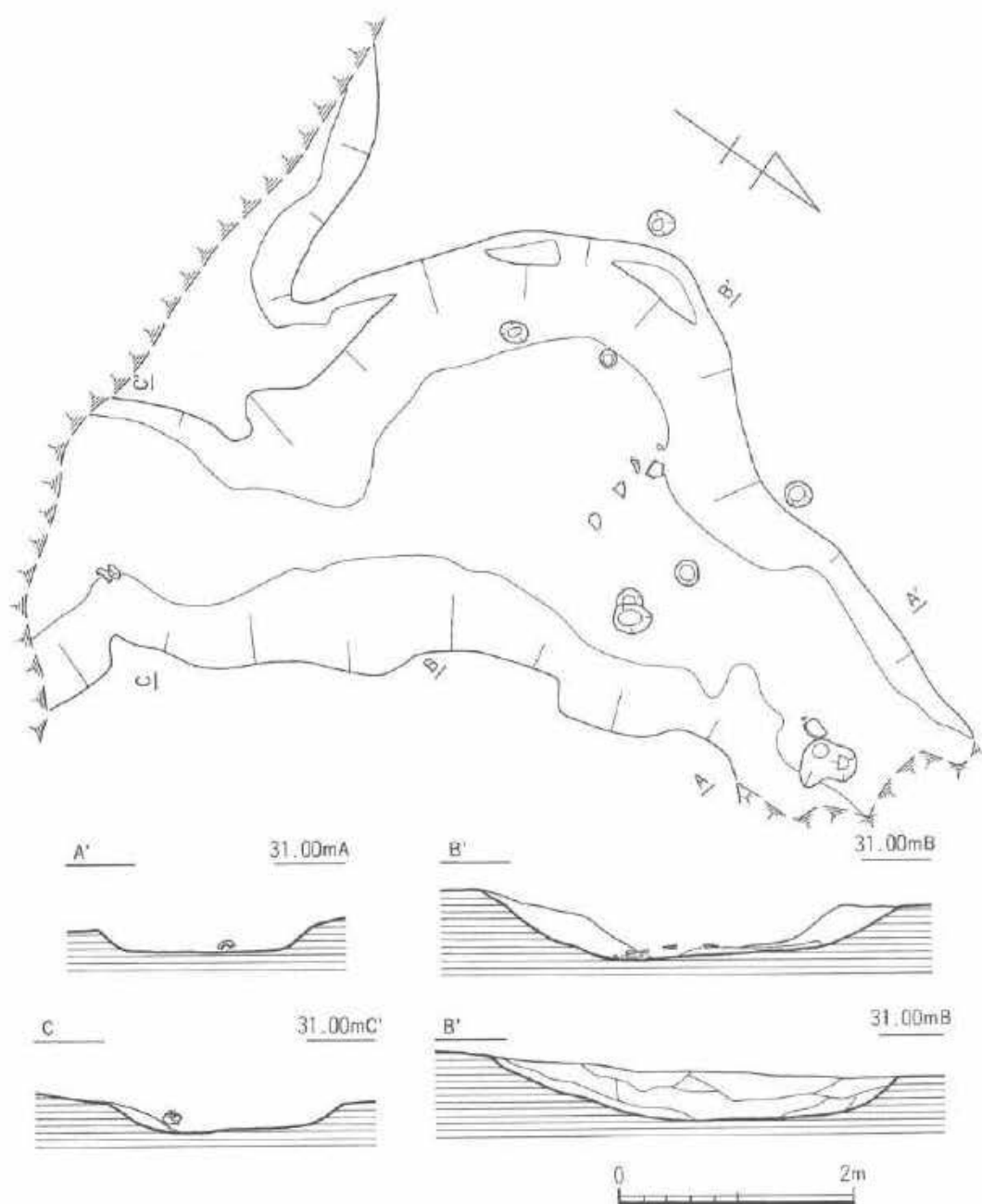


第19図 6号墳石室遺構実測図 (1/40)

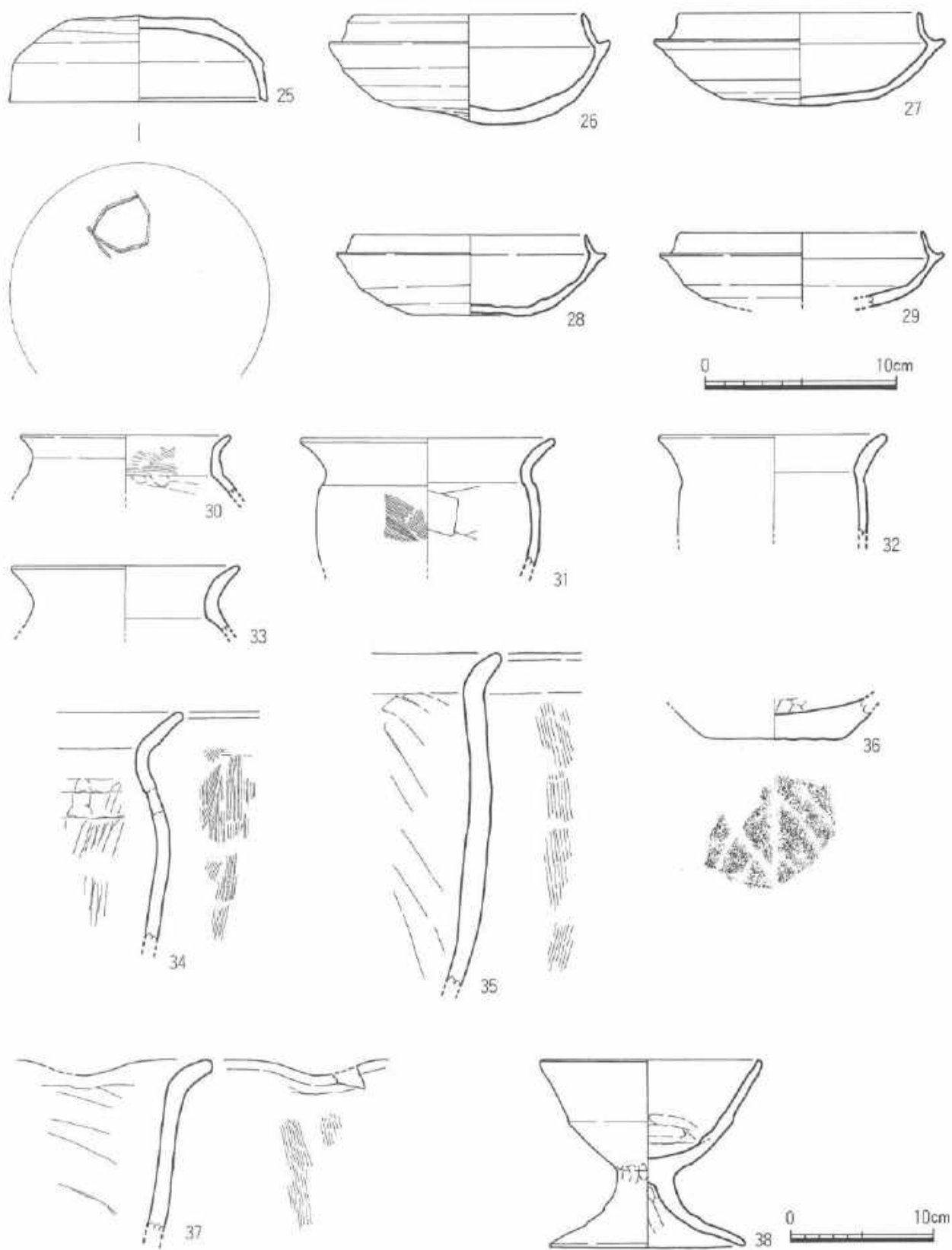
6号墳（B区2号墳）

6号墳は、2号墳から東に向かって緩やかに傾斜する丘陵の先端部、標高30～30.5mに位置する。調査前、墳頂部には祠が建立され、石室の蓋石と思われる石が、立石として祭られていた。

また、周辺の地形もかなりの削平を受けているものと考えられ、特に丘陵南側は削られて崖面となっていた。調査は、立石除去後、墳丘中心からほぼ東西南北方向に十字にトレンチを入れ、墓壇検出後掘り下げをおこなった。



第20図 6号墳周溝遺構実測図（1/60）



第21图 6号墳周溝出土遺物実測図 (1/3・1/4)

墳丘（第7図）

墳丘は、西側を除く全ての斜面が削平を受けており、墳頂部においても表土直下から地山面あるいは旧表土面が確認され、盛土の有無は不明である。墳丘西側は、残存しており、尾根筋と直交する溝（S D 24）を検出した。溝は、丘陵切断の溝と考えられるが、両端が削平されているため、形態・規模の詳細は確定できない。墳丘規模は、西側墳丘裾から石室中心を半径とすると、径約10m前後の墳丘が想定できる。

主体部（第19図）

主体部は、N-58°-Eを主軸とし、南西方向に開口する竪穴系横口式石室で、墓壇長軸3.27m、短軸2.25m、玄室プラン長軸1.95m、短軸0.87m、残存高0.46mである。石室は、石材の多くを失っており、残存しているのは奥壁の腰石と奥壁に接する側壁部分の一部と框石で、奥壁・框石には板状の石材を用い、側壁には板状の石を立てて腰石とし、その上に角礫を横積みしている。床面には拳大の礫を敷き床石としている。墓道は、若干南に振れながら框石外方から周溝に向かい延びており、中央付近に緩やかな段を有す。

出土遺物（第21図）

周溝から多数の須恵器・土師器が出土した。特に周溝底面より出土した坏蓋・高坏は、本古墳の年代を決定する良好な資料となる。いずれも6世紀中頃に位置付けられる。

7号墳（B区3号墳）

6号墳と同一の緩斜面丘陵尾根線上、標高32～33.5mに位置し、丘陵下方に6号墳、上方に2号墳を望む。調査時、墳丘は削平され、墳丘東半は崖面となり消失していた。このため、当初は古墳という認識を有しておらず、表土除去後、主体部堀方及び周溝を確認した段階で古墳と認識し調査を行った。

墳丘（第7・22図）

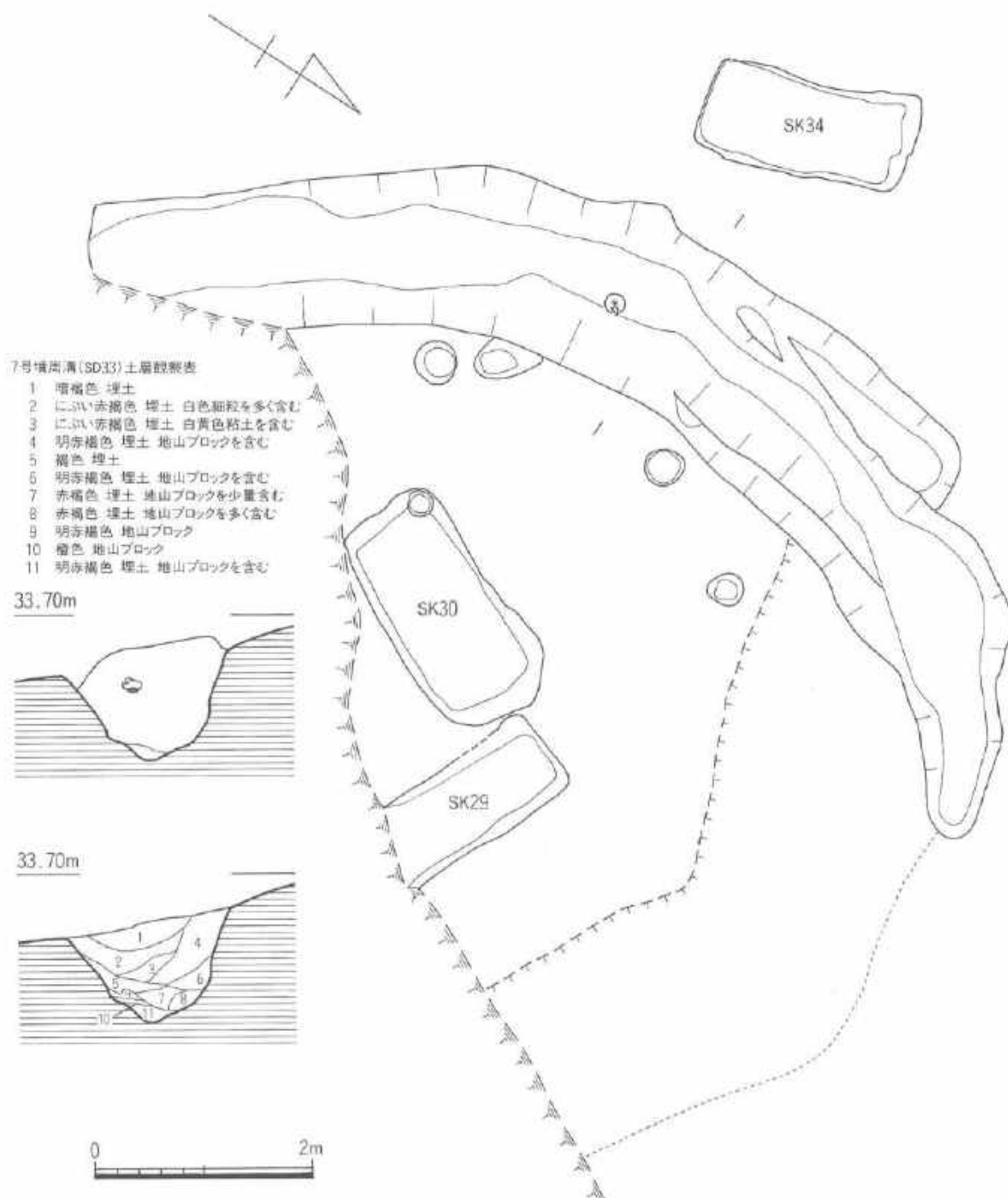
墳丘は、調査時すでに盛土を削平により消失しており、墳丘上部の構造は不明である。墳裾部は、丘陵斜面下部にあたる東半部が、地山削り出しによる整形であり、上部の西半部には周溝（S D 33）を掘り込み墳丘の明確化を図っている。墳形・墳長は、東半部を失うため確定できないが、周溝の形態から径約10mの円墳が推定される。周溝は、半ばを消失するものの、幅1.7m、深さ1mの馬蹄形溝であると考えられる。なお、周溝西側よりS K 34を検出したが性格は不明である。

主体部（第23図）

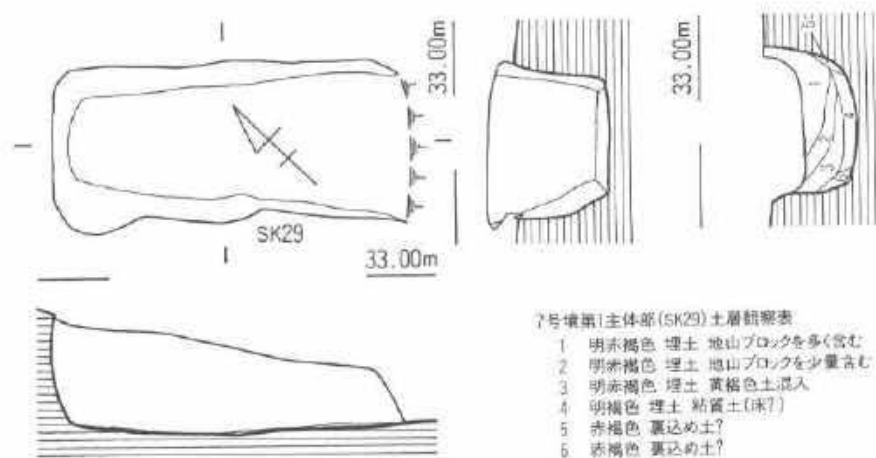
墳丘頂部から主体部を2基検出した。

第1主体部（S K 29）

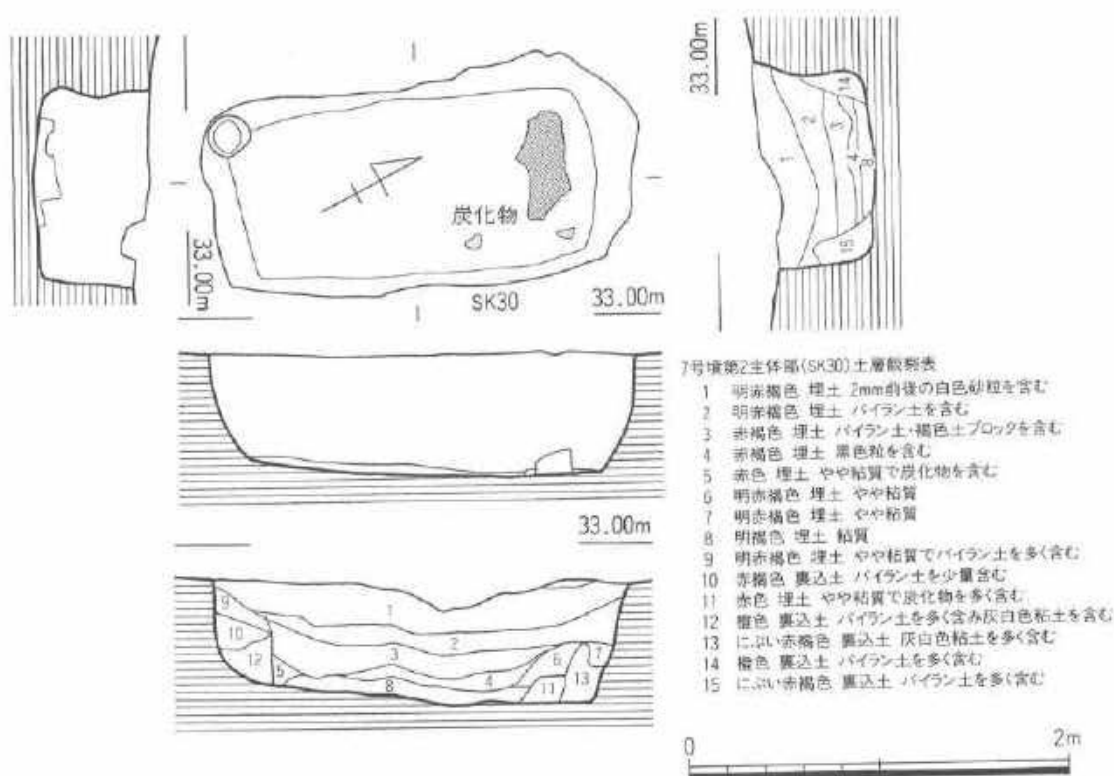
墳丘残存部の北東より、第2主体部の北側に位置し、東側を欠損する。墓壇規模は、長軸1.90m、短軸0.88m、深さ0.52m、内法長軸1.82m、短軸0.72mで、主軸をN-68°-Wにとる。



第22図 7号墳遺構配置図 (1/60)



第1主体部(SK29)



第23図 7号墳主体部遺構実測図 (1/40)

棺形は、土層観察により木棺の裏込め土と思われる立ち上がりを確認したが、木棺墓とするにはやや根拠にかけ、ここでは木棺墓の可能性を示唆するに止める。頭位方向は、東半を欠損するため明らかではない。

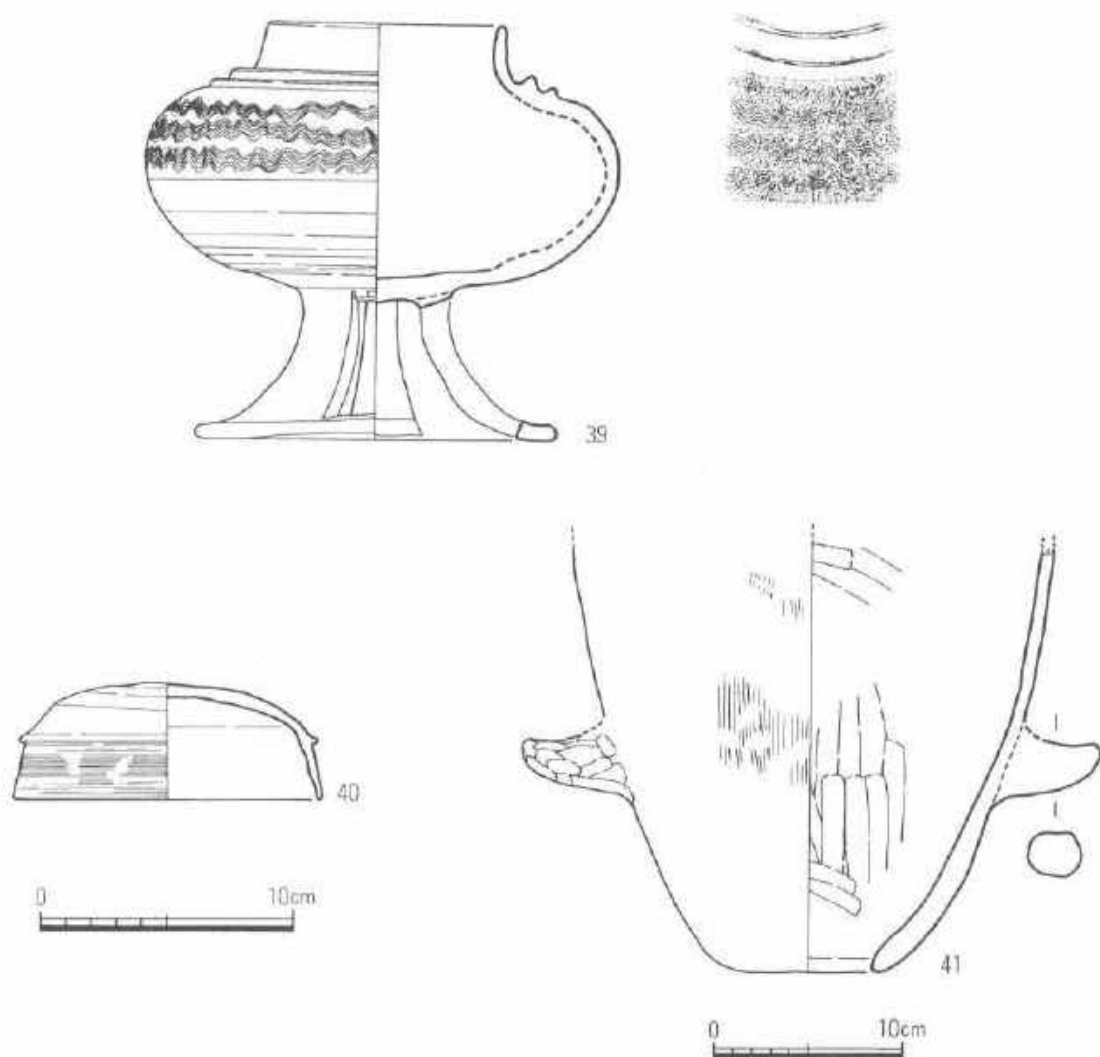
第2主体部 (SK30)

墳丘残存部のほぼ中央に位置し、第1主体部に直交する。墓壇規模は、長軸2.23m、短軸1.16m、深さ0.62m、内法長軸1.91m、幅0.91mで、主軸をN-26°-Wにとる。棺形は、土層観察の結果、

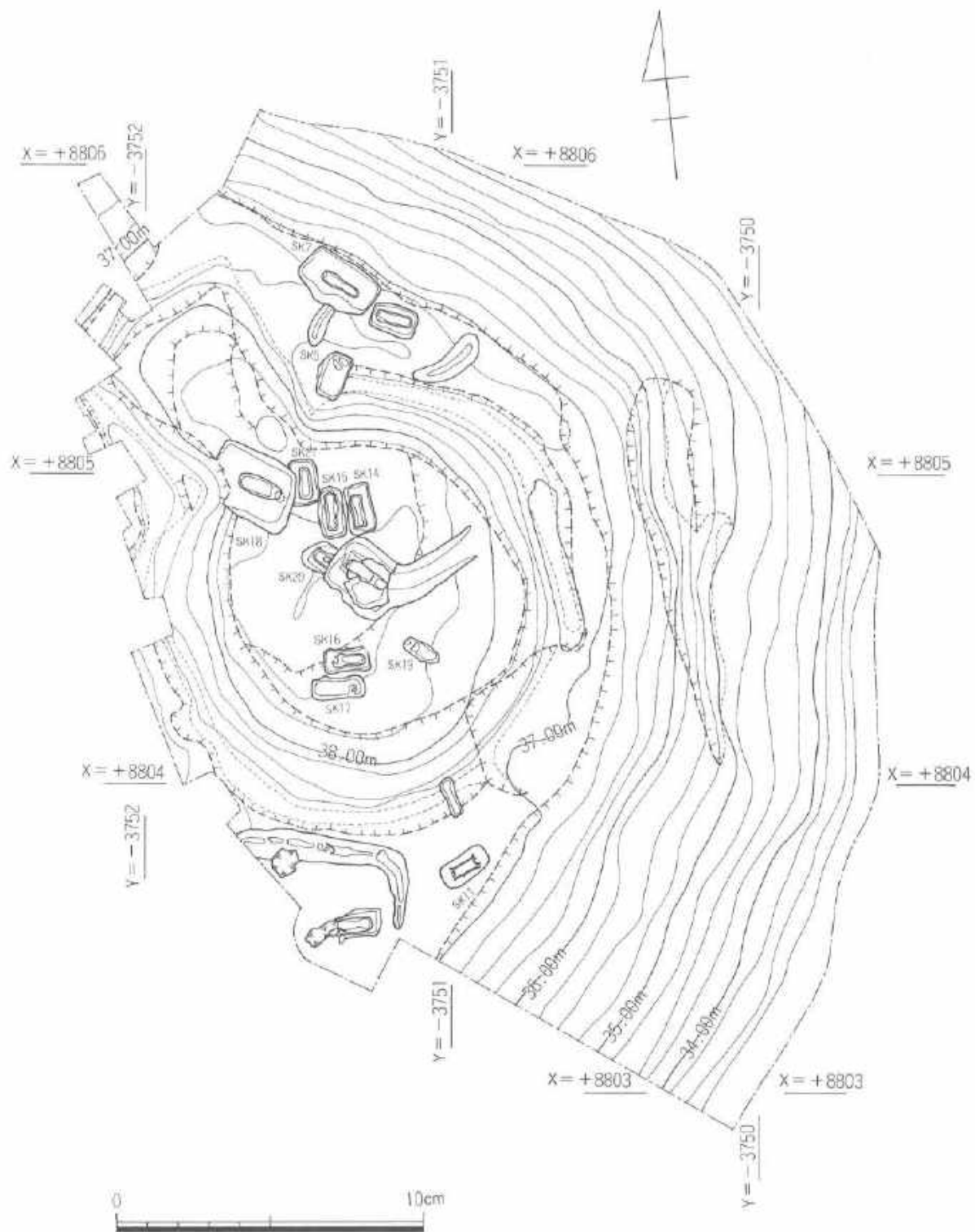
小口部及び側面に裏込め土と木棺の立上りを確認し、木棺墓であるとの認識を得た。木棺の規模は、長軸1.5m、短軸0.52mであり、木棺の組合せ方法は小口部両端の状況が未確認のため不明である。床面には褐色の粘質土が堆積していたが、床板等は確認できなかった。また、床面両小口部から炭化物が出土し、特に北側小口部からは大量の炭化した木片が白色粘土と共に検出された。

遺物（第24図）

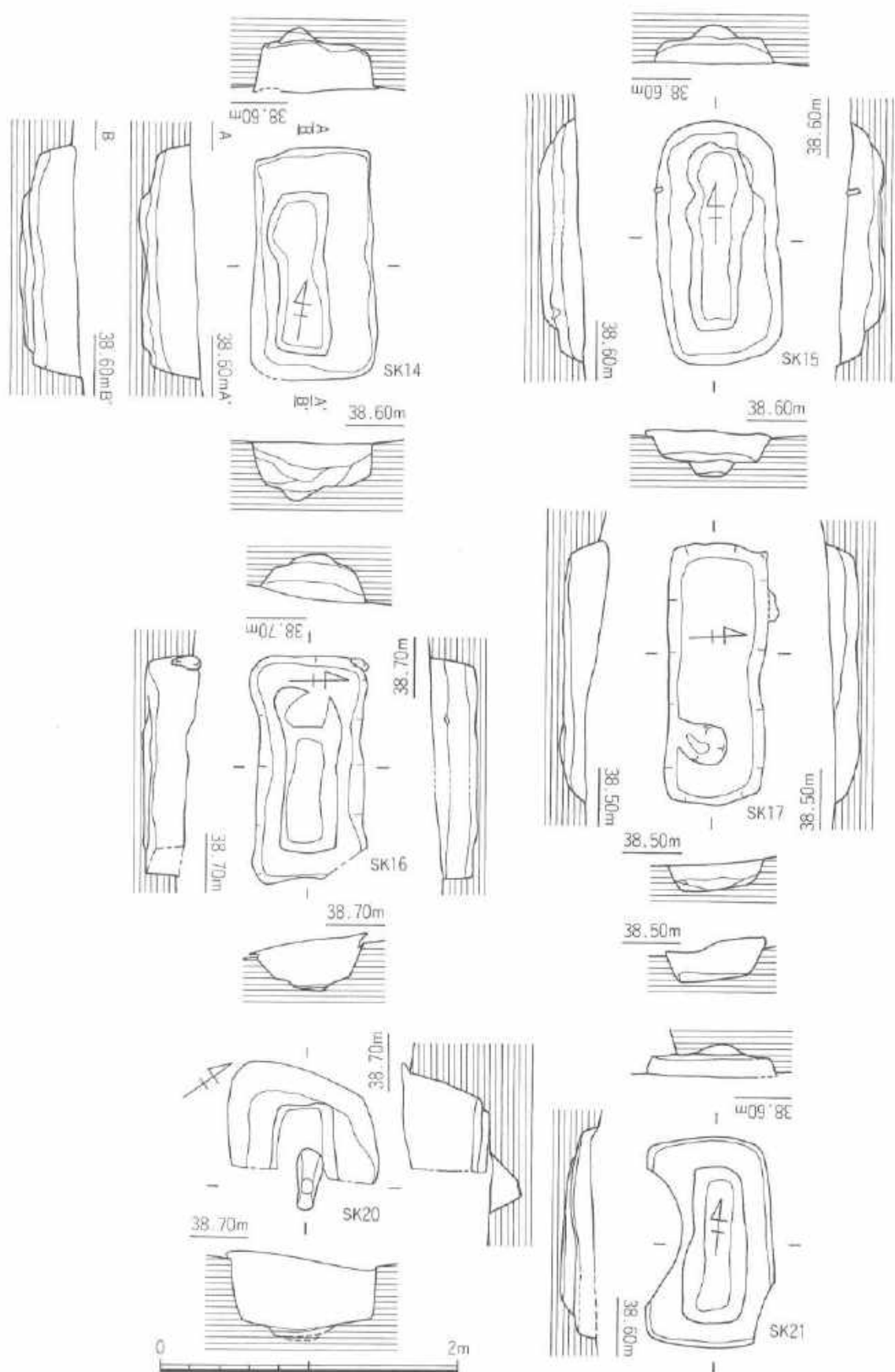
遺物は、周溝から須恵器・土師器を検出した。39は、口径9.6cm、器高16.4cmの脚付短頸壺で、頸部下に2段の段を持ち、肩部に3条の波状文を施す。脚部は、4つの長方形透かしを開け脚端部は丸くおさめる。



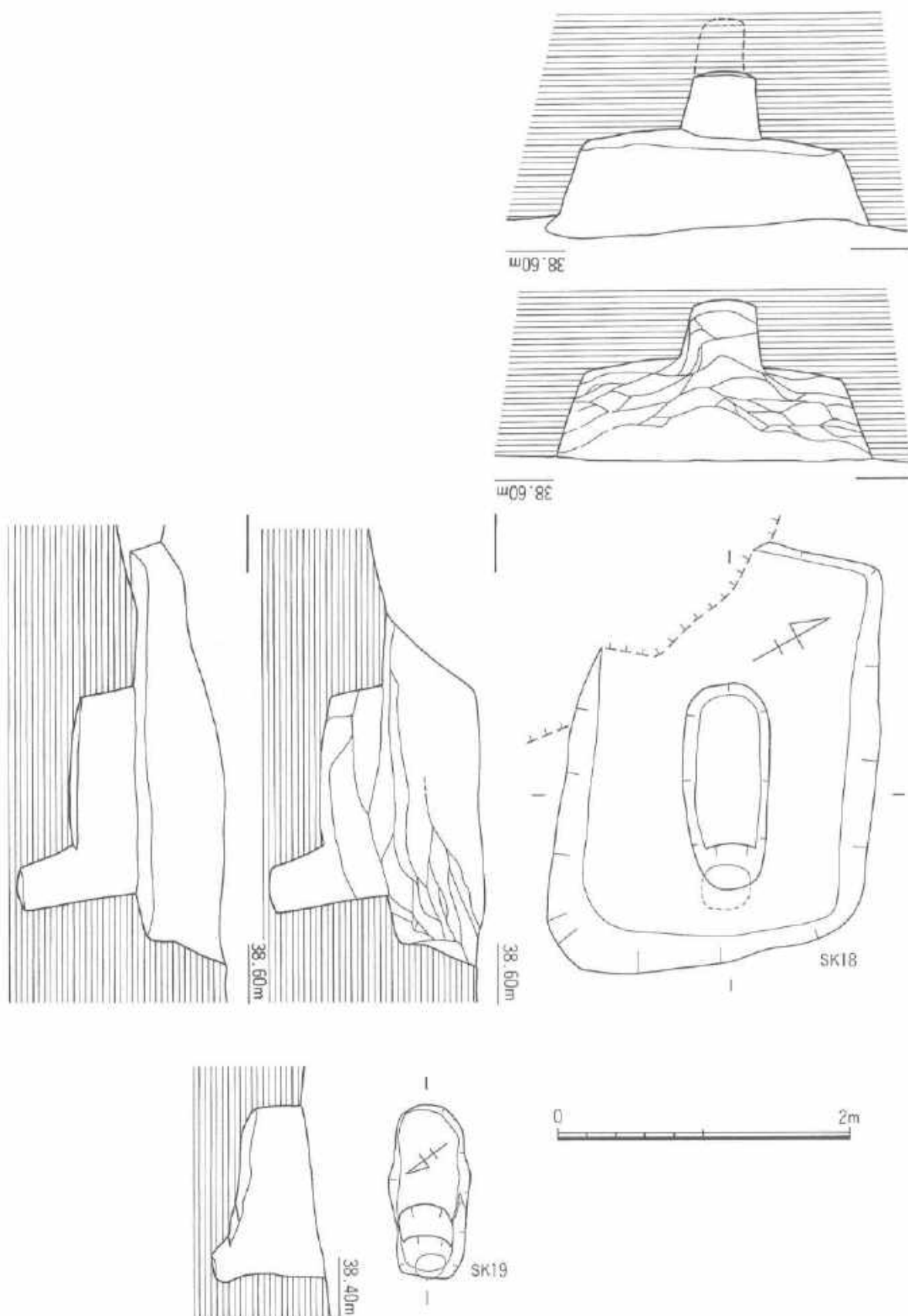
第24図 7号墳周溝出土遺物実測図（1/3・1/4）



第25図 2号墳盛土下遺構配置図 (1/200)



第26図 B-SK14・15・16・17・20・21遺構実測図 (1/40)



第27図 B-SK18・19遺構実測図 (1/40)

その他の遺構

弥生時代遺構

2号墳調査終了後、盛土を除去したところ、盛土下より8基の土壇墓を検出した。土壇墓はいずれも、墳丘築造時の整地により削平を受けていると思われるが、墓壇は比較的良好に遺存している。

S K 14 (第26図1)

主軸をN-40° -Wに取る二段掘りの長方形土壇墓で、掘方は、墓壇長1.56m、幅0.78m、深さ0.48m、埋葬壇長1.08m、幅0.31m、深さ0.1m、内法長0.98m、幅0.26mである。

S K 15 (第26図2)

主軸をNSに取る隅丸長方形の2段掘り土壇墓で、掘方は、墓壇長1.63m、幅0.79m、深さ0.2m、埋葬壇長1.25m、幅0.31m、深さ0.1m、内法長1.12m、幅0.26mである。

S K 16 (第26図3)

主軸をN-88° -Wに取る隅丸長方形の2段掘り土壇墓で、掘方は、墓壇長1.46m、幅0.71m、深さ0.34m、埋葬壇長1.07m、幅0.33m、深さ0.05m、内法長0.7m、幅0.23mである。

S K 17 (第26図4)

主軸をN-86° -Wに取る長方形土壇墓で、掘方は、墓壇長1.73m、幅0.64m、深さ0.25m、内法長1.59m、幅0.47mである。

S K 18 (第27図1)

主軸をN-60° -Wに取る隅丸長方形の2段掘り土壇墓で、埋葬壇の足元を1段掘り下げるタイプのものである。また、西側端部を2号墳くびれ部の削り出しによって削平されている。掘方は、墓壇長2.85m、幅2.10m、深さ0.68m、埋葬壇長1.40m、幅0.56m、深さ0.45m、内法長0.74m、幅0.22mで、埋葬壇より足元掘込部の深さは、0.8mである。

S K 19 (第27図2)

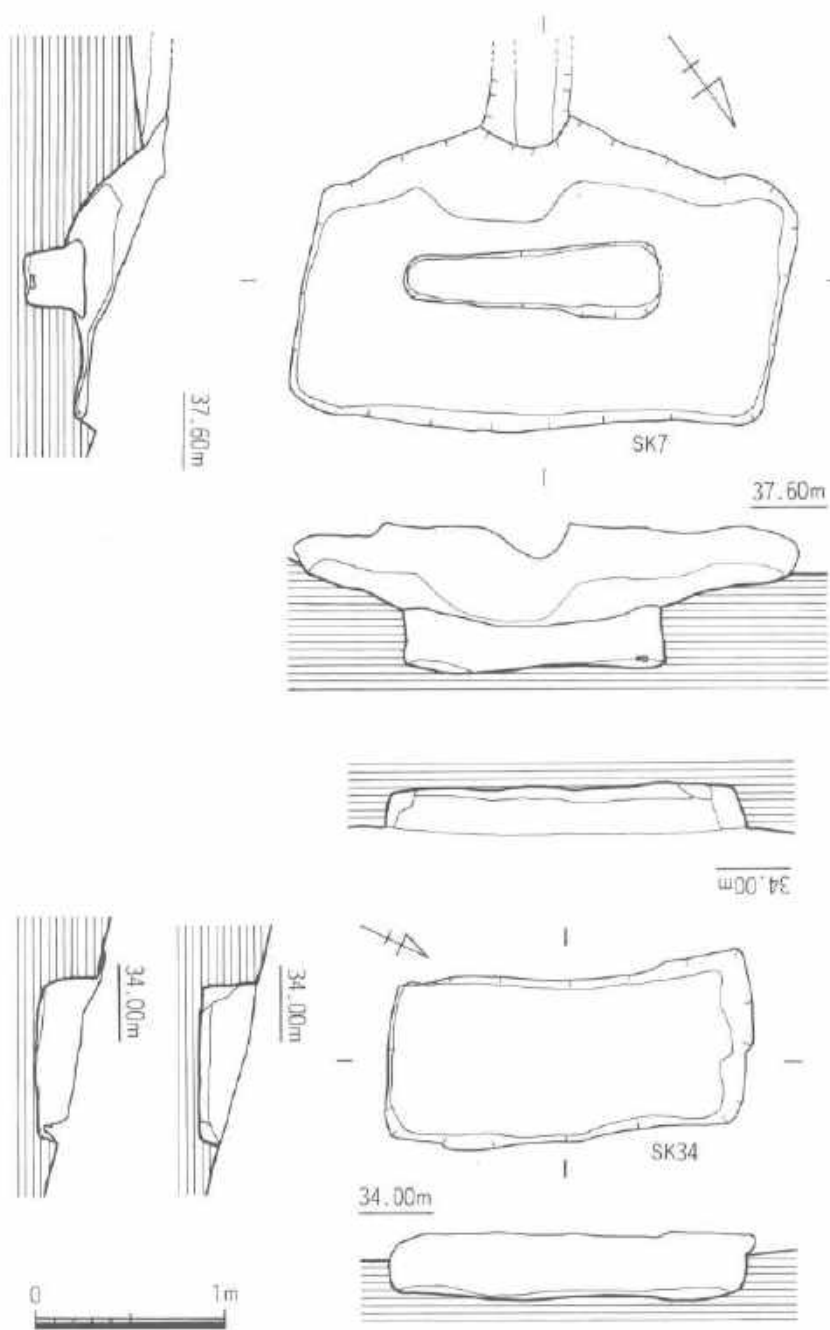
主軸をN-54° -Wに取る隅丸長方形の土壇墓で、S K 18と同じく埋葬壇の足元を1段掘り下げている。掘方は、墓壇長1.18m、幅0.55m、深さ0.46m、内法長1.16m、幅0.41mで、埋葬壇より足元掘込部の深さは、0.75mである。

S K 20 (第26図5)

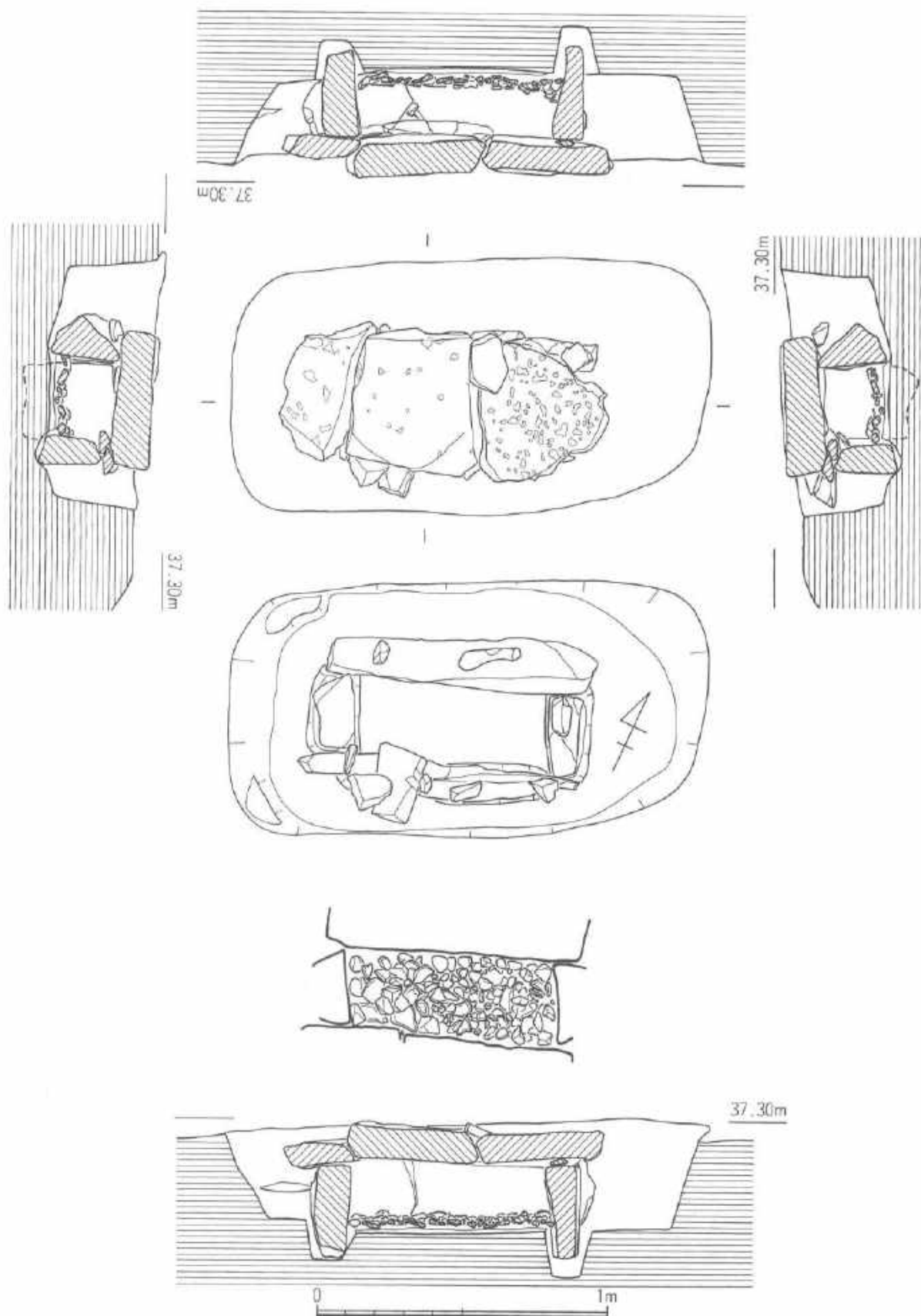
主軸をN-56° -Wに取る隅丸長方形の2段掘り土壇墓で、東側の過半を2号墳主体部によって切られている。掘方は、墓壇長0.94m、幅0.98m、深さ0.52m、埋葬壇長0.70m、幅0.42m、深さ0.06m、内法長0.3m、幅0.3mである。

S K 21 (第26図6)

主軸をN-6° -Wに取る隅丸長方形の2段掘り土壇墓で、墓壇の西側を一部S K 18によって切られる。掘方は、墓壇長1.41m、幅0.85m、深さ0.13m、埋葬壇長0.86m、幅0.35m、深さ0.08m、内法長0.95m、幅0.22mである。



第28図 B-SK7・34遺構実測図 (1/40)



第29図 B-SK11遺構実測図 (1/20)

古墳時代遺構

SK7 (第28図1)

主軸をN-54°-Wに取る長方形の2段掘り土墳墓で、円形周溝墓の北側溝を切って掘り込まれている。掘方は、墓壇長2.46m、幅1.40m、深さ0.5m、埋葬壇長1.36m、幅0.20m、深さ0.2m、内法長1.36m、幅0.34mである。遺物は、埋葬壇内より鉄族(第30図)が1点出土している。



SK11 (第29図)

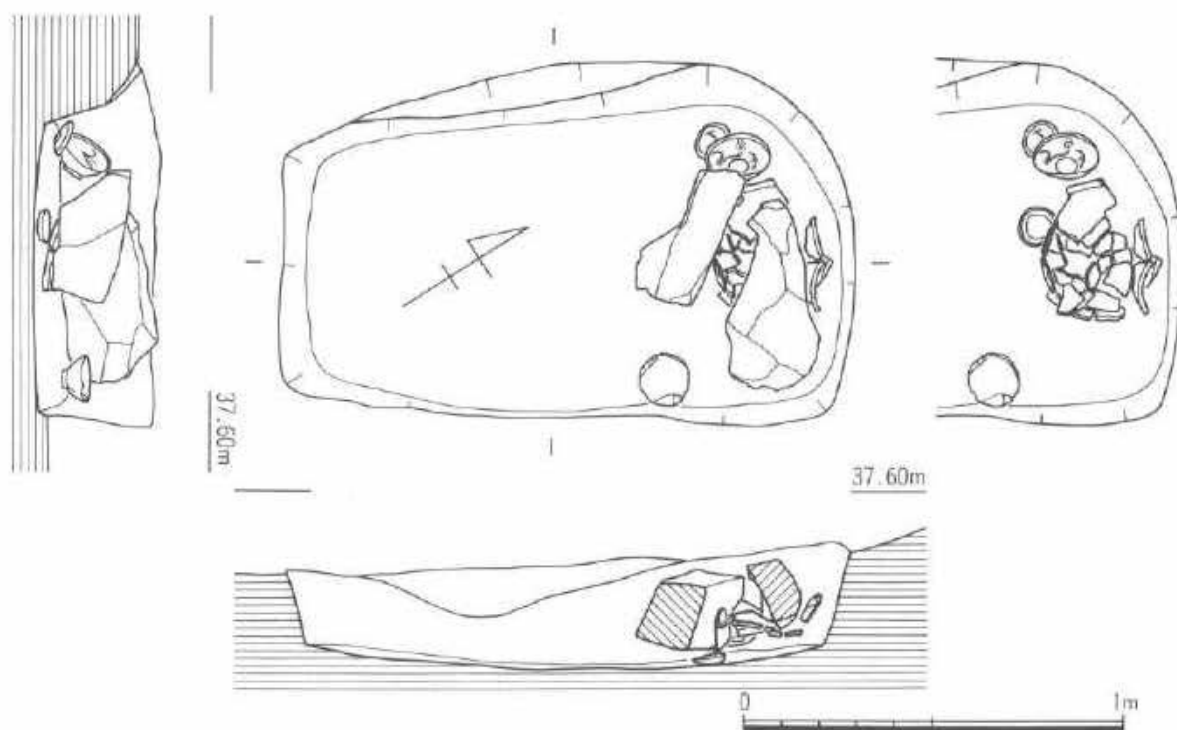
主軸をN-66°-Eに取る石棺墓で、2号墳前方部南裾近くに位置する。掘方は、墓壇長1.62m、幅0.85m、深さ0.3mで、石棺内法長0.72m、幅0.28mである。石棺は、側板が両小口を挟む形式で、蓋石に3枚の板石を使用し、南側側板に2枚、北側側板に1枚、両小口にそれぞれ1枚の板石を使用し、棺床には10cm大の小礫を敷き詰め礫床としている。

第30図
B-SK7出土鉄器
実測図(1/2)

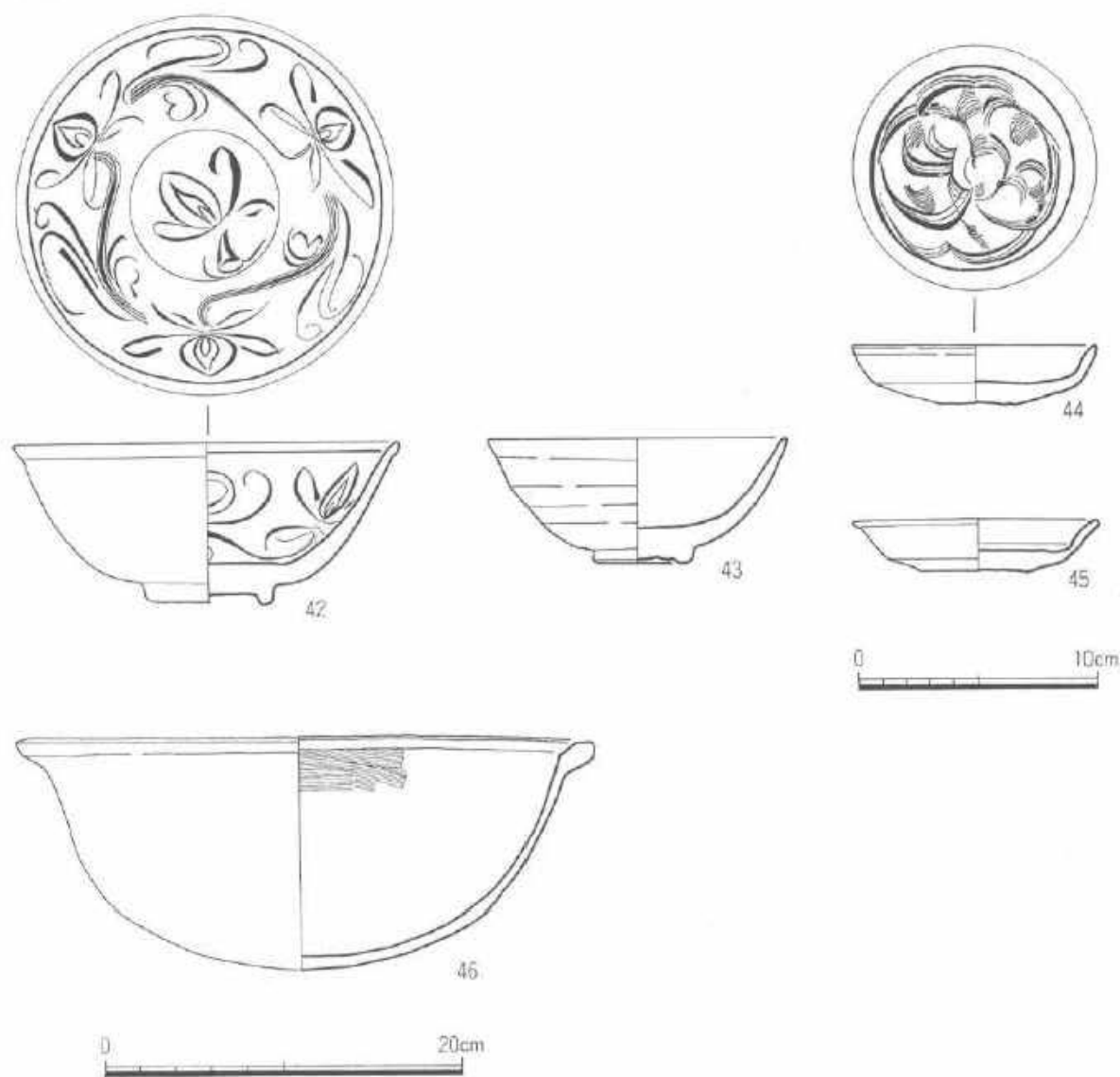
中世遺構

SK5 (第31図)

主軸をN-33°-Eに取る隅丸方形の土墳墓で、2号墳北側くびれ部の周溝を切って掘り込まれている。掘方は、墓壇長1.49m、幅0.92m、深さ0.26m、内法長1.39m、幅0.77mである。頭位方向は、遺物の出土状況から北側と考えられる。出土遺物は、墓壇北側から、青磁4点と土師器鉢1点が出土している。(第32図)



第31図 B-SK5遺構実測図(1/20)



第32図 B-SK5出土遺物実測図（1/3・1/4）

小結

古墳時代遺構について

B区における古墳時代遺構は、前方後円墳を含む古墳3基と方形周溝墓1基、円形周溝墓1基、石棺墓1基（SK11）、土壇墓1基（SK7）である。所属時期は、2号墳および方形周溝墓・円形周溝墓が布留式古段階、柳田編年Ⅱ-a～b期、3世紀後半に属し、6号墳が田辺編年のMT15段階、6世紀中頃に、7号墳がTK208段階、5世紀後半に位置付けられる。SK7およびSK11からは遺物が出土していないため明確な時期は判断し得ないが、SK11の石棺墓に関しては、礫床を有す埋葬主体が分布する時期が宗像地域においては4世紀末から5世紀前半代と限られているため、当該時期に当てはめて問題ない。B区において最も注目すべき遺構は、2号前方後円墳と周辺周溝墓であろう。2号墳は、出土土器から布留Ⅰ式古段階に位置付けられ、宗像地域で最も古い初期前方後円墳である。また、全長：後円部長：前方部長がほぼ3：

2:1の比率を示し比率だけを見ると纏向型前方後円墳の範疇に含まれ、墳丘周辺に周溝墓を伴うなどのあり方が小都市津古生掛古墳に類似するなど墳形や立地のあり方も古式前方後円墳の要素を含んでいる。このことは、宗像地域において布留式古段階にすでに前方後円墳を築造し得る集団が存在していたことを示し古墳時代初期の宗像を考察する上で重要な問題を提起している。

3. C区の調査

1号墳（C区1号墳）

B区と谷を挟んだ南側の丘陵尾根線上、標高約35～37mに位置する。墳丘は、当初径約15m前後の円墳と考えられていたが、調査の結果墳丘西側に陸橋を有す方墳であることが判明し、確認のため一部調査区を拡張し陸橋部の調査を行った。調査は、墳丘の中心から十字に土層確認のためのベルトを残し、主体部の検出を行った。

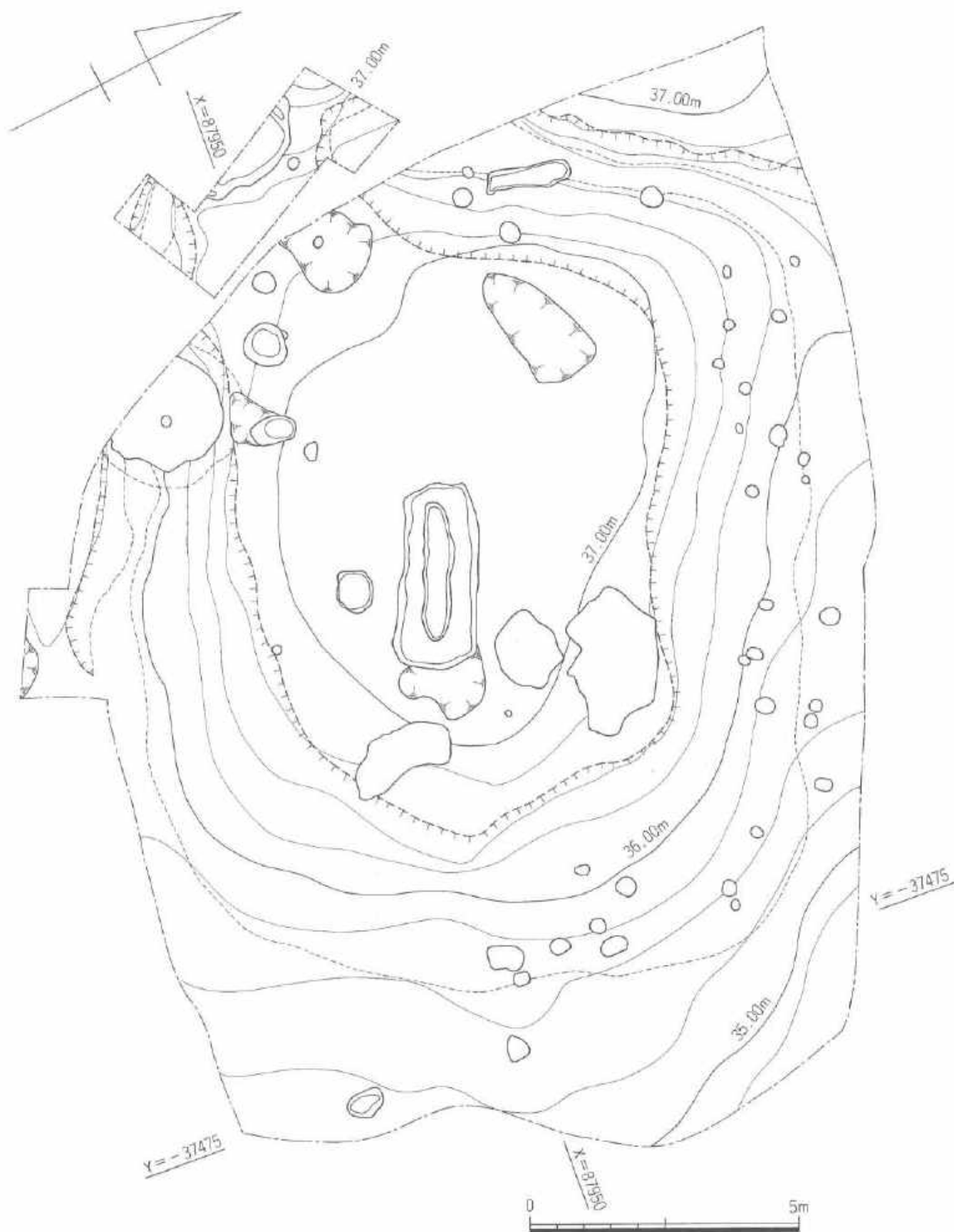
墳丘（第33図）

墳丘は、一部改変が認められるものの、比較的良好に遺存している。墳丘規模は、長軸15m、短軸12.5mの方墳で、墳高は、現状で墳丘裾より2.2mとなる。盛土は、墳頂部において、最低で80cmの盛土が盛られている。墳丘の築造は、墳丘を地山の削り出しによって整形した後に盛土を盛っているが、墳丘西側隅は意図的に掘り残し、陸橋部を作り出している。周溝は、丘陵上部の西側に一部検出したが、調査区外にその大半が含まれ全容は明らかではない。陸橋部についても、一部調査区の拡張を行い調査したが方形に西方向に延びることを確認するに止まり、規模・形態は不明である。墳形は、東西の墳丘裾が直線になること、北・西側隅が鋭角にカーブすることからコーナー部が崩れた陸橋付きの方墳と考えられる。出土遺物は、主体部上面より小型丸底皿が、墳丘裾より須恵器が出土しているが、須恵器については検出したビット群に伴うものと考えられる。

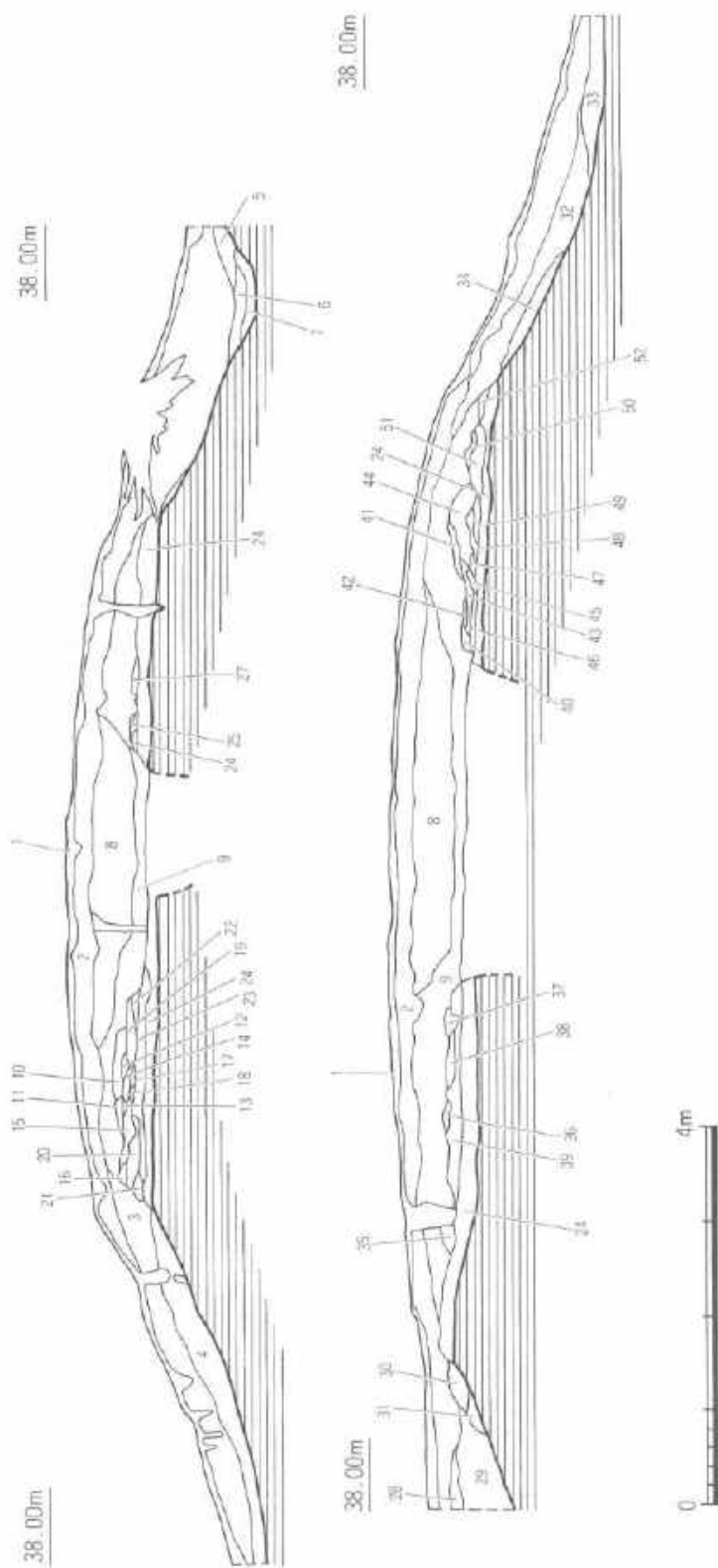
主体部（第35図）

主体部は、墳頂部のやや東より盛土下1.2mから主軸をN-63°-Wにとる割竹形木棺を検出した。木棺は、墳丘盛土を行う前に墓壇を掘り、埋葬が行われている。墓壇規模は、長軸3.39m、短軸1.56m、深さ0.32mで、そのほぼ中心に木棺長2.82m、幅0.5mの割竹形木棺を設置している。

また、木棺のほぼ全域で粘土を検出しており、木棺全面を粘土で包み密封していたものと考えられる。遺物は、棺内東側小口付近より鉄鎌1点、棺外より刀子2点が出土した。頭位は、東側小口部幅0.46mに対して西側小口部幅0.28mと狭いこと、鉄鎌の出土位置などから東側頭位と考えられる。

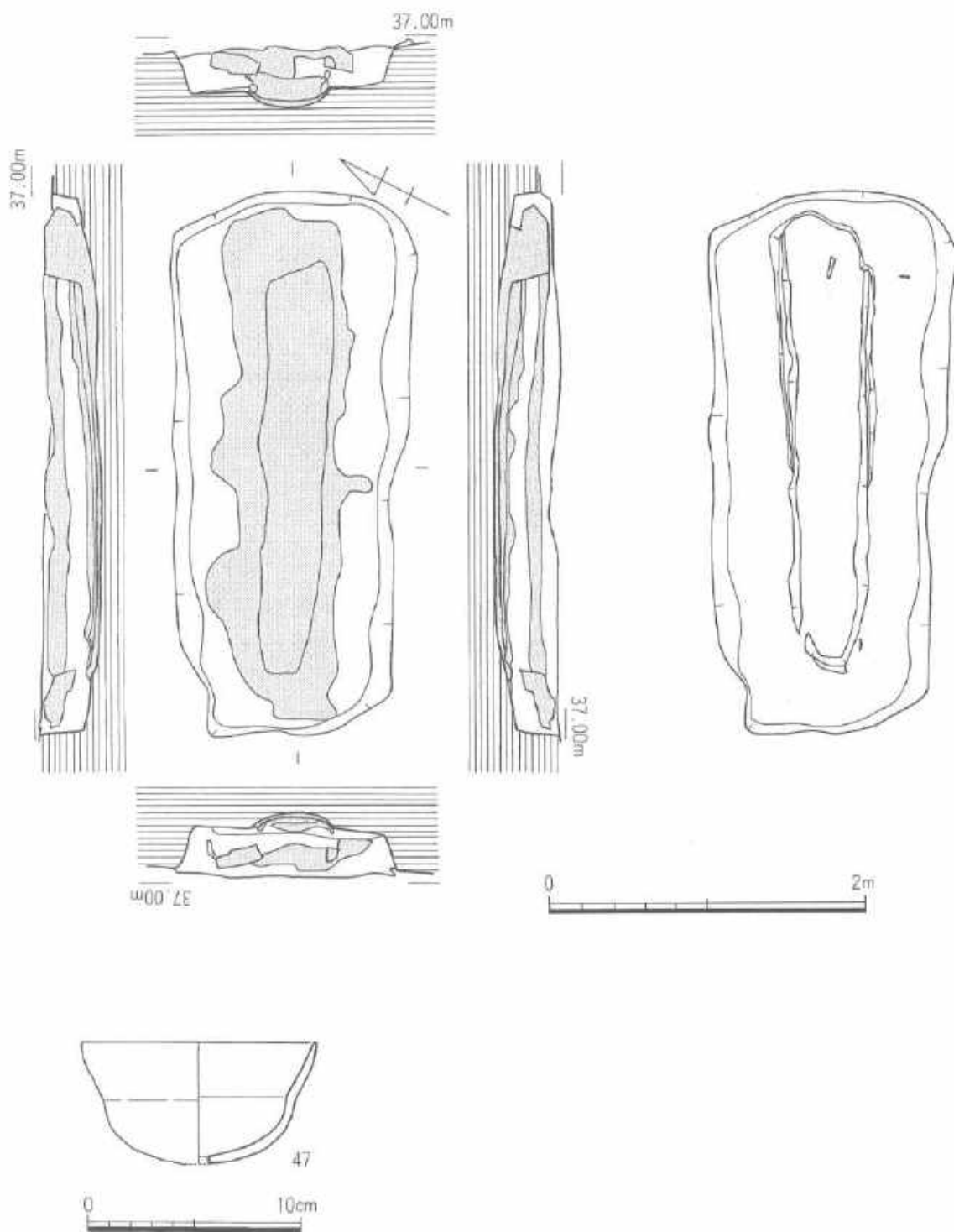


第33図 1号墳遺構配置図 (1/100)



- 1号墳土層断面表
- | | | | | | | | | | |
|----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|--------|
| 1 | 水痕層 | 11 | 褐色 盛土 | 31 | 赤褐色 盛土 | 41 | 赤褐色 盛土 | 51 | 明褐色 盛土 |
| 2 | 黒褐色 盛土 | 12 | 暗赤褐色 盛土 | 32 | 暗赤褐色 盛土 | 42 | 赤褐色 盛土 | 52 | 褐色 盛土 |
| 3 | 暗褐色 流土 | 13 | 暗赤褐色 盛土 | 33 | 暗赤褐色 盛土 | 43 | 暗赤褐色 盛土 | | |
| 4 | 暗赤褐色 盛土 | 14 | 暗赤褐色 盛土 | 34 | 赤褐色 流土 | 44 | 明赤褐色 盛土 | | |
| 5 | 赤褐色 流土 | 15 | 暗赤褐色 盛土 | 35 | 明褐色 盛土 | 45 | 灰褐色 盛土 | | |
| 6 | 暗褐色 流土 | 16 | 暗赤褐色 盛土 | 36 | 赤褐色 盛土 | 46 | 暗褐色 盛土 | | |
| 7 | 明褐色 盛土 | 17 | 赤褐色 盛土 | 37 | 褐色 盛土 | 47 | 暗赤褐色 盛土 | | |
| 8 | 暗褐色 盛土 | 18 | 暗赤褐色 盛土 | 38 | 赤褐色 盛土 | 48 | 暗褐色 盛土 | | |
| 9 | 赤褐色 盛土 | 19 | 暗赤褐色 盛土 | 39 | 明褐色 盛土 | 49 | 明赤褐色 盛土 | | |
| 10 | 暗赤褐色 盛土 | 20 | 褐色 盛土 | 40 | 褐色 盛土 | 50 | 褐色 盛土 | | |

第34図 1号墳土層断面実測図 (1/80)

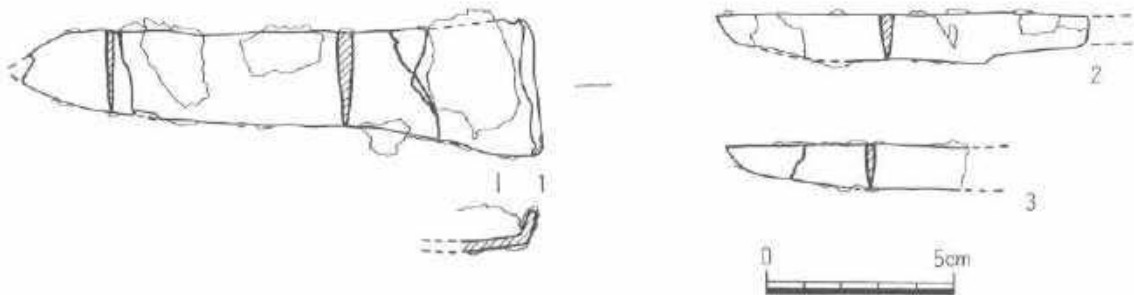


第35図 1号墳主体部・出土遺物実測図 (1/40・1/3)

遺物

鉄器 (第36図)

1は、棺内出土の直刃の鉄鎌で、長さ13.6cm、幅3.5cm、重量35.3gで、折り返しの形状からほぼ垂直に柄がつくものと考えられる。2・3は、刀子で、いずれも基部を一部欠損する。2は、全長9.85cm、刃部長7.3cm、刃部幅1.2cm、重量9.35gである。3は、残存長6.4cm、刃部幅1.2cmである。



第36図 1号墳出土鉄器実測図 (1/2)

土器 (第35図)

47は、主体部上面の埋土出土の小型丸底甕で、口径11.0cm、器高5.7cmである。時期については形態から断定するのは困難であるが、口縁部と体部の比率がほぼ等しいことから2号墳よりやや新しくなるものと考えられる。

その他の遺構

S U 12 (第37図)

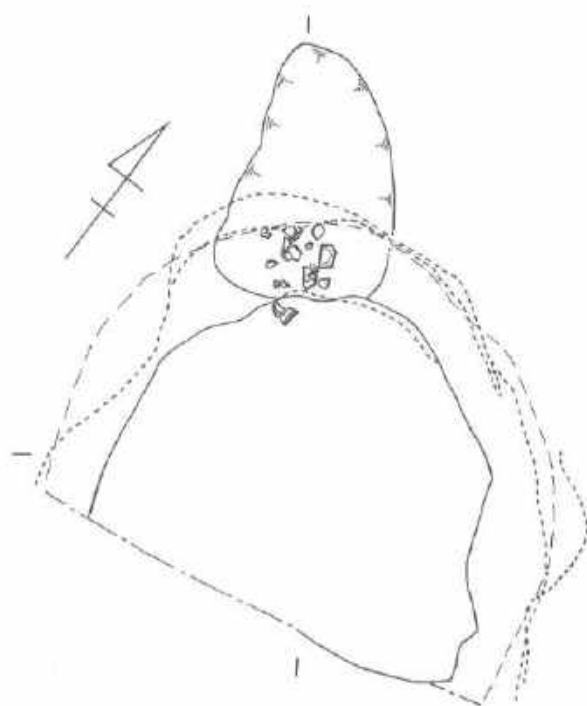
1号墳南西裾部に位置する袋状竪穴で調査区境に位置するため南側約3分の1が未調査である。

規模は、径2.0m、高さ2.53m、底径2.65mで、断面形態は西側はほぼ垂直に床面にいたるが、東側壁面は床面より1.3mの地点から外部に緩やかに張出しながら床面にいたる。遺物は、埋土中および床面から弥生土器(第38図)が出土している。時期は、出土土器より弥生前期末、板付Ⅱ式新相と考えられる。

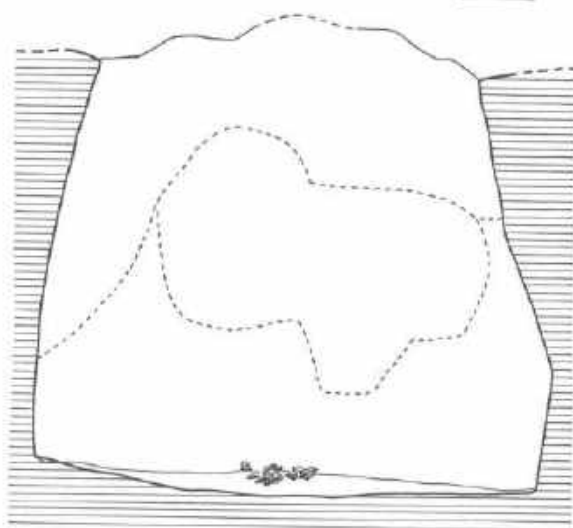
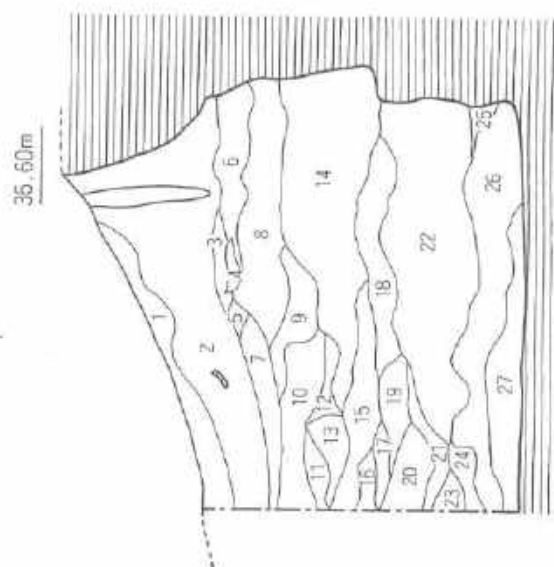
C-2区

S C 22 (第40図)

調査区西端に位置する方形竪穴式住居跡で、北側をS C 23に切られ西側が調査区境に接するため約4分の1を調査するに止まる。遺構規模は、南北2.68m、東西2.17m、深さ0.16mで、壁際に沿い壁溝がめぐる。



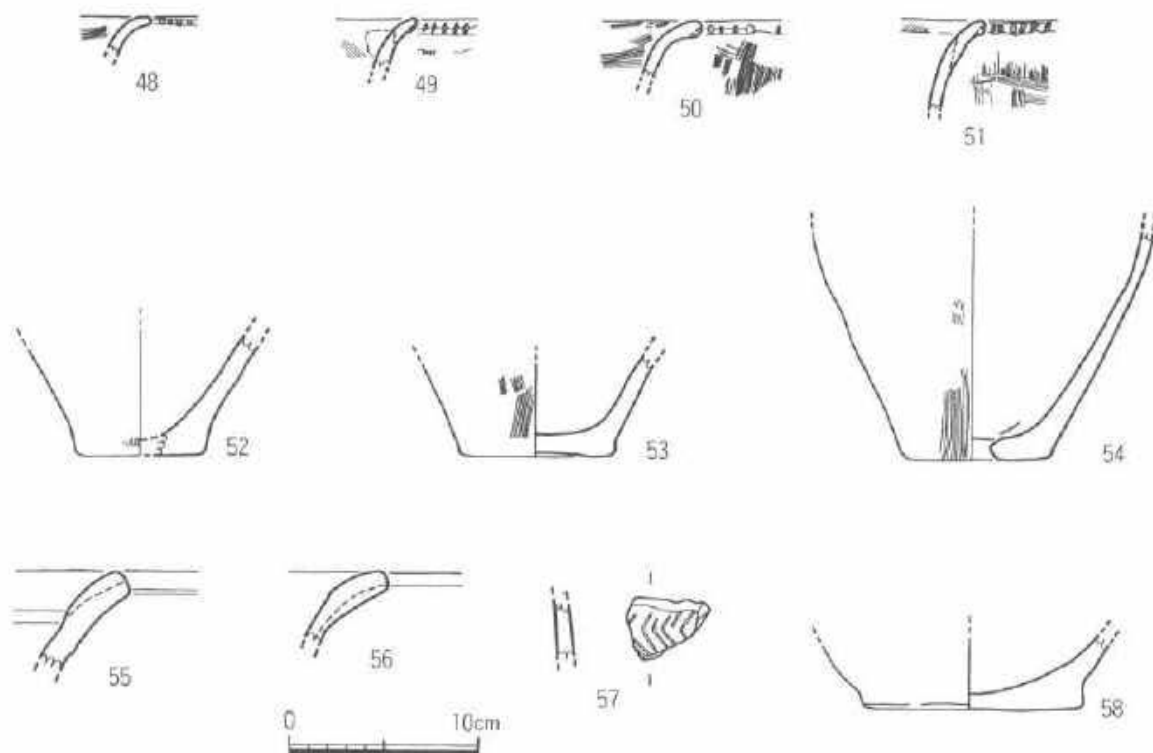
36.60m



C-SU12土層観察表

- 1 明赤褐色土 やや粘質で硬い
- 2 暗赤褐色土 粘質で硬い
- 3 暗褐色土 粘質で硬い
- 4 赤褐色土 粘質で硬い
- 5 明黄褐色土 粘質でやや硬い
- 6 淡赤褐色土 粘質でやや硬い
- 7 暗褐色土 粘質でやや硬い
- 8 淡赤褐色土 粘質で硬い
- 9 暗赤褐色土 粘質でやや硬い
- 10 淡黄褐色土 粘質でやや硬い
- 11 暗赤褐色土 粘質でやや軟質
- 12 淡褐色土 粘質で軟質
- 13 地山ブロック
- 14 地山ブロック
- 15 黄褐色土 粘質で硬い
- 16 地山ブロック
- 17 淡黄褐色土 粘質でやや硬い
- 18 地山ブロック
- 19 淡褐色土 粘質で硬い
- 20 地山ブロック
- 21 明褐色土 粘質で硬い
- 22 地山ブロック
- 23 地山ブロック
- 24 淡黄褐色土 粘質で硬い
- 25 明赤褐色土 粘質でやや軟質

第37図 C-SU12遺構実測図 (1/40)



第38図 C-SU12出土遺物実測図 (1/4)

S C 23 (第40図 遺物第42図)

S C 22の北側にS C 22を切って掘り込まれた方形竪穴式住居跡で、北・東側が調査区境に接するため完掘しえなかった。遺構規模は、南北3.18 m、東西3.55 m、深さ0.14 mで、壁際に沿い壁溝がめぐる。竈は住居跡内西側壁よりの中央部に設けている。

S C 24 (第40図)

S C 23の北側に位置する方形竪穴式住居跡で、北側をS C 27に切られ、削平のため東側を失う。遺構規模は、南北1.7 m、東西1.2 m、深さ0.26 mで、壁際に壁溝がめぐる。

S C 25 (第40図 遺物第43図70)

S C 26・27に切られS C 28を切る。北側は調査区境に接しているため、コーナー部と壁面の一部しか確認できていないが、方形竪穴式住居跡と思われる。住居内の構造は不明であるが、残存する遺構規模は、南北2.08 m、東西1.56 m、深さ0.12 mである。

S C 26 (第40図)

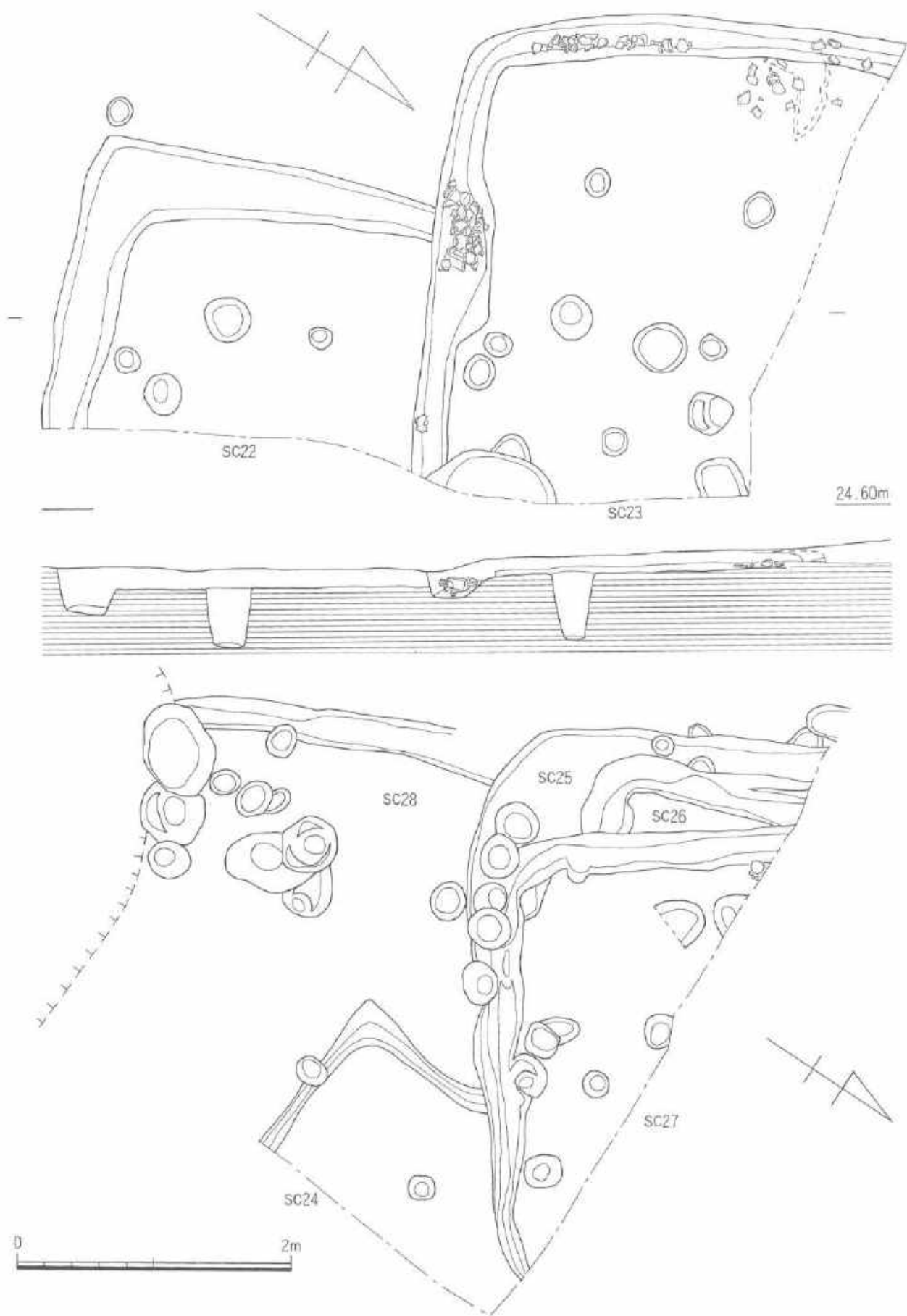
S C 27に切られS C 28を切る。北側は調査区境に接しているため、コーナーの一部を確認したに過ぎないが、方形竪穴式住居跡である。遺構規模は、南北1.4 m、東西0.6 m、深さ0.18 mで、壁際に壁溝がめぐる。

S C 27 (第40図 遺物第43図71～77)

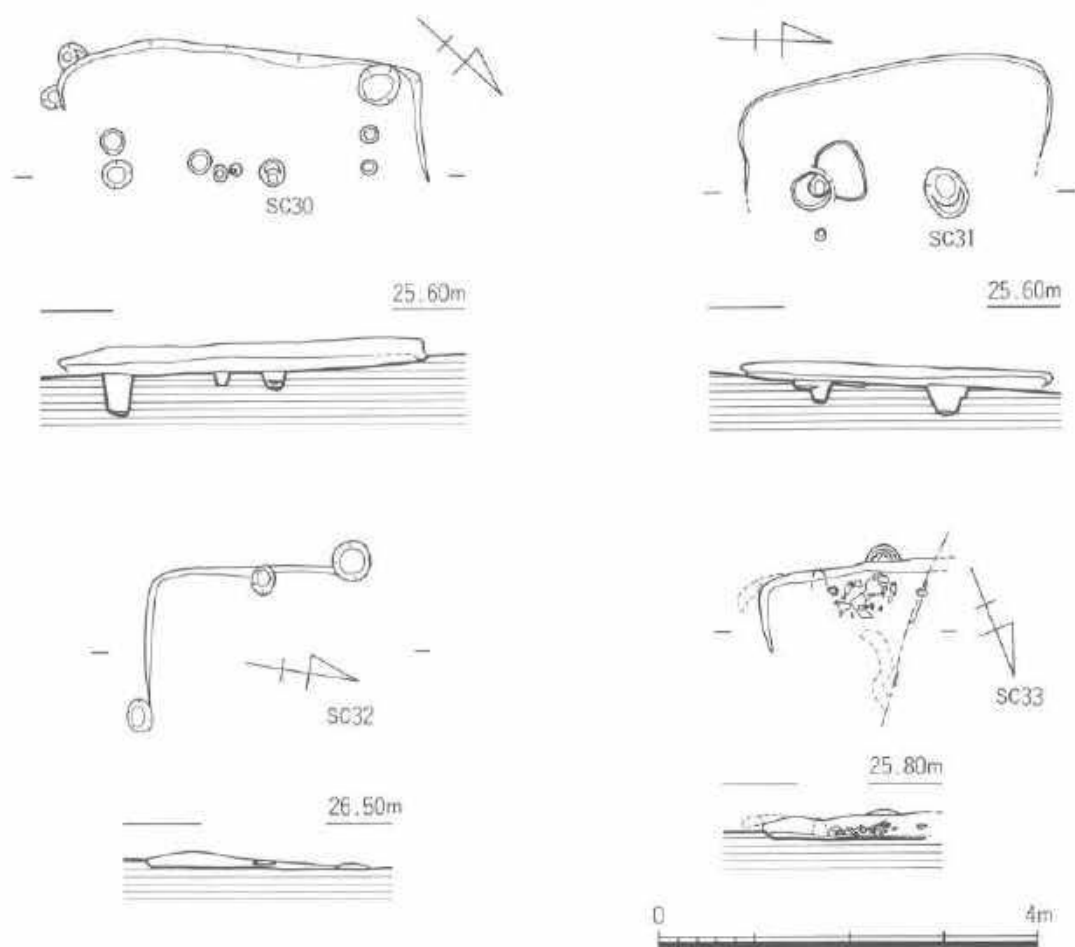
北側の約2分の1を調査区境に接するため調査できなかったが、方形竪穴式住居跡で、S C 24・25・26・28を切っている。遺構規模は、南北2.05 m、東西3.11 m、深さ0.33 mで、壁際には壁



第39図 C-2 区遺構配置図 (1/200)



第40図 C-SC22~28遺構実測図 (1/40)



第41図 C-SC30～33遺構実測図 (1/80)

溝がめぐる。

S C 28 (第40図 遺物第43図78・79)

北側をS C 25に切られ、東・南を削平により消失するものの、遺存した壁溝から方形住居跡と思われる。遺構規模は、南北2.50m、東西は削平のため明確ではない。

S C 30 (第41図 遺物第43図80)

調査区北側中央に位置する方形竪穴式住居で、東側の3分の2を削平により消失する。遺構規模は、東西3.84m、南北1.42m、深さ0.29mで、壁溝は確認できなかった。

S C 31 (第41図 遺物第43図81・82)

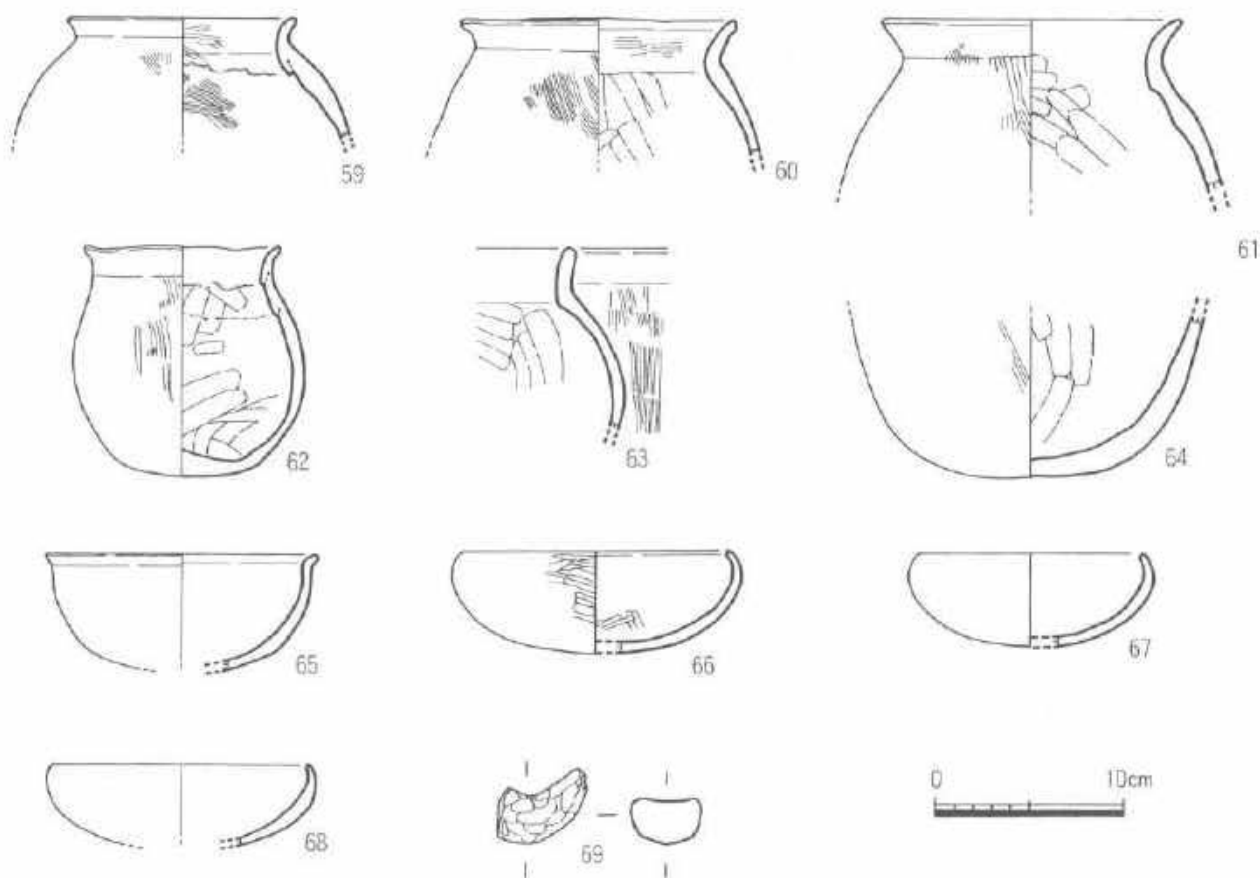
S C 30の東側に位置する方形竪穴式住居跡で、東側の過半を削平のため消失する。遺構規模は、南北3.26m、東西1.32m、深さ0.22mで、壁溝は確認できなかった。

S C 32 (第41図 遺物第43図83・84)

S C 30の西側に位置する方形竪穴式住居跡で、北・東側の過半を削平のため消失する。残存しているのは南西側のコーナー部分のみであるが、遺構規模は、南北2.00m、東西1.43m、深さ0.23mで、柱穴壁溝は確認されていない。

S C33 (第41図 遺物第43図85・86)

S C30の北側に位置する方形竪穴式住居跡で、東側の過半を削平のため消失し、北側を調査区境によって切られている。遺構規模は、南北0.9 m、東西1.71 m、深さ0.23 mで、竈は、南側中央部に所在している。



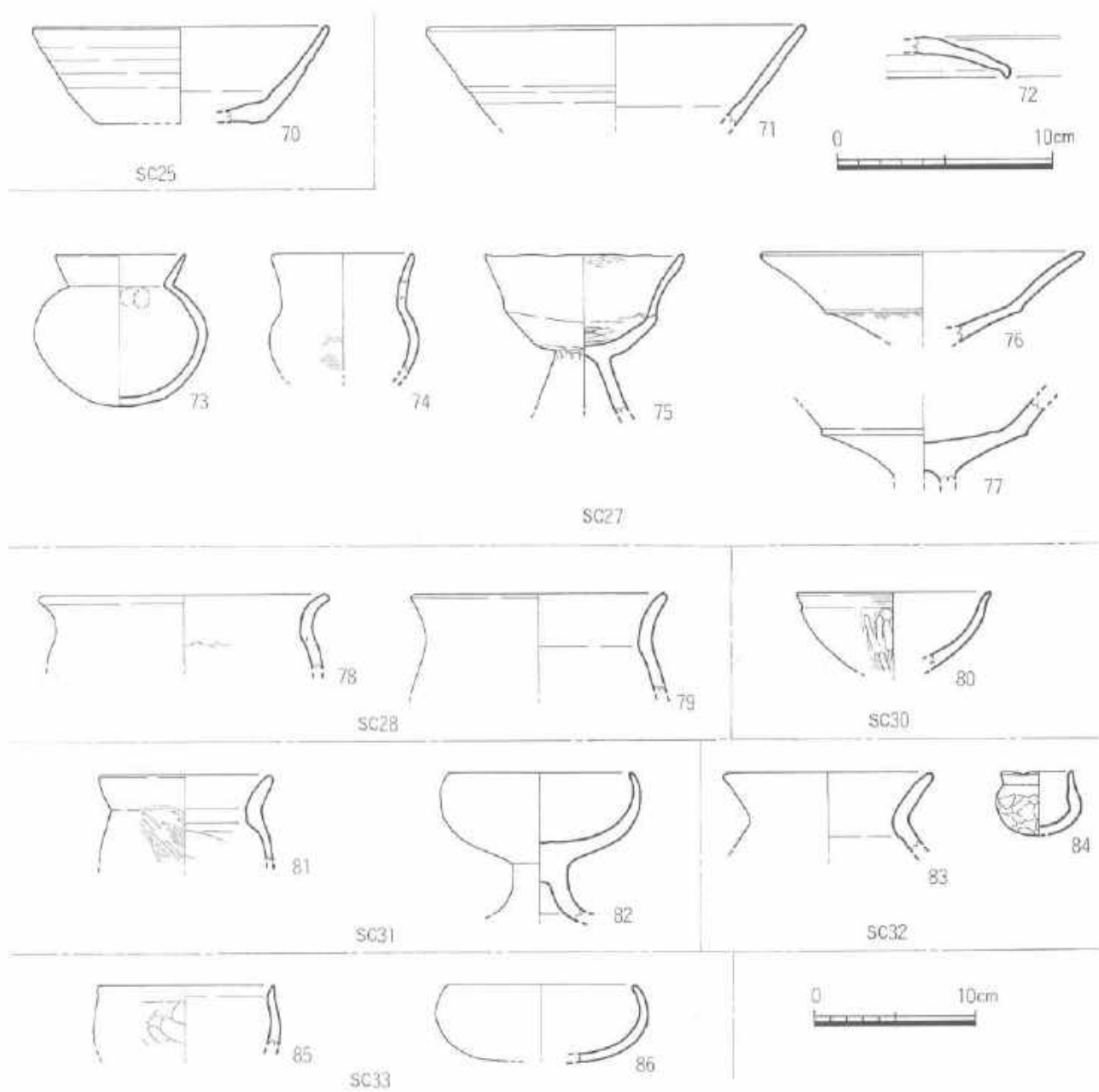
第42図 C-SC23出土遺物実測図 (1/4)

S K61 (第44図 遺物第45～47図)

調査区のほぼ中央に位置する長方形土坑で、一部地割れによる攪乱を受けている。遺構規模は、長軸3.41 m、短軸1.64 m、深さ0.35 mで、遺構の北端部が一段下がる。出土遺物は、多量の須恵器・土師器の他に炉壁と思われる焼土塊と鉄滓が少量出土している。時期は、出土遺物から8世紀代と考えられる。

S K64 (第44図 遺物第48・49図)

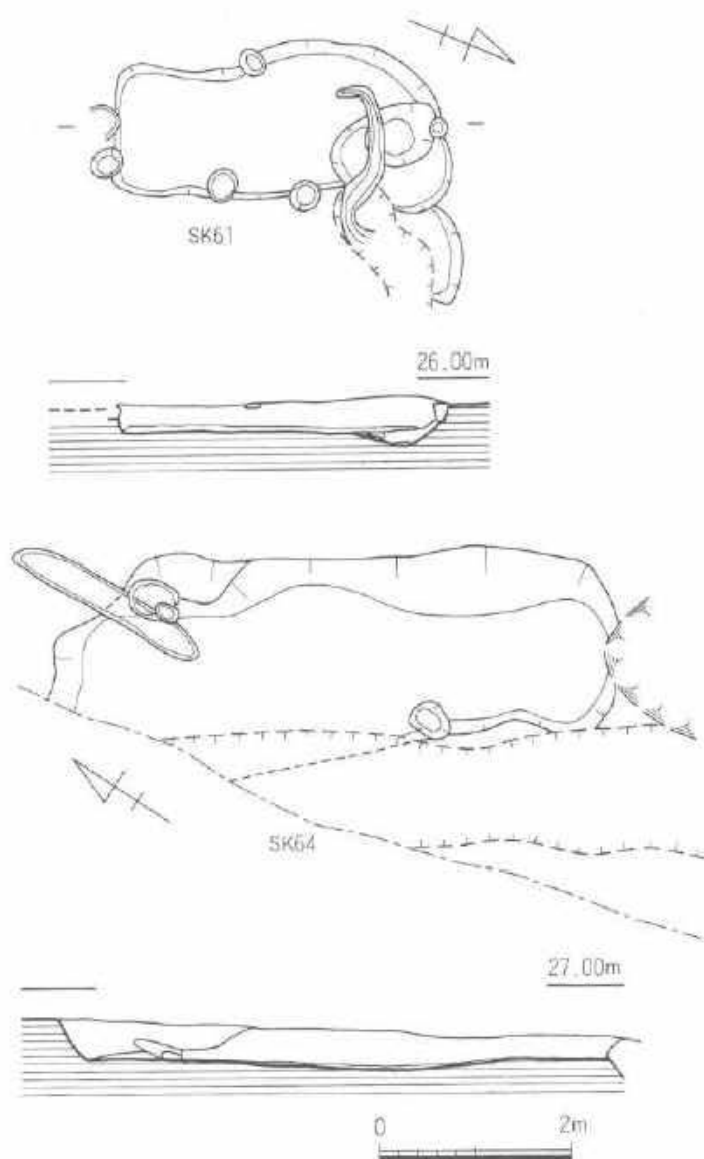
調査区北西隅に位置する長方形土坑で、遺構規模は、長軸5.91 m、短軸1.81 m、深さ0.42 mで、床面は赤色を呈し南端部が一部攪乱を受けている。また、北東隅には溝が切りこむ。出土遺物には、須恵器・土師器の他、竈・鉄滓・炉壁と思われる一部青灰色に焼き締まった焼土塊が出土しており、当遺構は、製鉄炉である可能性が高い。時期は、出土遺物から、6世紀代と考えられる。鉄滓は、総重量0.93 kgで、碗形鉄滓を含む。また48図114の蓋形須恵器は、竈送風口として使用された可能性がある。



第43図 C-SC25~33出土遺物実測図 (1/3・1/4)

集石遺構（第50図 遺物第51～53図）

調査区の南端部から集石遺構が検出されている。集石は、隣接して2ヶ所に認められ、北側を1号集石、南側を2号集石とする。1号集石は、直径約2.5mの範囲に広がり、2号集石は直径約3m前後の範囲に分布している。集石の下部には粘質の土が堆積していたものの、ピット等の下部構造がある訳ではなく、ただ雑然と石を集めた状態であった。このため遺構の性格は所見を得ないものの、出土遺物が中世を主体としており、中世より時代を下る遺物も確認できなかったことから、中世に集石がなされたものと考えられる。出土遺物は、東播系の須恵器（第52図137～139）を含む須恵器・土師器・磁器・瓦が出土している。

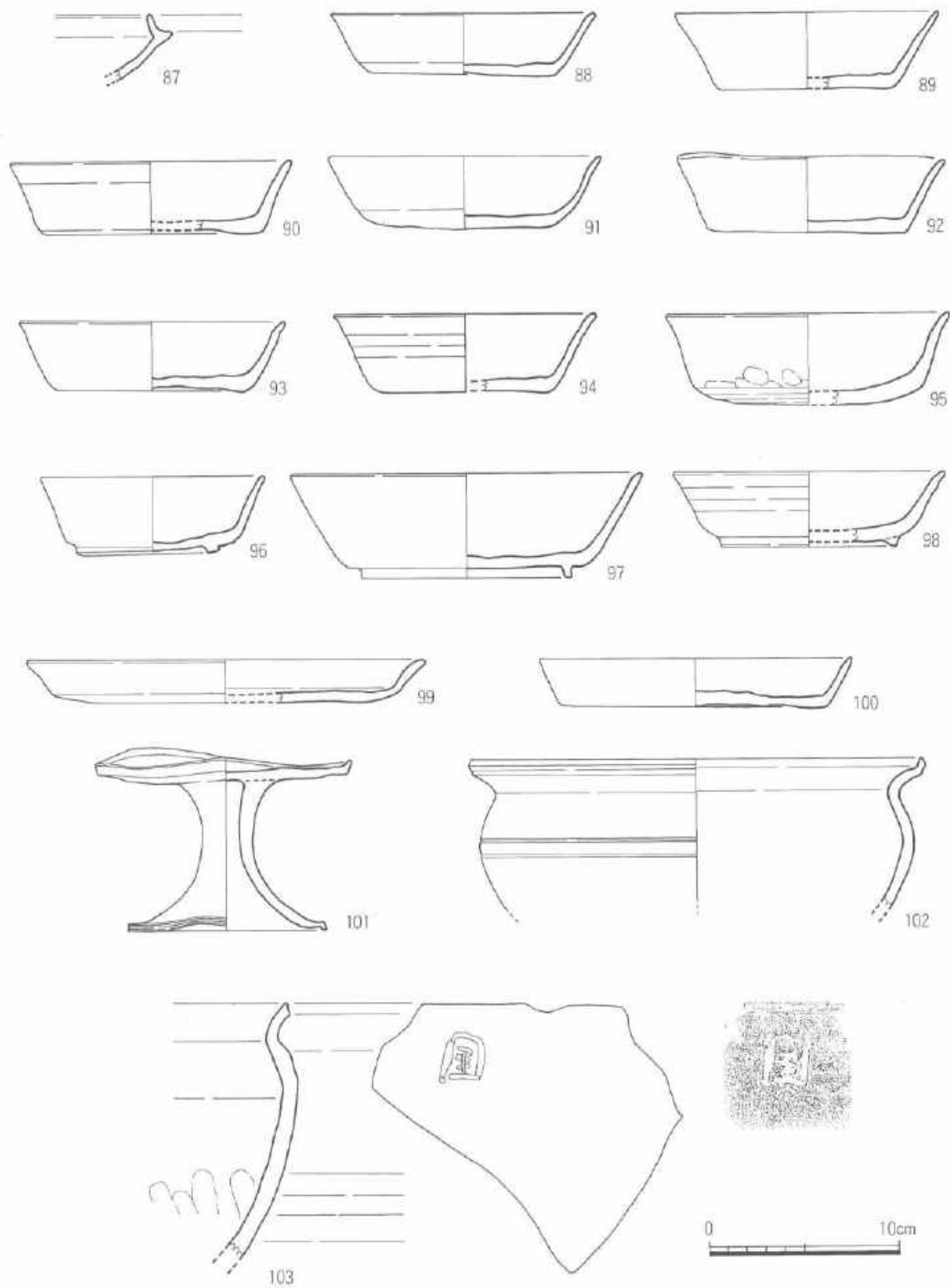


第44図 C-SK61・64遺構実測図（1/80）

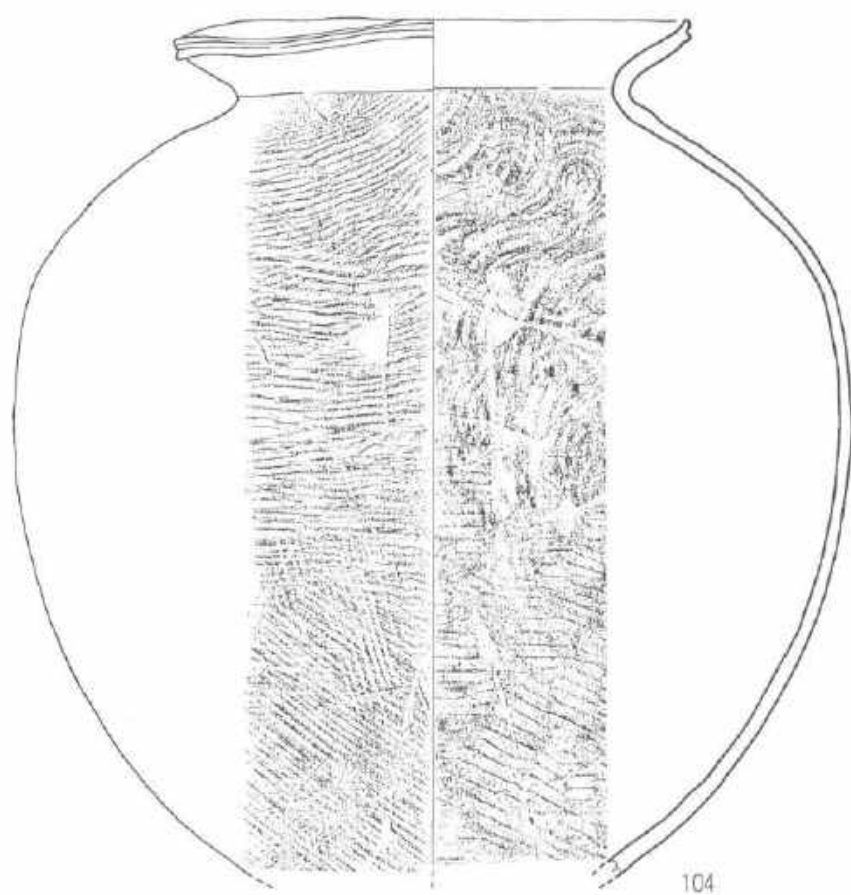
小結

1号墳について

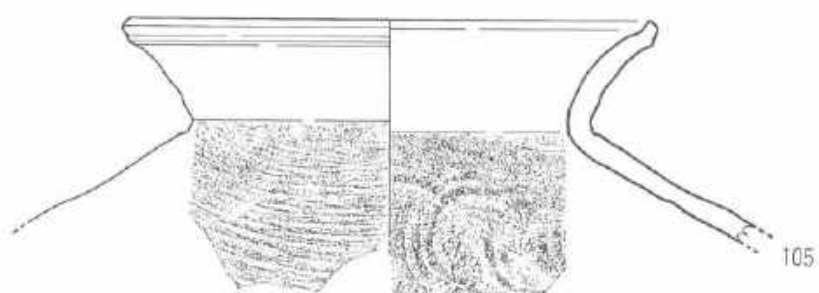
1号墳は、陸橋を有す方墳であるが、出土小型丸底埴より布留式併行、柳田編年のⅡ期に位置付けることができる。陸橋部を付設する意味合いは、他の領域から区画された墓域への入り口となすことにあると思われる。このような陸橋を有す古墳は、宗像地域ではあまり知られていないが、前原市東真方古墳群C群の1号墳などに類例を求めることができる。また、徳重本村2号前方後円墳の周溝が前方部にめぐらず、くびれ部で切れていることは、前方部を墓域として区画せず墓域外と接する道としての役割を持たせたと考えられ、1号墳陸橋部と同様の意味を持つと思われる。



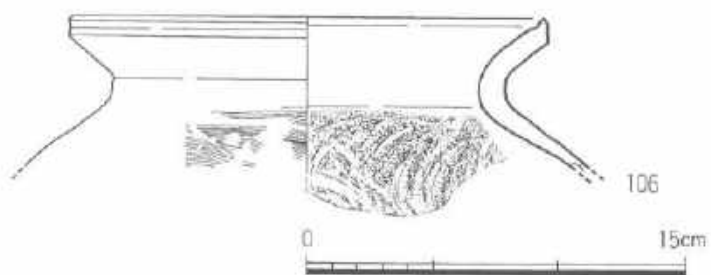
第45図 C-SK61出土遺物実測図 (1/3)



104



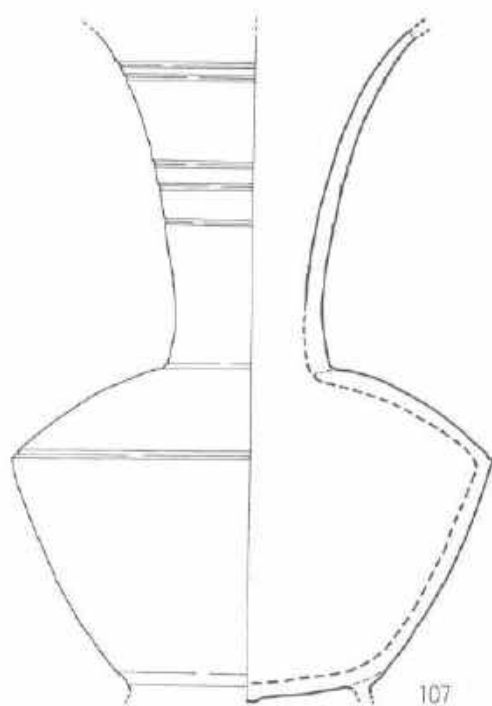
105



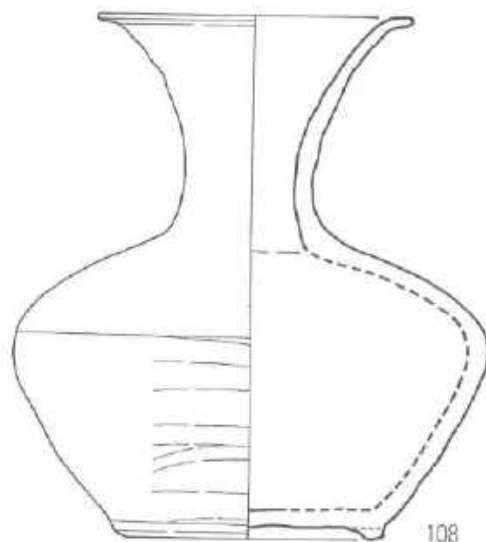
106

0 15cm

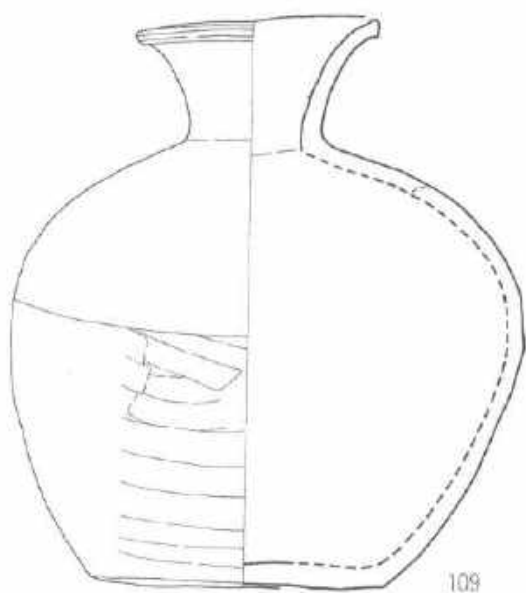
第46図 C-SK61出土遺物実測図 (1/3)



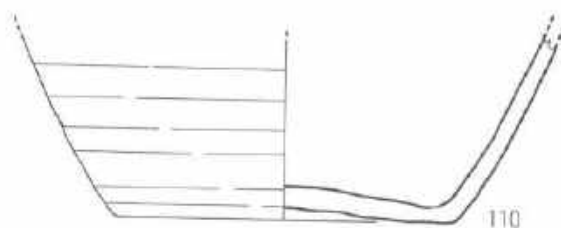
107



108



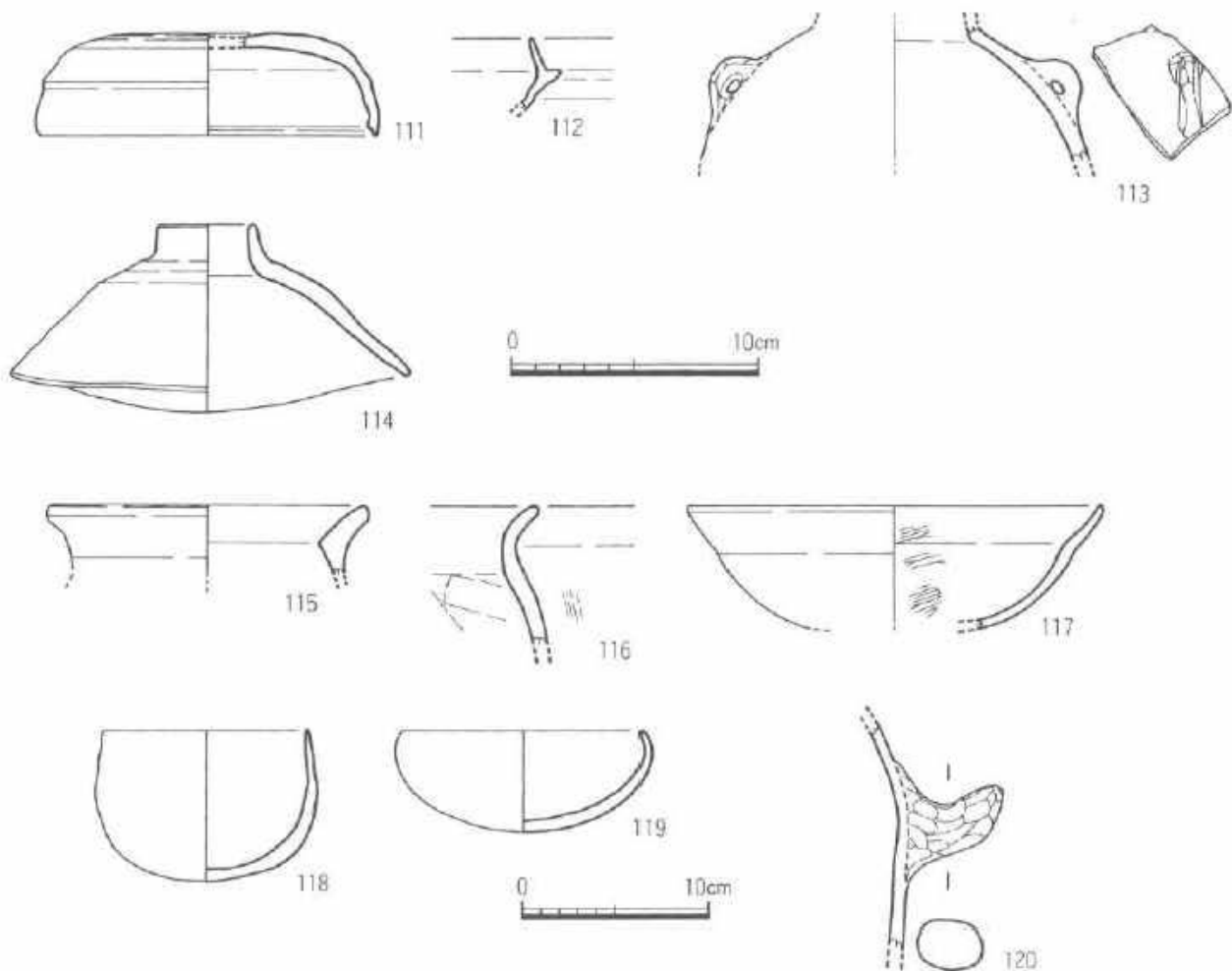
109



110



第47図 C-SK61出土遺物実測図 (1/3)



第48図 C-SK64出土遺物実測図 (1/3・1/4)

4. D区の調査

3号墳 (D区1号墳)

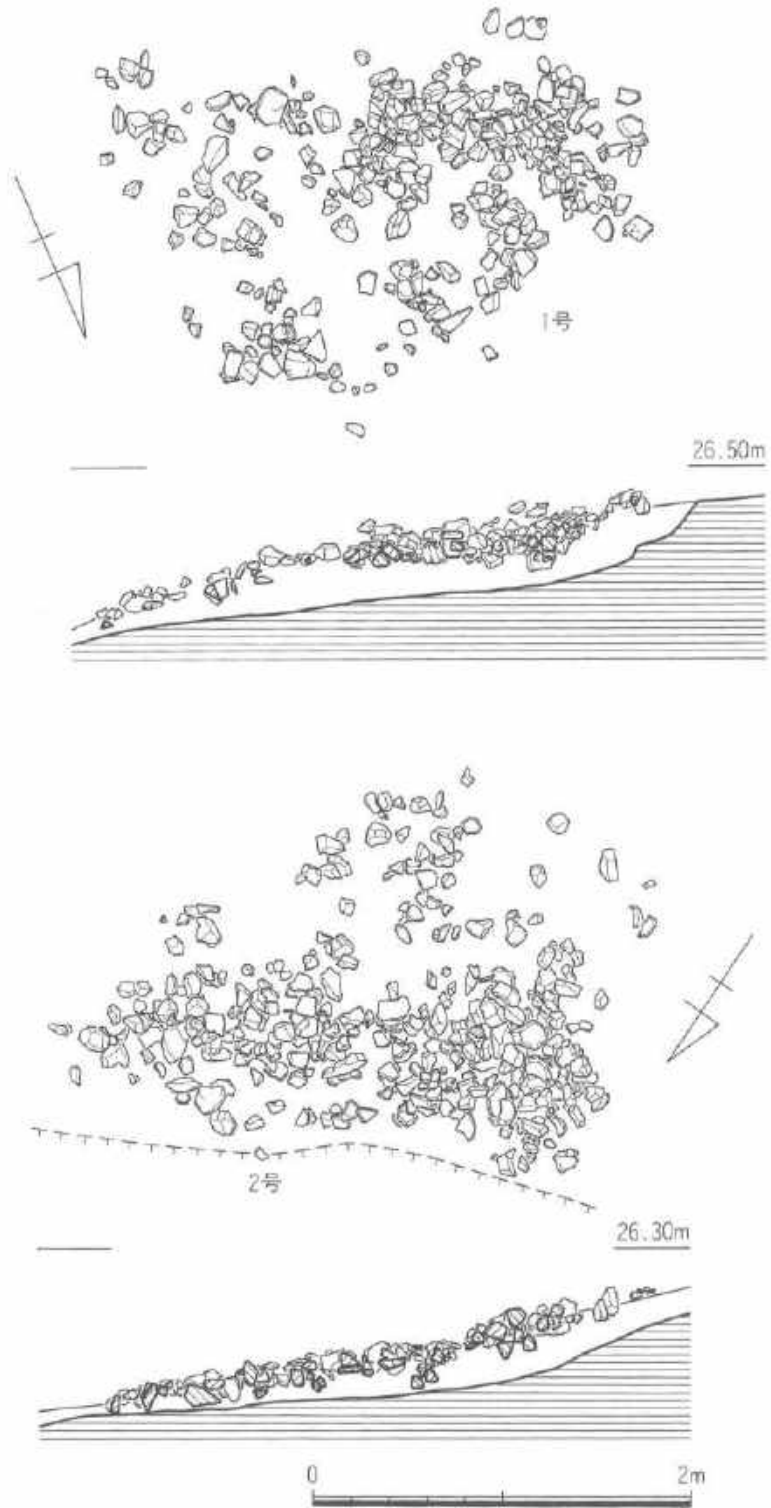
主丘陵から東に延びる丘陵の先端部、標高約35~37mの東に傾斜する尾根筋上に位置する。墳丘は、南側を削平されており、旧状を留めていない。墳丘は、直径約13mの円墳で、この尾根筋上にはさらに数基の古墳が所在している。調査は、墳丘の中心から比較的残りが良い方向に直交する形で土層確認のためのベルトを残し、主体部の検出を行なった。

墳丘 (第54図)

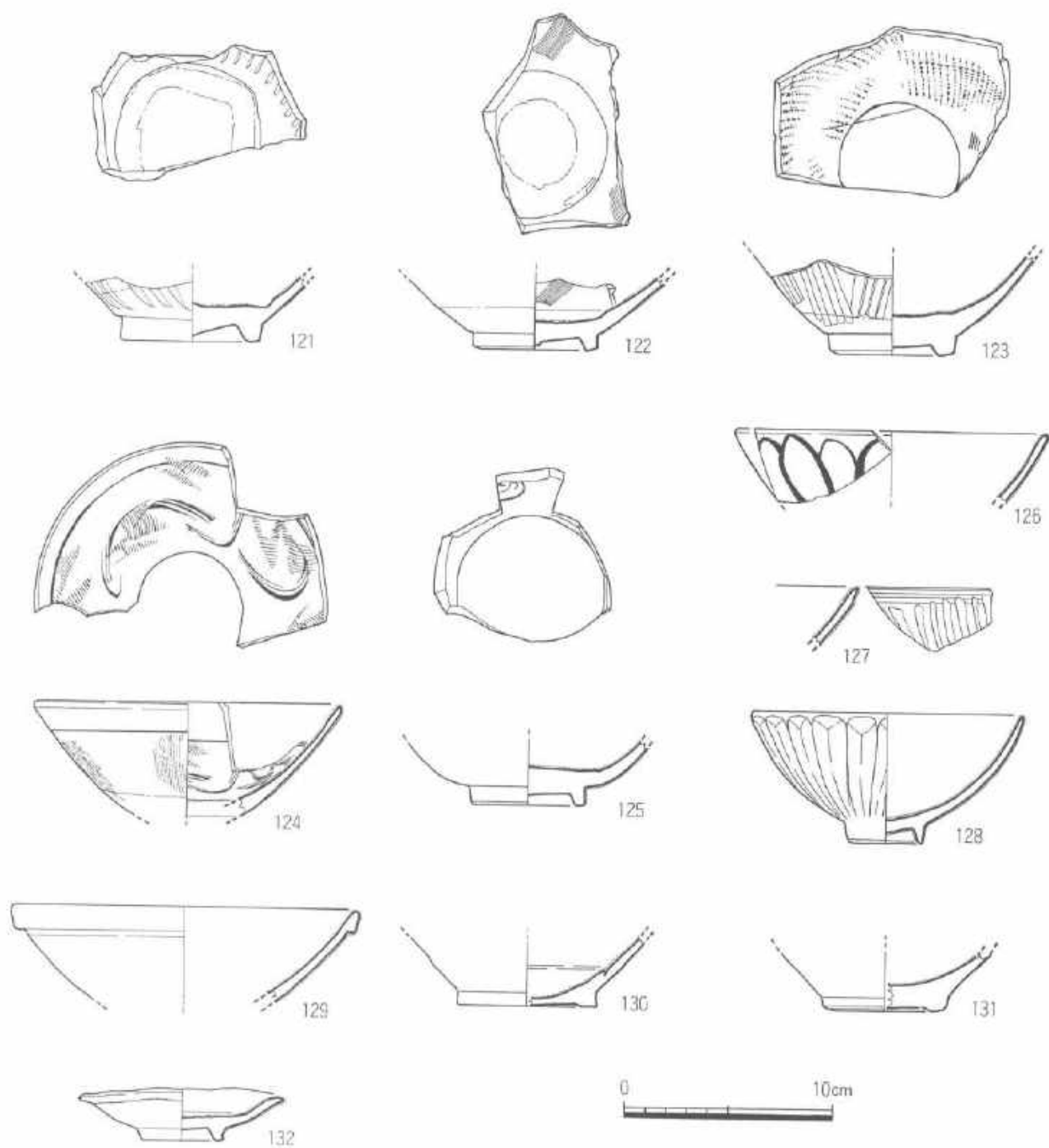
墳丘規模は、墳長13m、墳高は、丘陵先端部に立地するため墳丘西部で0.9m、東部で2.8mと東西で1.9mの比高差がある。調査の結果、表土から約80cm前後の地点で地山が確認され、60cmから90cmの盛土の残存が確認できた。東西土層においては、西から東に傾斜する旧表土が確認され (第55図21層)、緩斜面の丘陵をカットし墳丘を築いた様子が窺える。また、墳丘西側の溝は、いわゆる丘陵切断の溝であり、溝側の盛土が0.9m前後であることを考えると丘陵と墳丘を区別することを主目的としていたと考えられる。墳丘の構築は、土層の観察から次のような手順が復元できる。①地山を削り出し墳裾を作りあげるとともに、墳丘東側に盛土を行い埋葬面



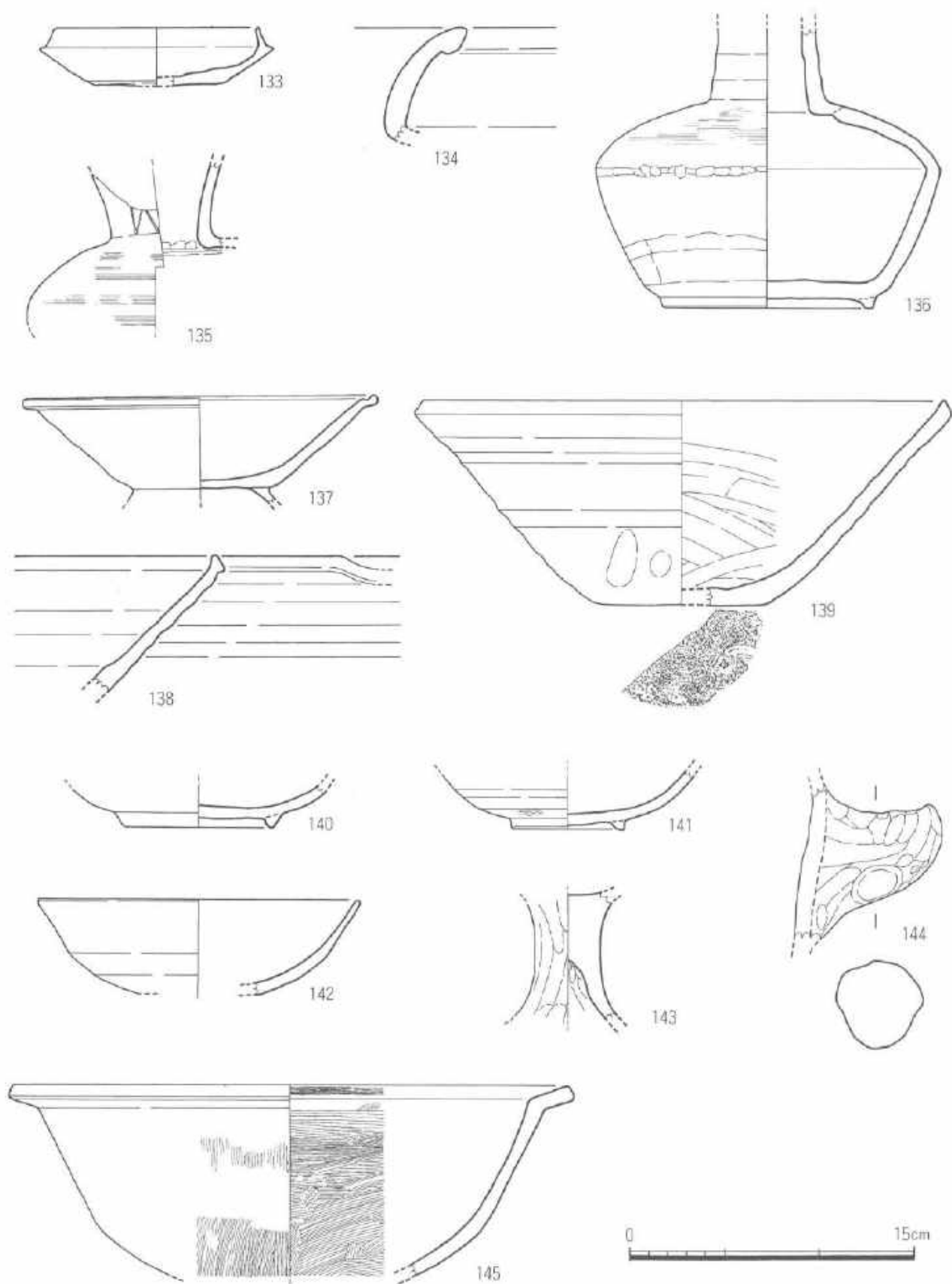
第49図 C-SK64出土遺物実測図 (1/2)



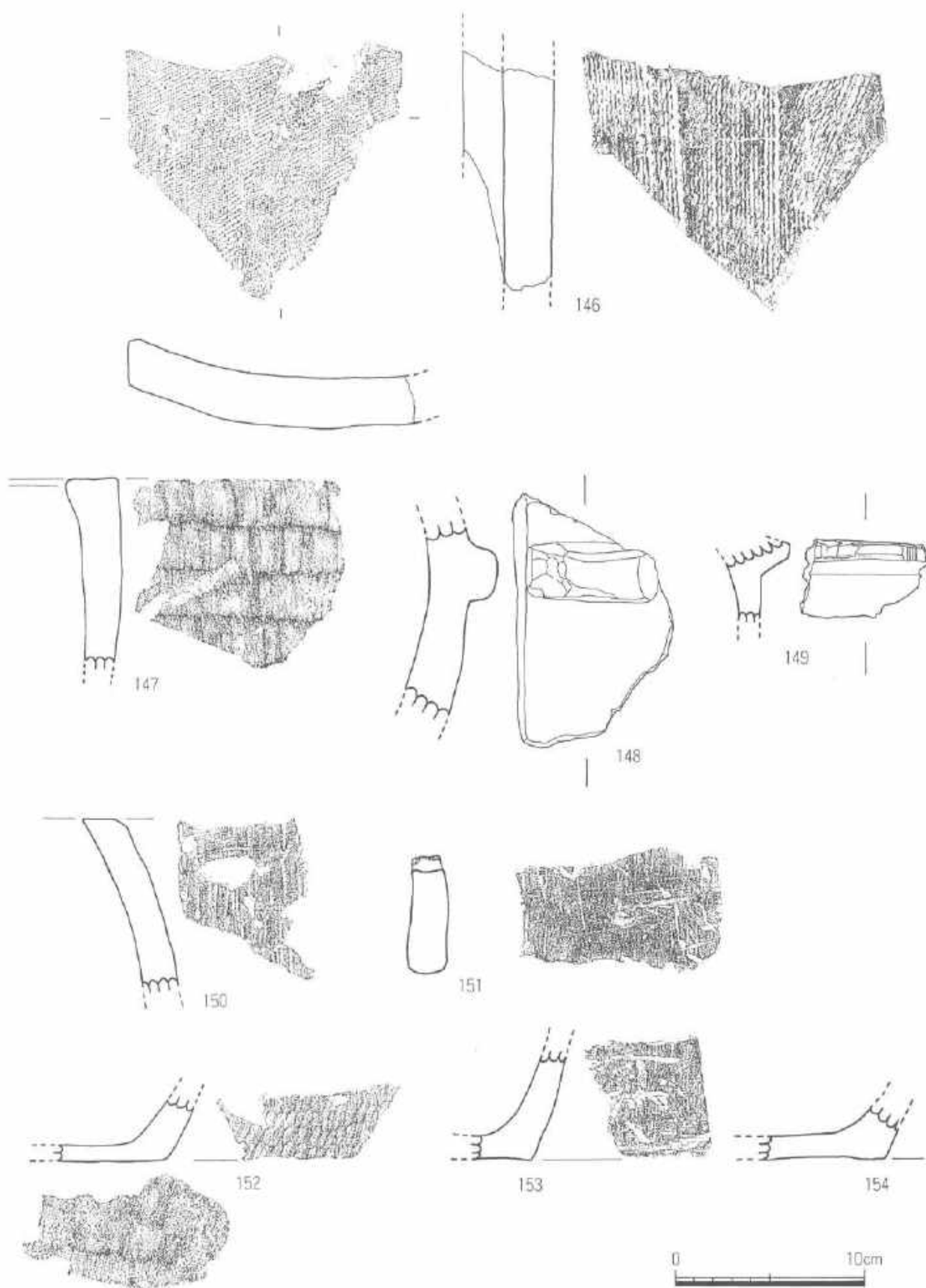
第50図 C-1・2号集石遺構実測図 (1/40)



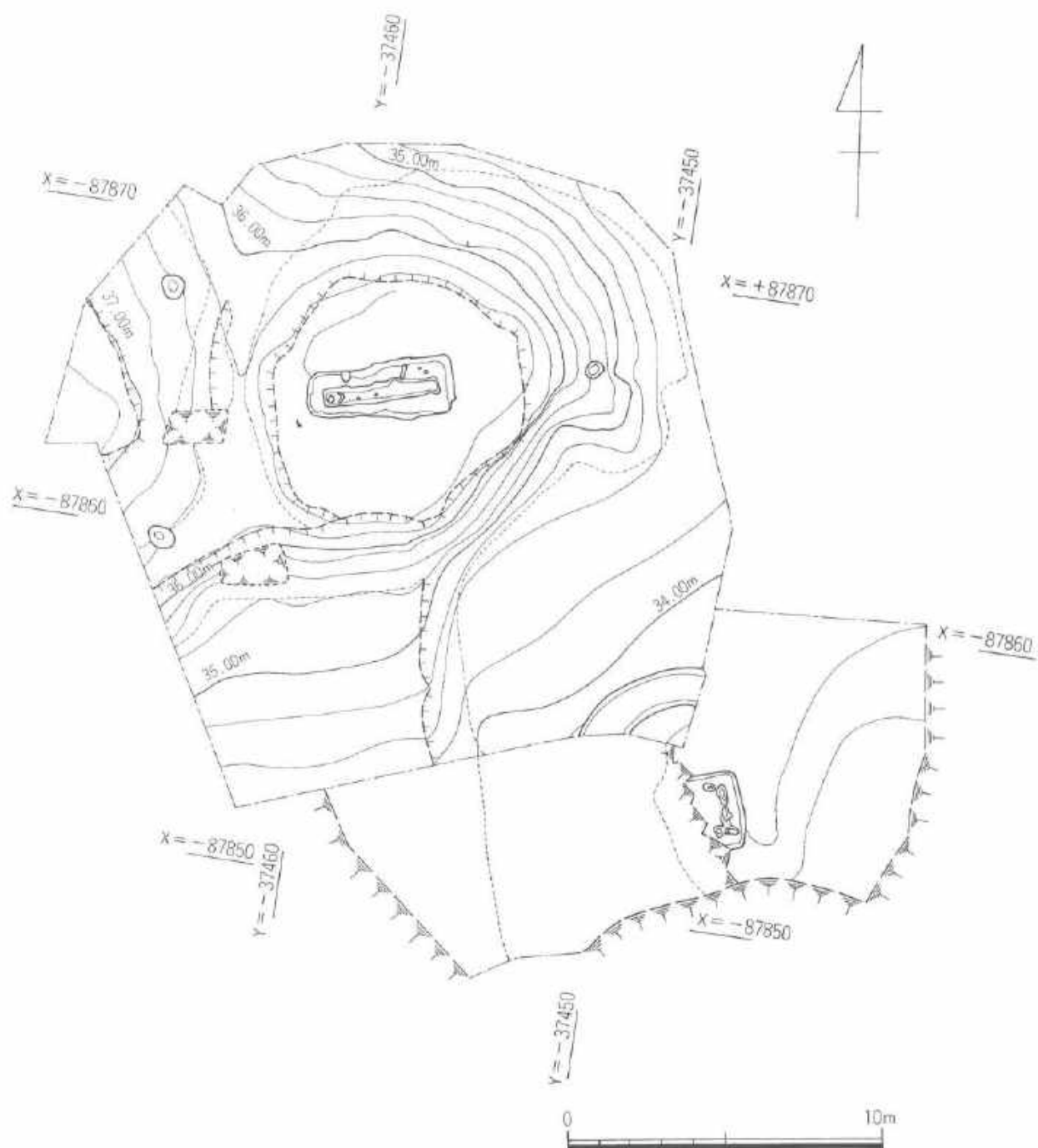
第51图 C-1·2号集石出土遗物实测图 (1/3)



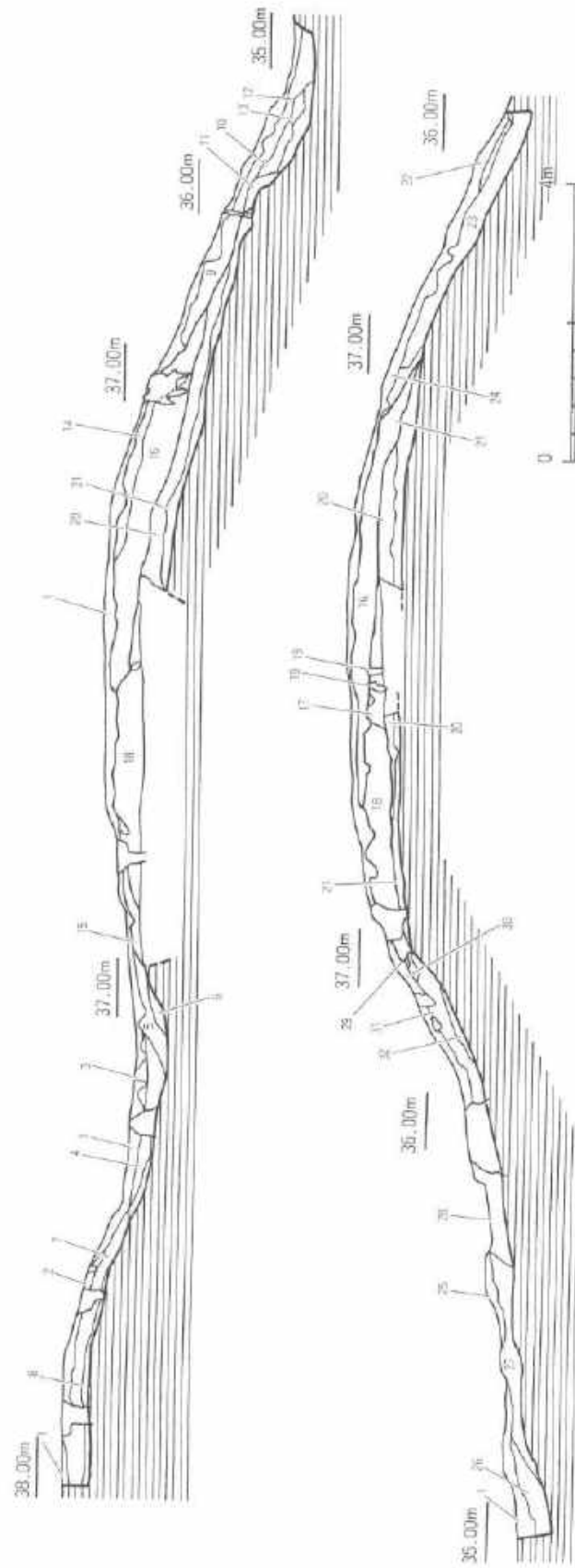
第52図 C-1・2号集石出土遺物実測図 (1/3)



第53図 C-1・2号集石出土遺物実測図 (1/3)



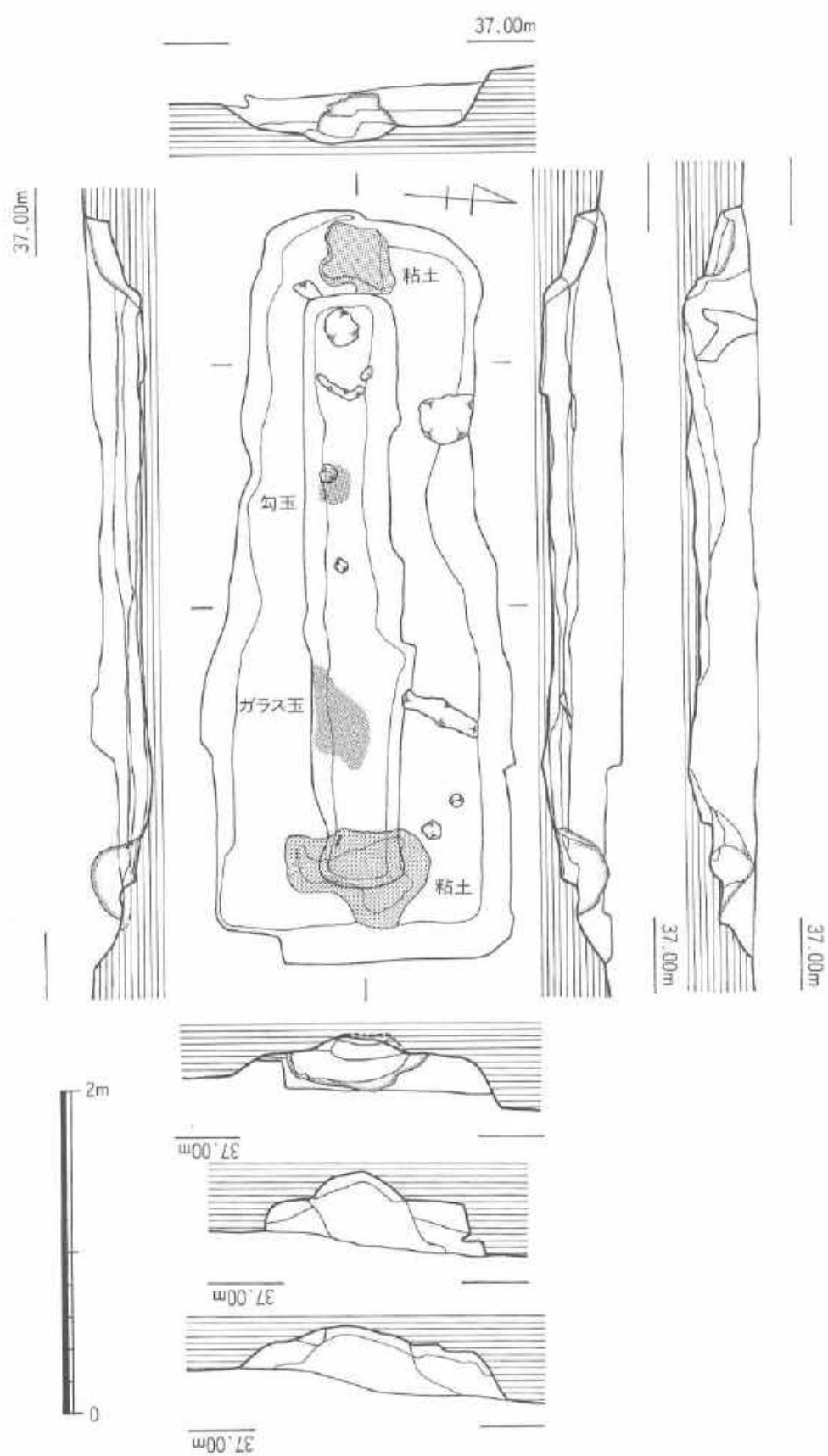
第54図 D区遺構配置図 (1/200)



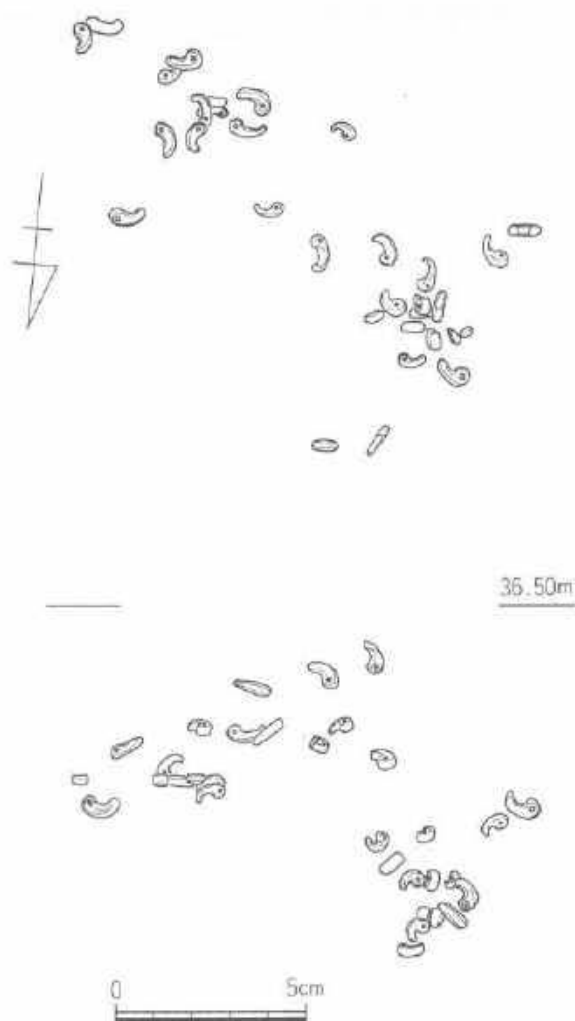
3号墳土層観察表

- | | | | |
|-----------------------|------------------------------|--------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 表土 赤褐色ブロックを含む | 12 明褐色 流土 | 23 褐色 流土 | 24 明褐色 流土 黒褐色土ブロックを少量含む |
| 2 褐色 表土 黄褐色土ブロックを少量含む | 13 明褐色 流土 | 24 明褐色 流土 | 25 明赤褐色 流土 赤褐色土ブロックを含む |
| 3 明褐色 流土 黒褐色土ブロックを含む | 14 褐色 流土 | 26 にい 褐色 流土 明褐色土混入 | 27 明赤褐色 流土 |
| 4 明褐色 流土 | 15 明赤褐色 流土 黄褐色土混入 | 27 明赤褐色 流土 | 28 赤色 流土 |
| 5 褐色 流土 | 16 褐色 流土 | 28 赤色 流土 | 29 明赤褐色 流土 褐色土ブロックを含む |
| 6 褐色 流土 | 17 明赤褐色 流土 (注: 赤褐色土) 赤褐色土を含む | 29 明赤褐色 流土 | 30 明赤褐色 流土 |
| 7 褐色 流土 | 18 明赤褐色 流土 | 30 明赤褐色 流土 | 31 褐色 流土 |
| 8 褐色 流土 明黄褐色土ブロックを含む | 19 黄褐色土ブロック | 31 褐色 流土 | 32 明黄褐色 流土 |
| 9 褐色 流土 | 20 褐色 流土 明黄褐色土ブロックを含む | | |
| 10 褐色 流土 | 21 明褐色 流土 | | |
| 11 明褐色 流土 | 22 褐色 流土 | | |

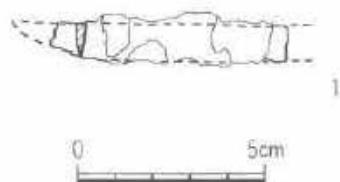
第55図 3号墳土層断面図 (1/100)



第56図 3号墳主体部遺構実測図 (1/40)



第57図
3号墳主体部勾玉出土状況実測図 (1/2)



第58図
3号墳出土鉄器実測図 (1/2)

4号墳 (D区2号墳)

4号墳は、3号墳南側の削平された崖面、現状での標高約34mに位置している。調査当初は防災のため調査対象区外であり、周溝の一部を確認するに止まっていた。その後、工事の進行に合せ主体部を検出し調査を行なった。

を構成する。②埋葬面から埋葬坑を掘り、木棺を安置する。③墳頂部に盛土を行う。

主体部 (第56図)

墳頂部の若干西よりにN-85°-Eに主軸をとる木棺を検出した。墓坑は、長軸4.60m、短軸2～1.4mで、木棺長3.65m、幅0.67～0.44mである。木棺の両小口にあたる部分から白色粘土が検出されており、小口部を粘土で密閉したものであると思われる。木棺の構造は、底部断面がU字形をなすことから割竹形木棺の直葬を想定している。頭位は、東側が若干幅広である点と、刀子、玉類の出土状況から東頭位と考えられる。

遺物

鉄器 (第58図)

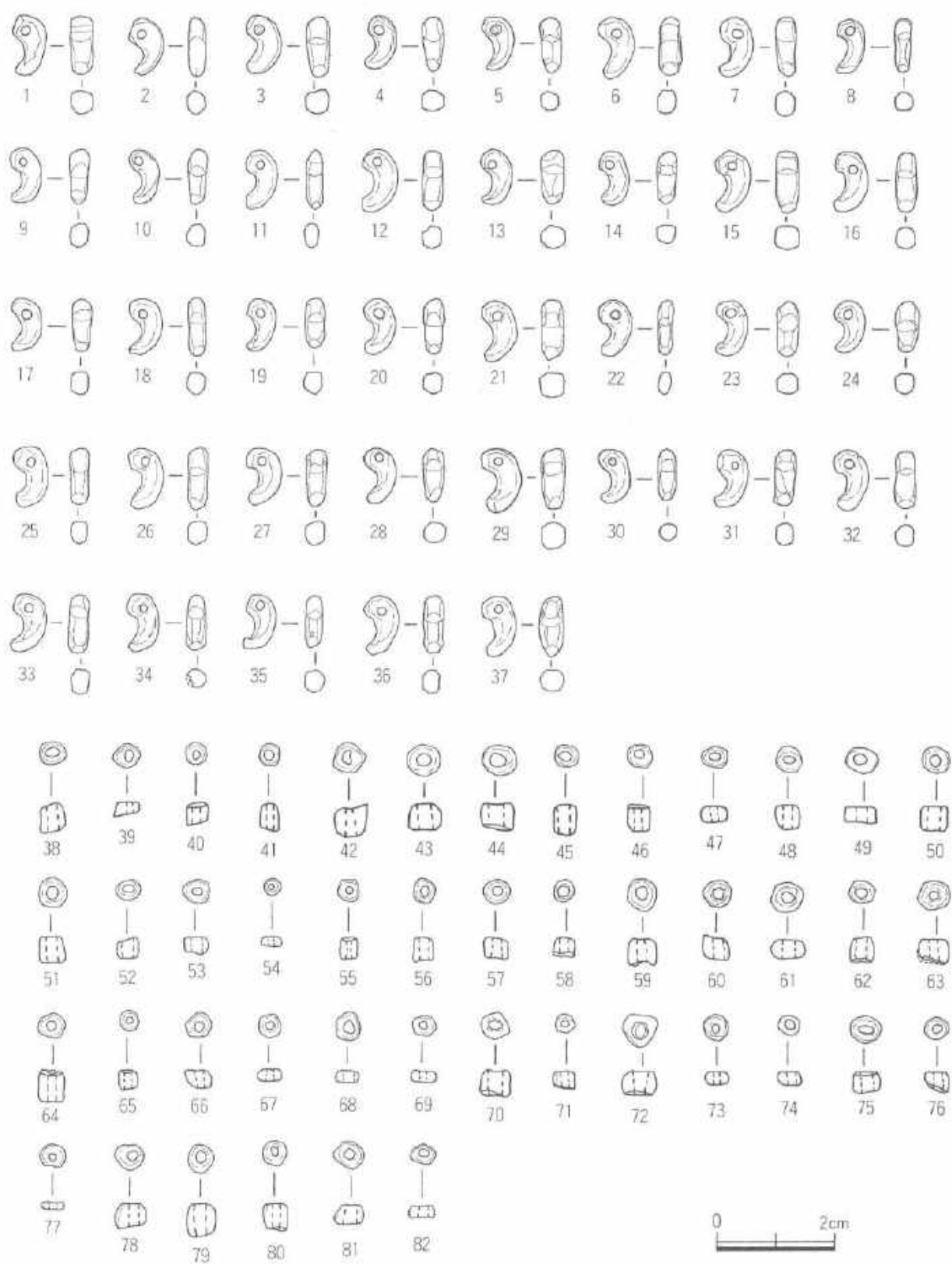
東側粘土塊南よりから出土した刀子で、刃部先端と基部を欠損する。残存長6.25cm、刃部幅1.0cm、重量7.84gである。

玉類 (第59図)

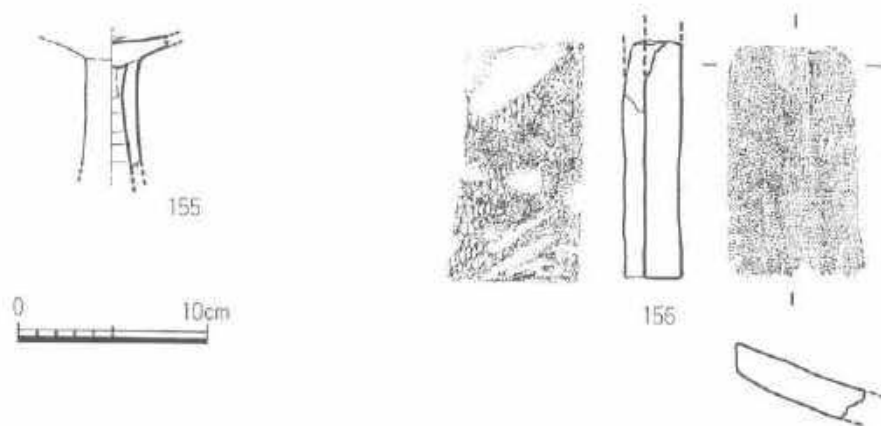
勾玉は、白色から緑灰色の長さ1cm前後の小型品で、棺中央部付近南側から集中して出土しており、出土状況から紐のようなものに通されていた可能性がある。全長は、1.2～0.85cm、厚さ0.4～0.28cm、孔径0.18～0.12cmである。

なお、石材は分析の結果緑泥石製であることが判明している。

ガラス玉は、断面俵形で、色調は青から青緑色を呈し、径0.6～0.32cm 厚さ0.5～0.15cm、孔径0.22～0.08cmである。



第59图 3号墳出土玉類実測図 (1/1)



第60図 3号墳出土遺物実測図 (1/4)

墳丘 (第54図)

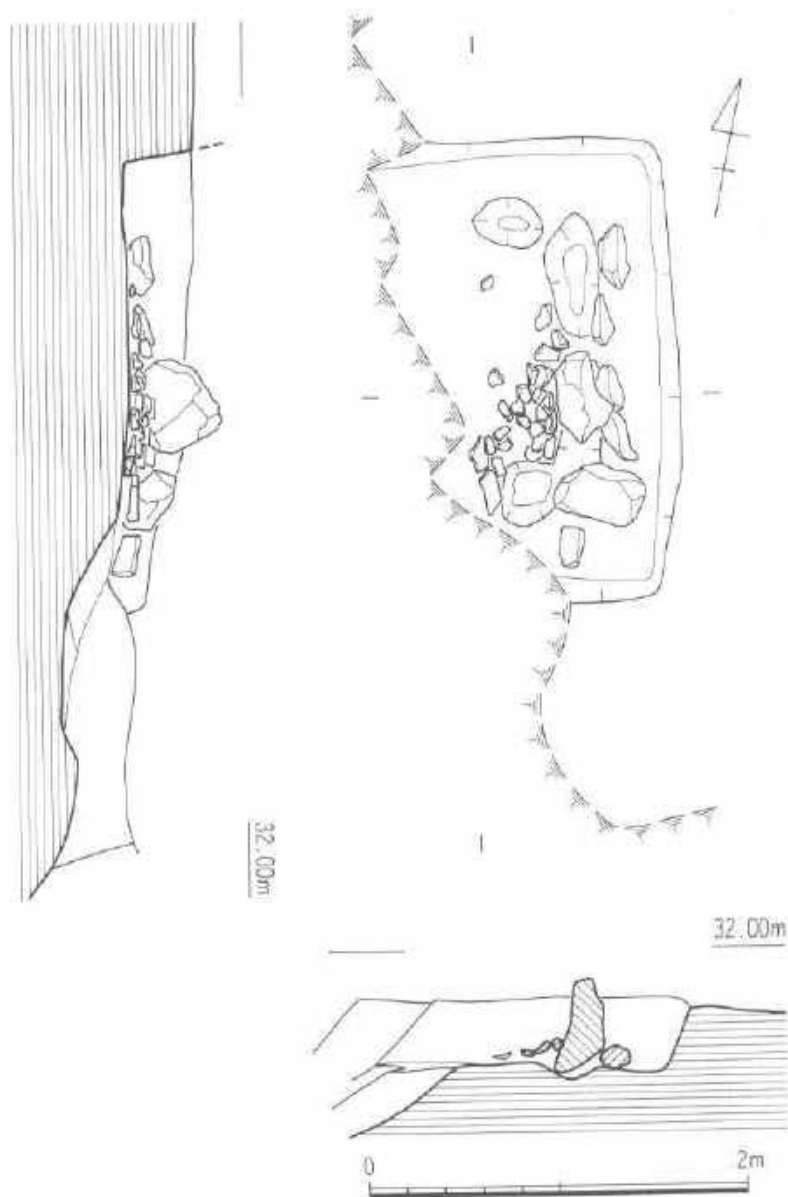
墳丘盛土は、崖面に位置することから確認することはできず、僅かに周溝の一部を検出したに止まる。溝は、幅1.4m、深さは0.14mで緩やかに弧を描く。このことから、墳形は円形であると考えられるが、詳細は不明である。

主体部 (第61図)

主体部は、小形の単室の横穴式石室と考えられるが、石材の大半を失い、石室も削平を受け過半を消失している。石室堀方は、検出面で長軸2.46m、短軸1.5m、深さ0.38m、基底面長は長軸2.24m、短軸1.24m、石室のプランは長軸1.13m、短軸0.6mである。残存する石材もそのほとんどが現位置を保っておらず石室構造は不明であるが、東側側壁の石材抜跡から側壁腰石は2～3個の石材が使用されていたと考えられる。墓道は、南側に存在していたと考えられるが、削平を受けているため不明である。なお、遺物は確認されていない。

小結

3・4号墳の時期については、3・4号墳共に土器等の時期決定に有効な遺物の出土が乏しいため明確な時期決定は成し得ないが、主体部の構造や出土遺物から大まかな時期を比定することは可能である。3号墳は、割竹形木棺の直葬を主体部とすることから、少なくとも5世紀前半代以降には下らないと考えられ、さらに主体部内出土勾玉に類似する勾玉が5世紀初頭の玄海町神湊井牟田古墳から出土していることから4世紀末～5世紀初頭に位置付けて問題ない。4号墳は、主体部と周溝の一部を検出したに止まり、遺物も皆無であるが、主体部が単室の横穴石室であることから6世紀代に想定でき、より詳細な時期については、石室が半ば以上削平を受けていたため決定することができない。



第61図 4号墳主体部遺構実測図 (1/40)

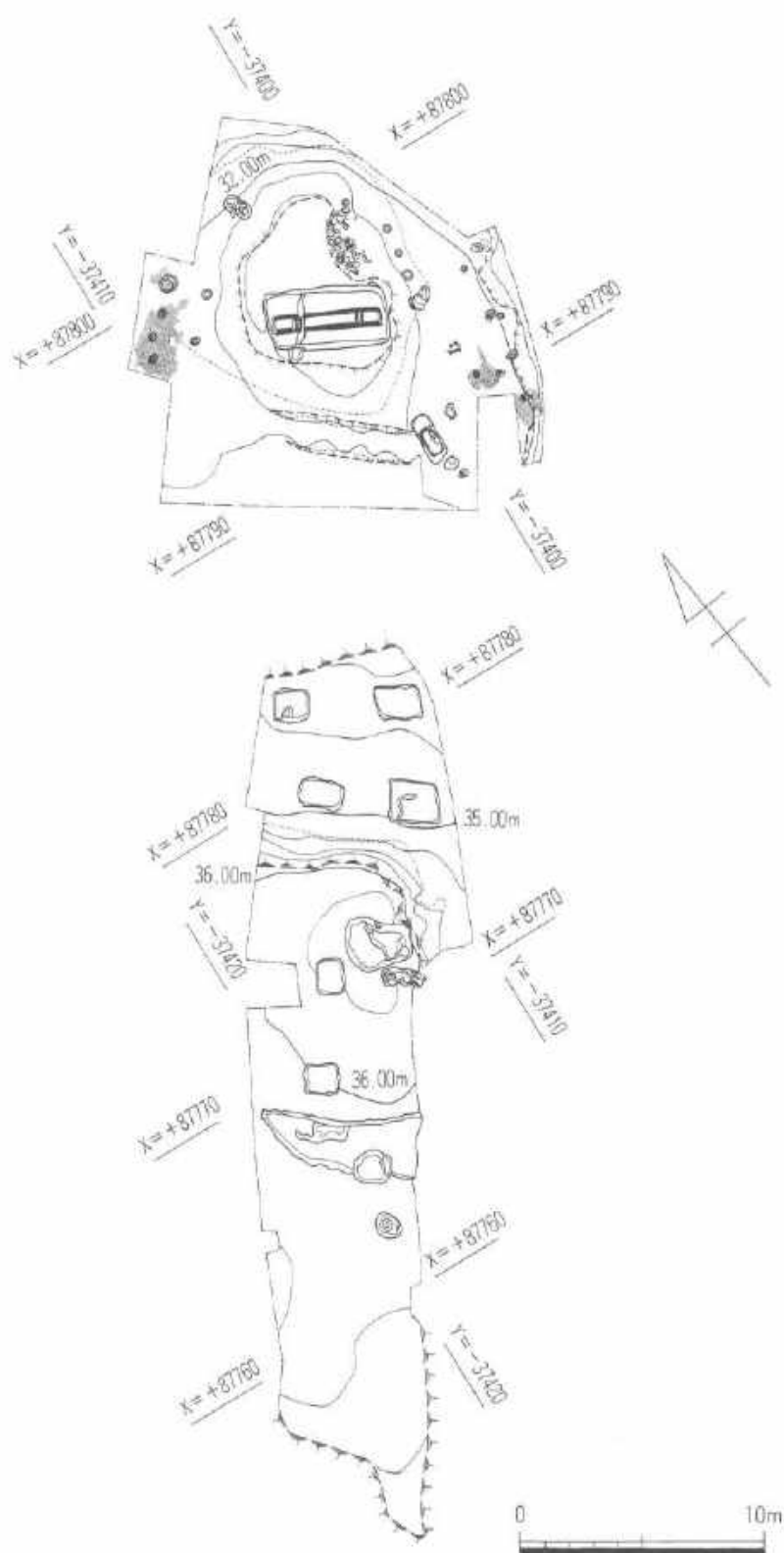
5. E区の調査

5号墳 (E区1号墳)

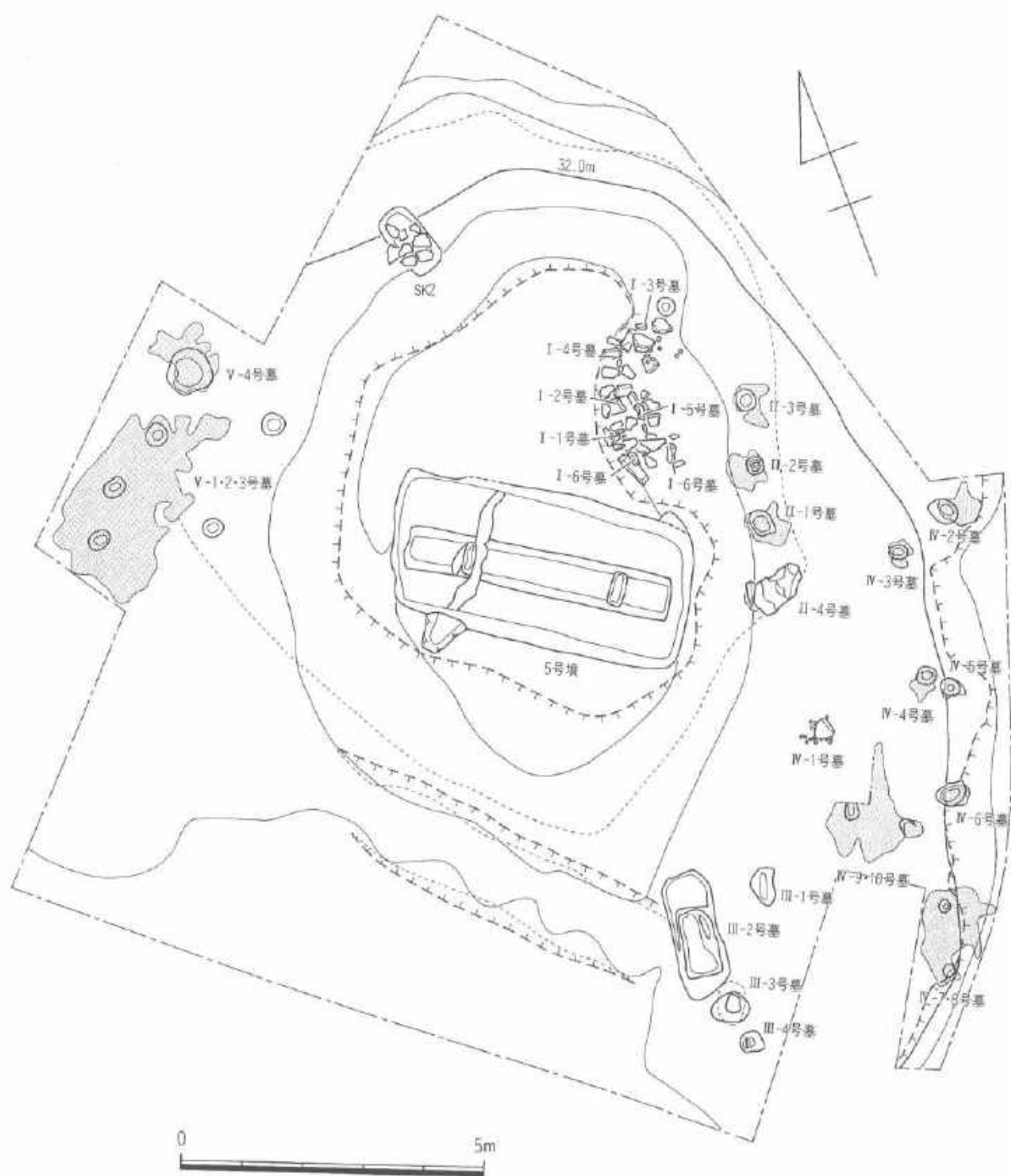
3・4号墳が立地する丘陵から谷を挟んだ南側の独立丘陵北側、標高33～34mに位置する。現況は、僅かな盛土を有する円墳と思われたが、社の建設における丘陵の削平等により大幅な墳丘の削平が考慮された。調査は、中心から任意の方向に十字に土層確認のためのベルトを残し、主体部堀方と墳丘規模を確認するために掘り下げを行なった。

墳丘 (第63図)

墳丘は、かなりの削平を受けており、墳裾の確認ができず墳形は不明である。盛土は、最大で1.0mが残存しており、木棺埋葬後順次盛り付けられている。墳丘は、北に傾斜する丘陵上に



第62図 E区遺構配置図 (1/300)



第63図 5号墳・E-集石墓遺構配置図 (1/100)

所在するために地形的な制約を受けている。築造順序としては、地山整形を行なうと同時に北側に盛土し、木棺を埋葬するための平坦面を設け、木棺設置後に順次盛土を盛っていくと考えられ、同じく丘陵先端緩斜面に築かれている3号墳と類似した状況を示す。

主体部（第64図）

礫床を有す組合式木棺で、墳丘中央盛土下約1mから堀方を検出した。墓壇は、主軸をN-56°-Wにとり、長軸4.97m、短軸2.53m、内法長軸4.84m、短軸2.06m、深さ0.9mで、その中心に長軸4.36m、幅0.7mの組合式木棺を設置している。木棺の棺材はすでに失われていたが、両側版と小口板の設置痕が確認され、さらに目張りに使用したと考えられる白色粘土が小口部・側版部から検出されている。これら棺痕跡から木棺を復元すると、約4.2mにおよぶ長大な側版で両小口を扶むタイプのものであり、木棺内には区画された3つの空間が作られる。3つの区切りのうち東西両端のものはおかず箱と呼ばれるものであるが、遺物は確認されていない。また、中央部には被葬者を埋葬していたと考えられ、東側小口部付近を中心として赤色顔料の散布が確認されている。棺底部に敷かれた礫は、東側に4～5cm大のものを敷、西側にいくにしたがい2～3cm大の礫を敷いている。特に、東側小口付近には大ぶりの礫を集めて周囲より1段高くしており、枕としていたと考えられる。頭位は、大ぶりの礫を枕としており、東側小口部に赤色顔料が顕著に認められることから東側にあると考えられる。

集石墓

5号墳周辺から中世期の集石墓が数多く検出されている。集石墓は、5号墳を取り囲むように分布しており、29基が確認された。集石墓は、分布範囲から5号墳を挟み大きく東側と西側に分類でき、さらに密集の割合により6群に分けることができる。

I 群

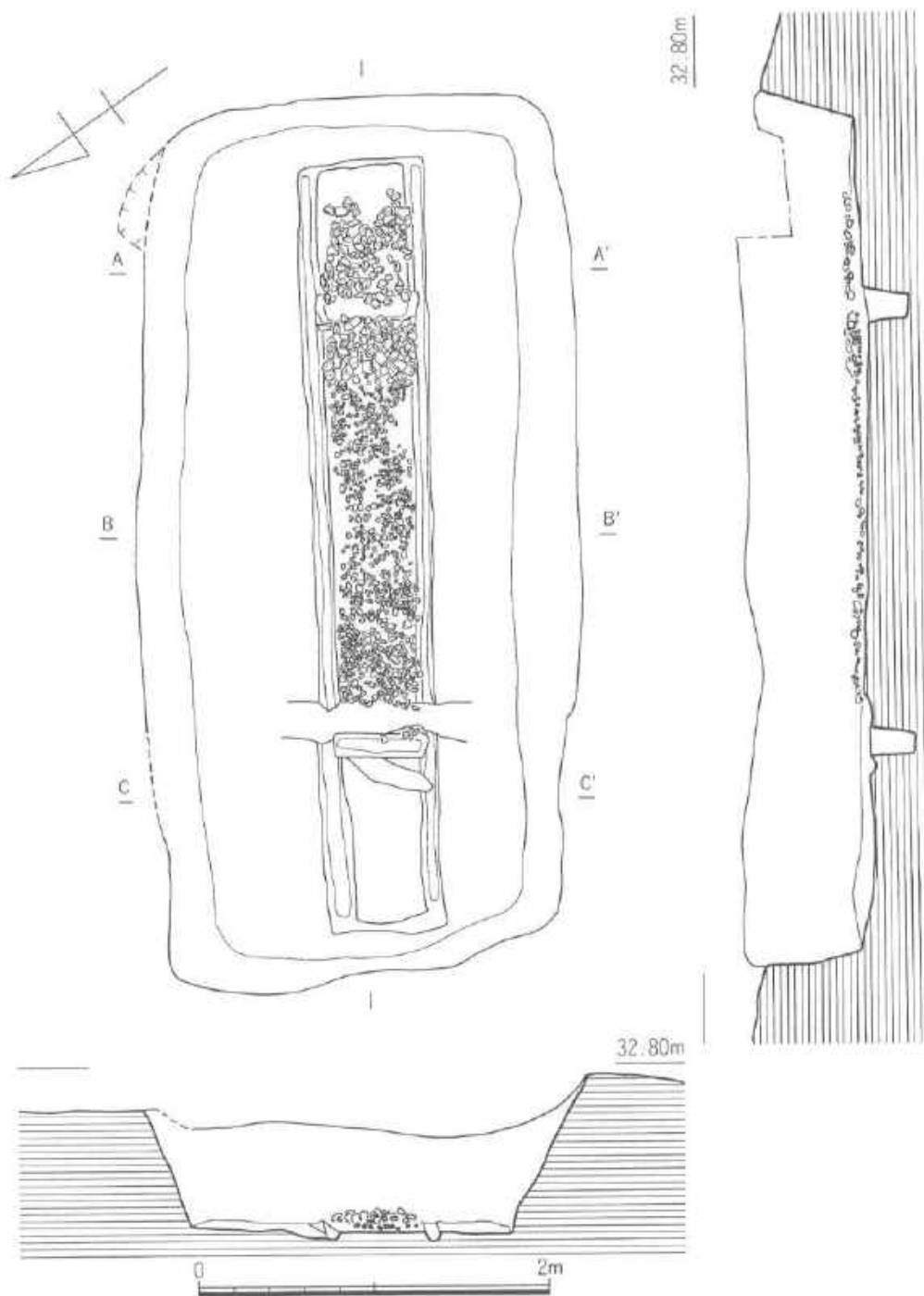
I 群は、5号墳北部の墳丘上に位置し、墓壇の上部構造に標石と石組みを持つ1群である。

I-1号墓（第66図）

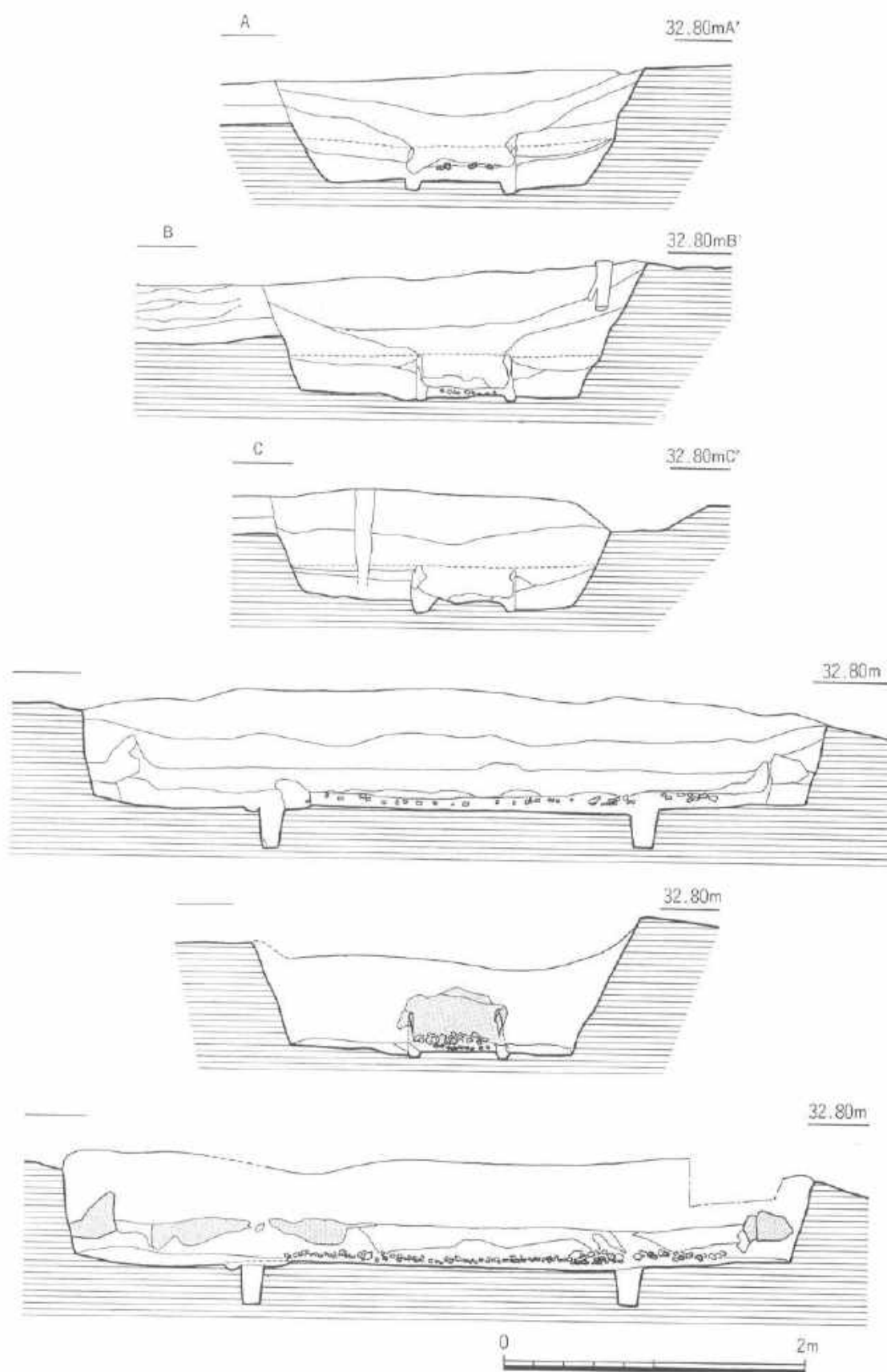
1号墓は、I群中央の最高所に位置する。墓壇は、南北を縦長の礫で、東側を大形礫3点で、西側を小礫2点で囲み、墓壇上面には角礫を3点敷き蓋としている。また、西側の斜面上方に先端の尖る三角礫を立て標石とする。墓壇は、上面の礫を除去後、円形ピットを確認した。規模は、径0.24m、深さ0.1mで、遺物の出土はない。

I-2号墓（第66図）

2号墓は、1号墓の北に隣接して位置する。墓壇は、東西南側に角礫を2点ずつ用いて囲まれ、墓壇上面には扁平な礫を用い蓋としている。また、西側には台形状の石を立て標石とする。墓壇は、上面の礫を除去後、不整円形ピットを確認した。規模は、0.31×0.28m、深さ0.16mで、遺物の出土はない。



第64図 5号墳主体部遺構実測図 (1/40)



第65图 5号墳主体部土層断面図 (1/40)

I-3号墓 (第66図)

3号墓は、4号墓の北東に隣接して位置する。墓壇検出時、3号墓は、木の下に位置しており、集石は現位置を保っていなかった。墓壇は、円形ピットで、径0.29m、深さ0.21mを測り、墓壇内から焼骨片が多く出土した。

I-4号墓 (第66図)

4号墓は、2・5号墓の東に隣接して位置する。墓壇は、周囲を小円礫によって囲まれ、西側に大ぶりの角礫5点を配しその中央に先端の尖る三角礫を立て標石としている。墓壇上面には、扁平な礫を用いて蓋とし、下部より円形の墓壇を検出した。墓壇規模は、径0.25m、深さ0.15mで、壇内より焼骨片を検出している。

I-5号墓 (第67図)

5号墓は、1・2号墓の東に隣接して位置する。墓壇は、南北を2～3点の角礫によって囲まれ、東側には礫を配置しない。西側には、長方形の礫を立て標石とし、墓壇上面には、扁平な礫を用いて蓋としている。墓壇は、蓋石除去後に楕円形ピットを検出した。墓壇規模は、0.28×0.19m、深さ0.13mで、焼骨片が出土している。

I-6号墓 (第67図)

6号墓は、1号墓南側に隣接して位置する。墓壇は、西側に1点、北側に3点の礫を配し、東南には礫は配置されていない。標石は、確認されておらず、墓壇上面には、扁平な礫を用いて蓋石としている。墓壇は、蓋石除去後に楕円形ピットを検出した。墓壇規模は、0.36×0.24m、深さ0.15mで、墓壇内から5枚の銅銭が出土している。

I-7号墓 (第67図)

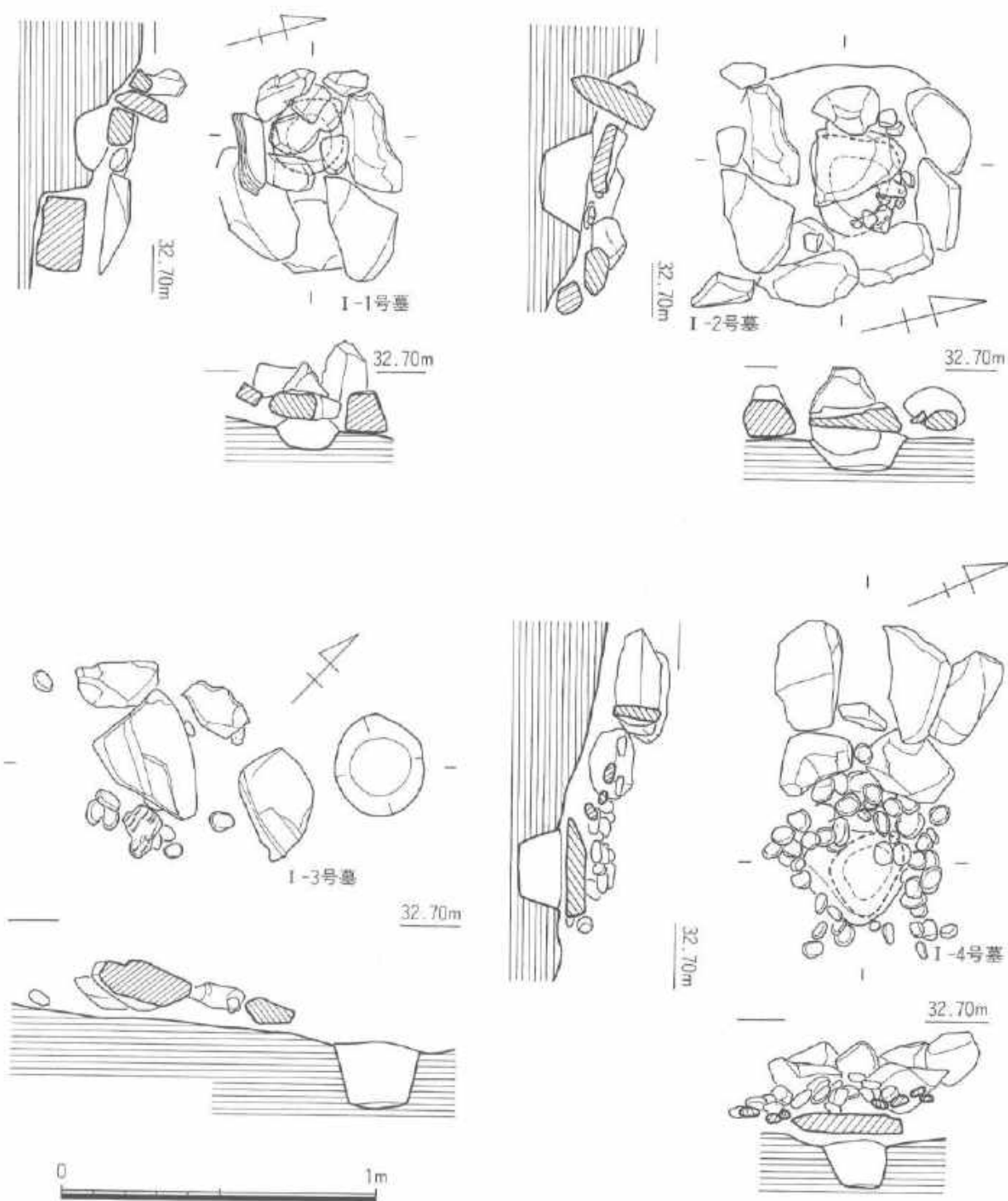
7号墓は、6号墓の東に隣接して位置する。集石は、南・西側に1点ずつの礫を配し、東・西側の礫は確認できなかったが、本来礫が配されていたのか、削平されたのかは不明である。標石・蓋石も確認できなかった。墓壇は、径0.35m、深さ0.1mの円形ピットで、焼骨片が出土している。

II群

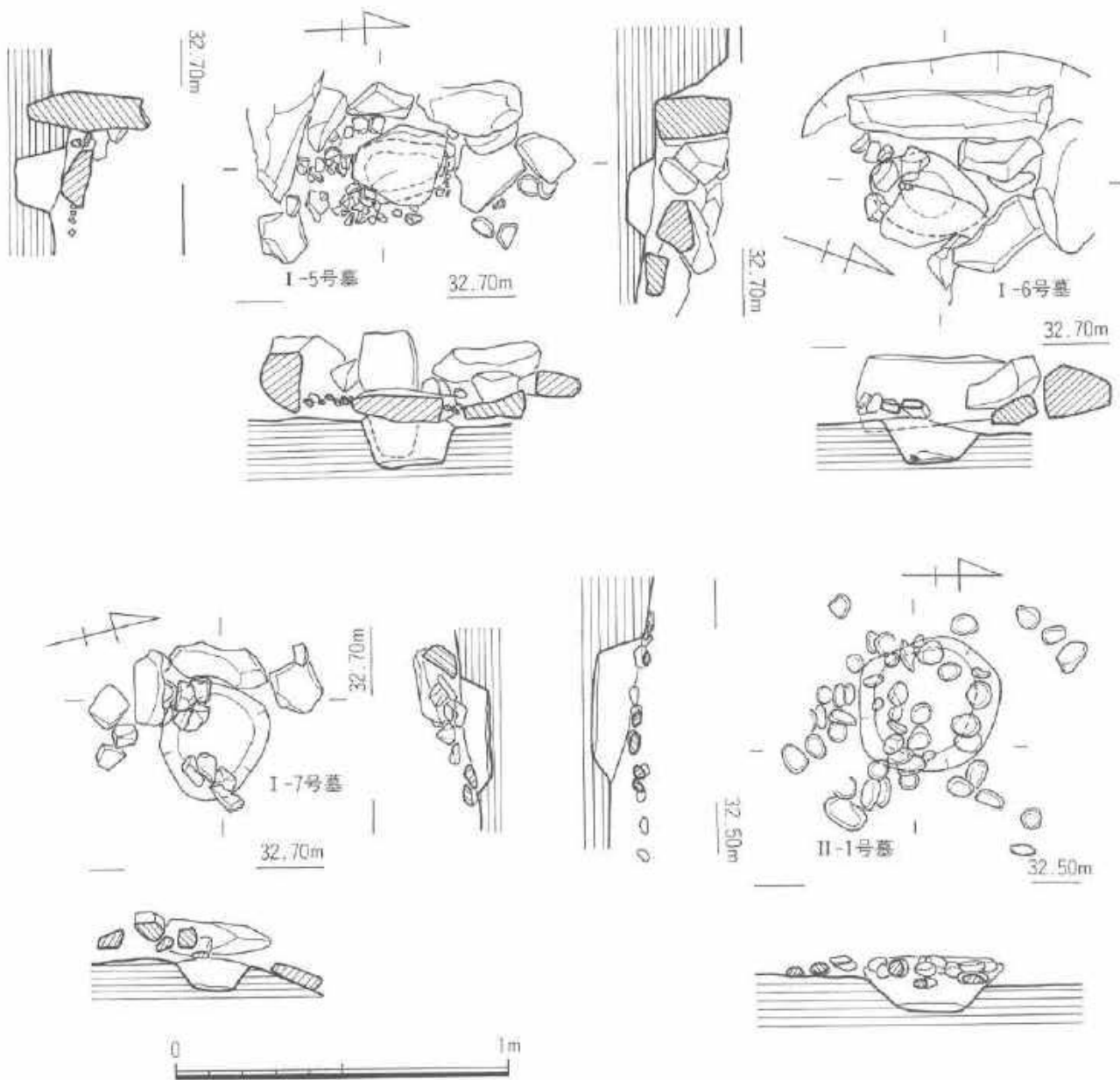
II群は、I群の東側に近接する1群で、I群からは若干丘陵を下がった地点に位置する。II群は、4基の集石墓からなり、南北方向にほぼ50cm間隔で1列に並ぶ。集石の方法は、墓壇の上面に小円礫を集めるというもので、I群とは墓の構築方法が異なる。

II-1号墓 (第67図)

1号墓は、II群中南から2番目に位置し、集石は直径約0.7mの範囲に及び、集石下より円形ピット状の墓壇を検出した。墓壇規模は、径0.45m、深さ0.12mで、内部より焼骨片が出土している。



第66图 E-I-1~4号集石墓遺構実測図 (1/20)



第67図 E-I-5～7・II-1号集石墓遺構実測図 (1/20)

II-2号墓 (第68図)

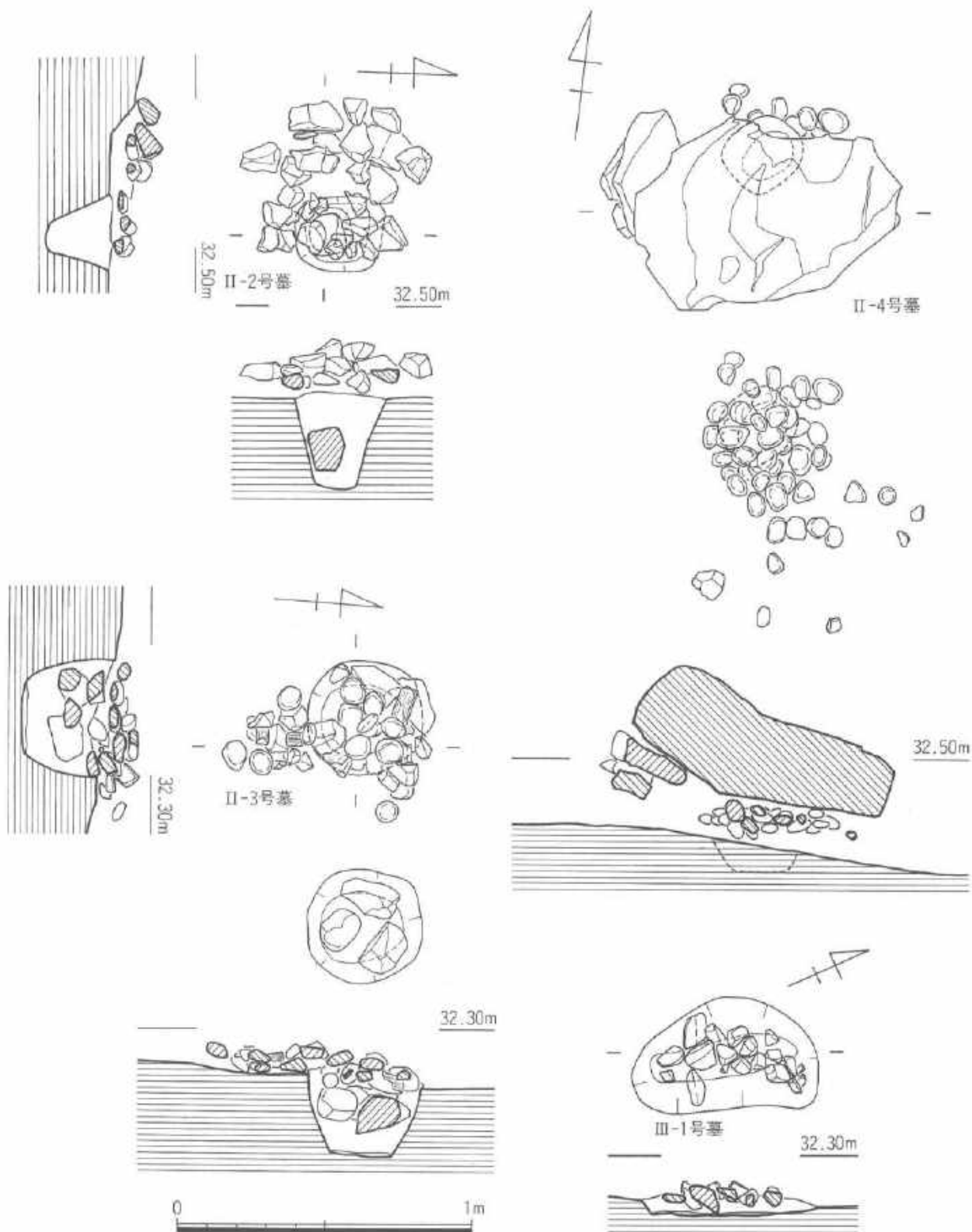
2号墓は、1号墓北側に位置し、集石は直径約0.6mの範囲に及び、集石下より円形ピット状の墓壇を検出した。墓壇規模は、径0.3m、深さ0.3mで、内部より焼骨片が出土している。

II-3号墓 (第68図)

3号墓は、2号墓の北側に位置し、集石は長軸0.76m、短軸0.5mの範囲に及ぶ。集石下より円形ピット状墓壇を検出し、規模は径0.4m、深さ0.27mで、内部より落ち込んだと思われる礫と人骨片が出土した。

II-4号墓 (第68図)

4号墓は、II群の南端に位置し、1～3号墓と異なり、長軸0.9m、短軸0.6m、厚さ0.3mも



第68図 E-II-2~4・III-1号集石墓遺構実測図 (1/20)

の大石が墓壇の上に設置されていた。大石の東側下部からは、3点の礫が確認され、大石下直径約0.6mの範囲には円礫が確認され、円礫下からは円形ピット状の墓壇が検出された。墓壇規模は、径0.26m、深さ0.1mで、内部より人骨片が出土している。また、墓壇上に設置された大石は、埋葬当時から現状にあったものが、あるいは立てられていたものかは明確ではないが、いずれにせよⅠ群の各集石墓同様に大石には標石としての役割があったものと考えられる。さらに、大石の下部構造がⅡ群の各墓に共通するため、元来1～3号墓においても大石のような施設が存在していた可能性を推測させる。

Ⅲ群

Ⅲ群は、Ⅱ群の南に位置し、長方形墓壇を有す2号墓を含む4基の集石墓から成っている。墓は、1号墓を除きほぼ南北方向に並び、1号墓は2号墓の東に立地する。

Ⅲ-1号墓 (第68図)

1号墓は、2号墓の東に隣接して位置する。集石は、小円礫を墓壇上面に配置しており、その下部から楕円形墓壇を検出した。墓壇規模は、長軸0.64m、短軸0.32m、深さ0.05mで、内部より人骨片が出土している。

Ⅲ-2号墓 (第69図)

2号墓は、Ⅲ群中北端に位置する。集石は、小円礫を墓壇上面1.1m×0.5mの範囲にあり敷石状を成す。墓壇は、この集石を内包する形で、長軸2.1m、短軸0.8mの掘方を検出し、その中にN-8°-Eに主軸を取る長軸11.8m、短軸0.6m、深さ0.7mの長方形墓壇を検出した。遺物は、墓壇床面より土師器皿2点、白磁皿1点、人骨片が出土している。

Ⅲ-3号墓 (第70図)

3号墓は、2号墓の南に位置する。集石は、直径約0.3mの範囲に認められ、下部より楕円形墓壇を検出した。墓壇規模は、0.62×0.42m、深さ0.76mで断面袋状の土坑である。遺物は、人骨片が出土している。

Ⅲ-4号墓 (第70図)

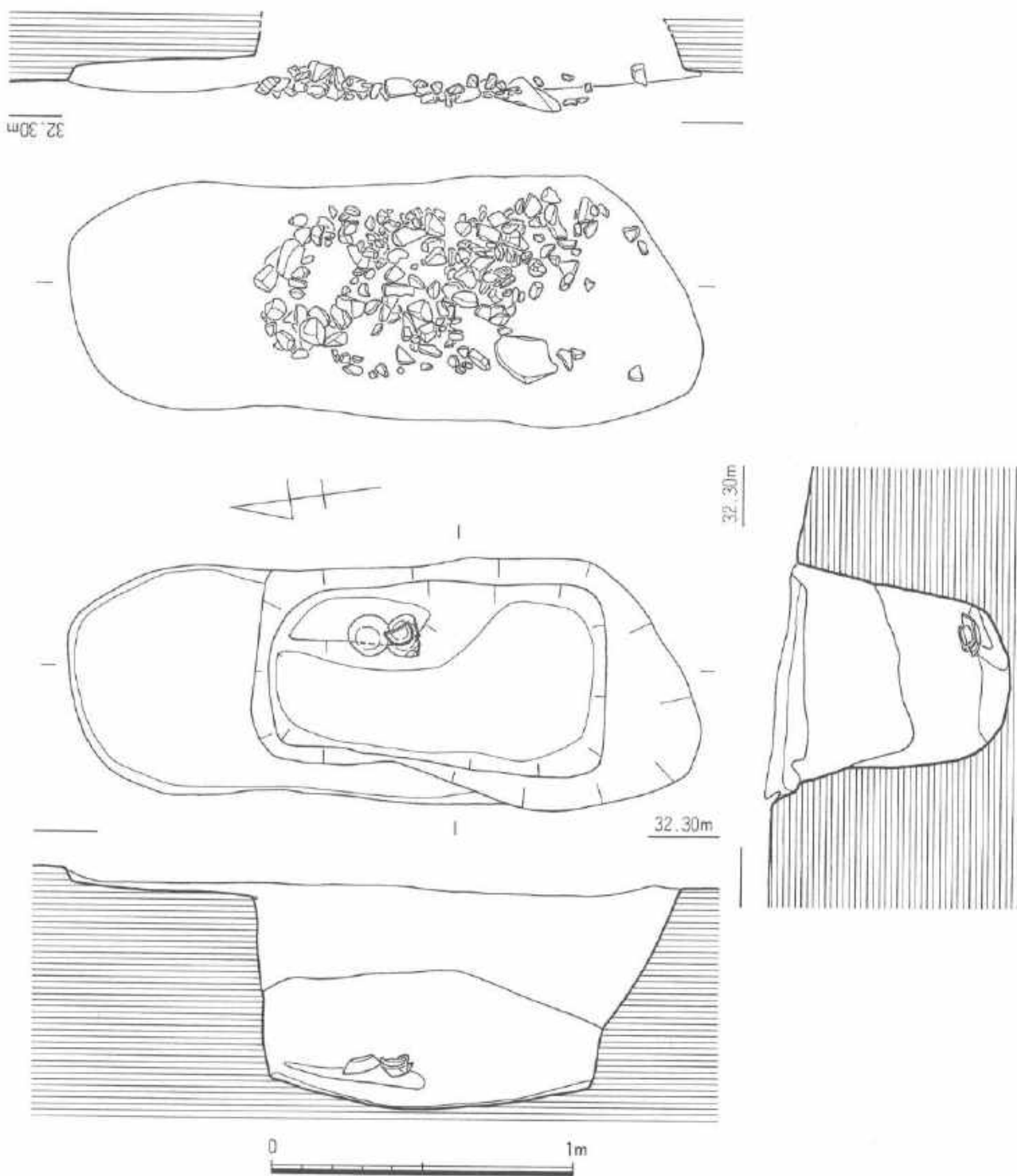
4号墓は、Ⅲ群の南端に位置する。集石は、径0.2mの範囲に認められ、下部より楕円形墓壇を検出した。墓壇規模は、0.39×0.29m、深さ0.32mで、内部より人骨片が出土している。

Ⅳ群

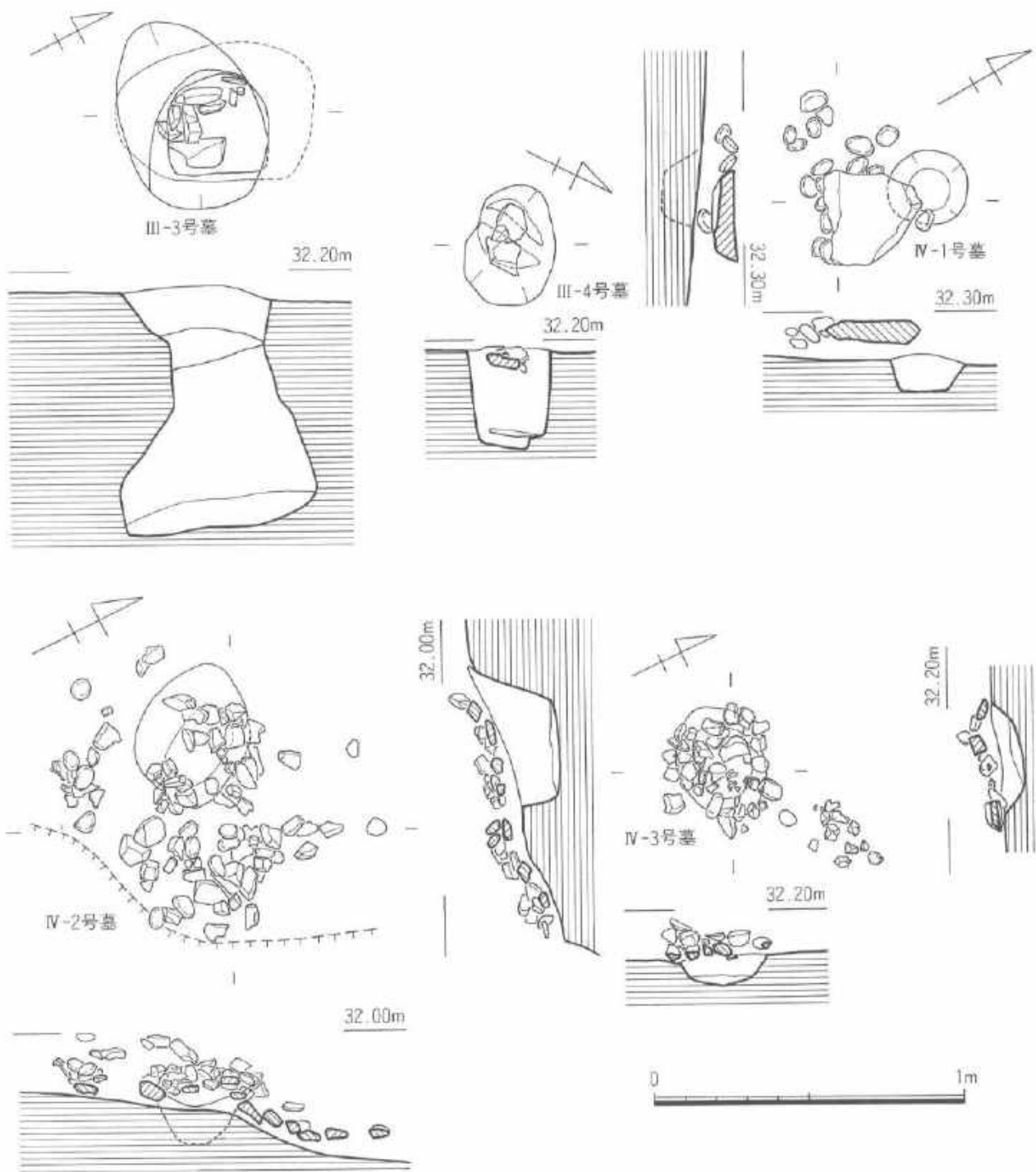
Ⅳ群は、Ⅱ・Ⅲ群の東側、調査区東端部に位置する。集石墓は、円礫を集積して墓域を形成しており、分布状況は、1号墓が若干の距離を置くものの、他の遺構は南北方向に並ぶ。

Ⅳ-1号墓 (第70図)

1号墓は、Ⅳ群よりやや西に距離を置いて位置する。集石は小円礫と扁平な礫を用い0.5m四方に認められ、集石下部より円形墓壇を検出した。墓壇規模は、径0.26m、深さ0.12mで、遺物は出土していない。



第69図 E-Ⅲ-2号集石墓遺構実測図 (1/20)



第70図 E-Ⅲ-3・4・Ⅳ-1～3号集石墓遺構実測図 (1/20)

Ⅳ-2号墓（第70図）

2号墓は、調査区の東端に位置する。集石は、小円礫が長軸0.75m、短軸0.5mの範囲に分布し、集石の西側下部より円形墓壇を検出した。墓壇規模は、径0.46m、深さ0.26mで、内部から人骨片が出土している。

Ⅳ-3号墓（第70図）

3号墓は、2号墓の西側1mに位置する。集石は、小円礫が径約0.4mの範囲に分布し、集石下部より円形墓壇を検出した。墓壇規模は、径0.37m、深さ0.1mで、内部から人骨片が少量出土している。

Ⅳ-4号墓（第71図）

4号墓は、3号墓の南側1.3mに位置する。集石は、小円礫が径約0.5mの範囲に分布し、集石の東側下部より円形墓壇を検出した。墓壇規模は、径0.3m、深さ0.2mで、内部より人骨片が少量出土している。

Ⅳ-5号墓（第71図）

5号墓は、4号墓の東に近接して位置する。集石は、小円礫が径約0.4mの範囲に分布し、集石下部より円形墓壇を検出した。墓壇規模は、径0.3m、深さ0.15mで、内部より人骨片が少量出土している。

Ⅳ-6号墓（第71図）

6号墓は、5号墓の南側1.2mに位置する。集石は小円礫が径約0.45mの範囲に分布し、集石下部より円形墓壇を検出した。墓壇規模は、径0.45m、深さ0.33mで、内部より崩落した礫と少量の人骨が出土している。

Ⅳ-7・8号墓（第72図）

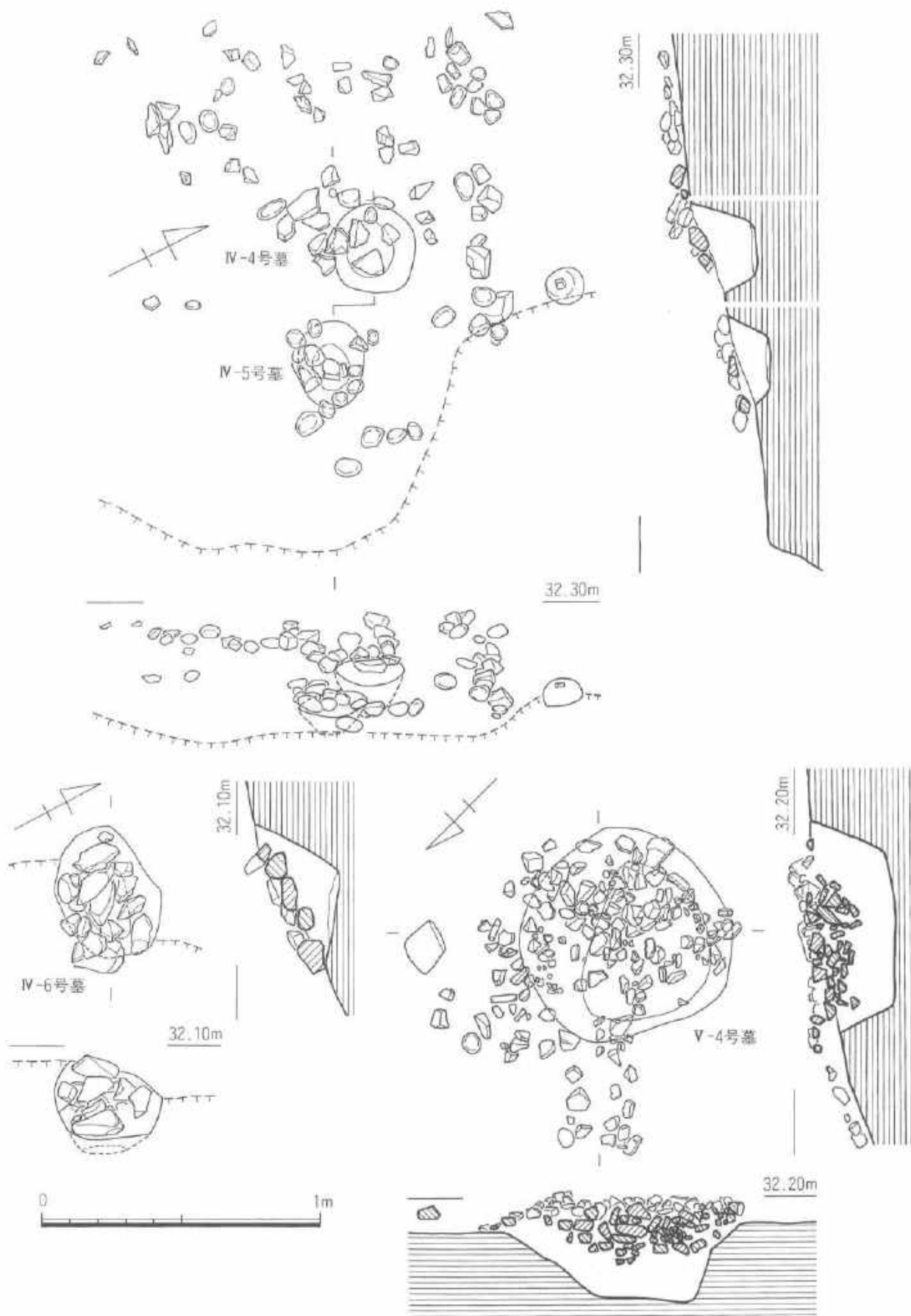
7・8号墓は、6号墓の南側1.2mの礫が密集する場所に位置する。密集する礫の範囲は、1.6m×1.0mで、礫を除去した結果2基の円形墓壇を検出した。このため、それぞれの墓壇に伴う集石の範囲は明確ではない。7号墓の墓壇規模は、径0.22m、深さ0.1mで、内部より人骨片が少量出土した。8号墓の墓壇規模は、径0.15m、深さ0.15mで、内部から土師皿が1点出土している。

Ⅳ-9・10号墓（第72図）

9・10号墓は、6号墓の西側1mの礫が密集する場所に位置する。密集する礫の範囲は、1.9m×1.55mで、礫を除去した結果2基の円形墓壇を検出した。このため、それぞれの墓壇に伴う集石の範囲は明確ではない。9号墓の墓壇規模は、径0.35m、深さ0.1mで、内部から人骨片が出土している。10号墓の墓壇規模は、径0.25m、深さ0.08mで、内部から人骨片が少量出土している。

V群

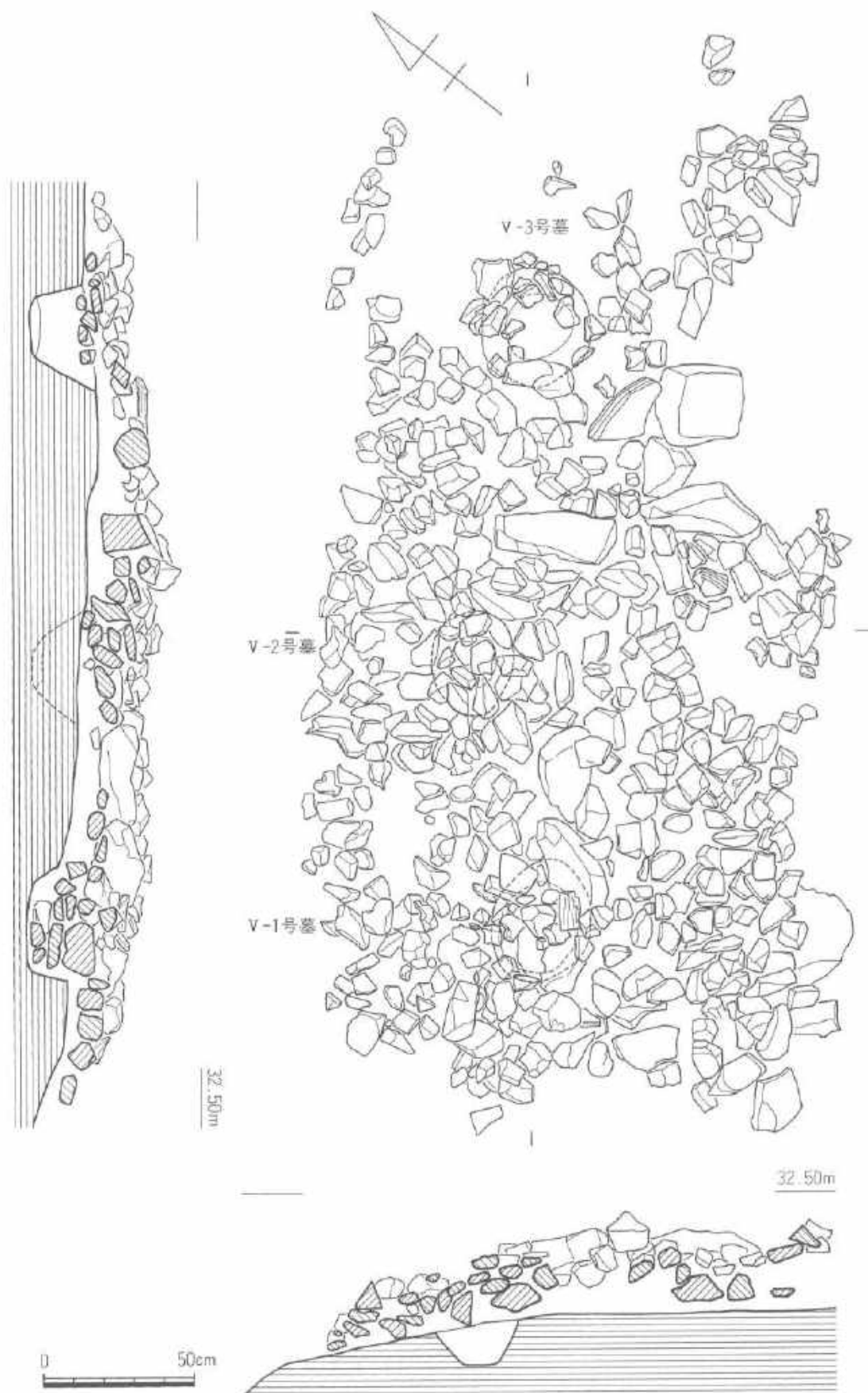
V群は、5号墳を挟んだ西側の調査区西端部に位置する。集石墓は、円礫を集積して墓域を形成しておりほぼ南北方向に並ぶ4基の墓壇を検出している。



第71図 E-IV-4~6・V-4号集石墓遺構実測図 (1/20)



第72図 E-IV-7~10号集石墓遺構実測図 (1/20)



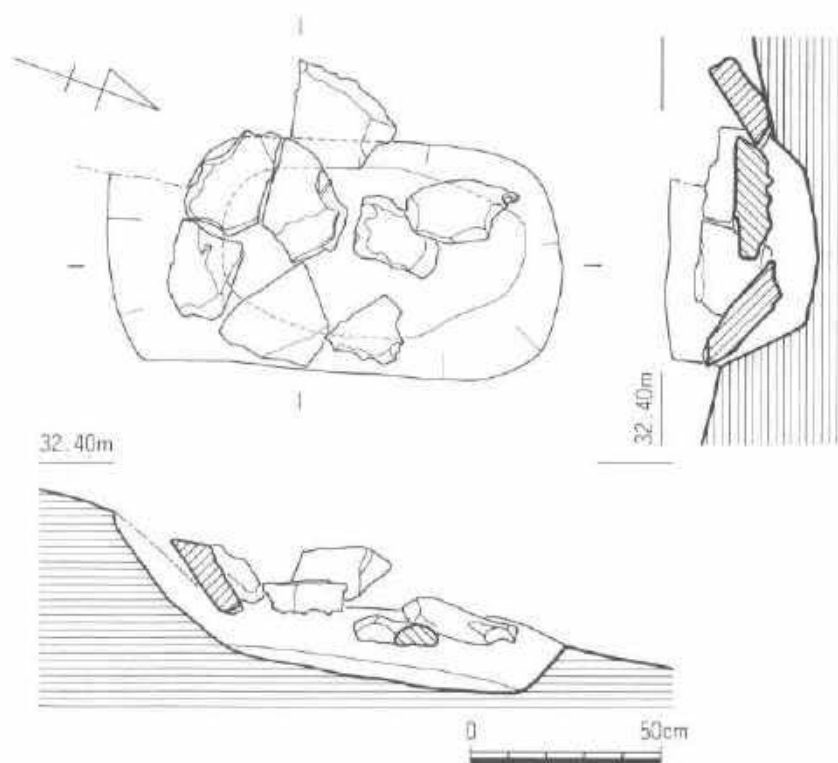
第73図 E-V-1~3号集石墓遺構実測図 (1/20)

V-1・2・3号墓 (第73図)

1・2・3号墓は、調査区西端の礫が密集する場所に位置する。密集する礫の範囲は、3.4m×1.7mで、礫を除去した結果3基の円形墓壇を検出した。このため、それぞれの墓壇に伴う集石の範囲は明確ではない。1号墓の墓壇規模は、径0.4m、深さ0.2mで、内部から人骨片が出土している。2号墓の墓壇規模は、径0.35m、深さ0.15mで、内部からは、人骨片が出土している。3号墓の墓壇規模は、径0.4m、深さ0.1mで、内部からは、礫とともに人骨片が出土している。

V-4号墓 (第71図)

4号墓は、3号墓の北に隣接して位置する。集石の範囲は、1.1m×0.9mで、集石南側下部より円形墓壇を検出した。墓壇規模は、径0.75m、深さ0.32mで、内部からは人骨片が出土している。



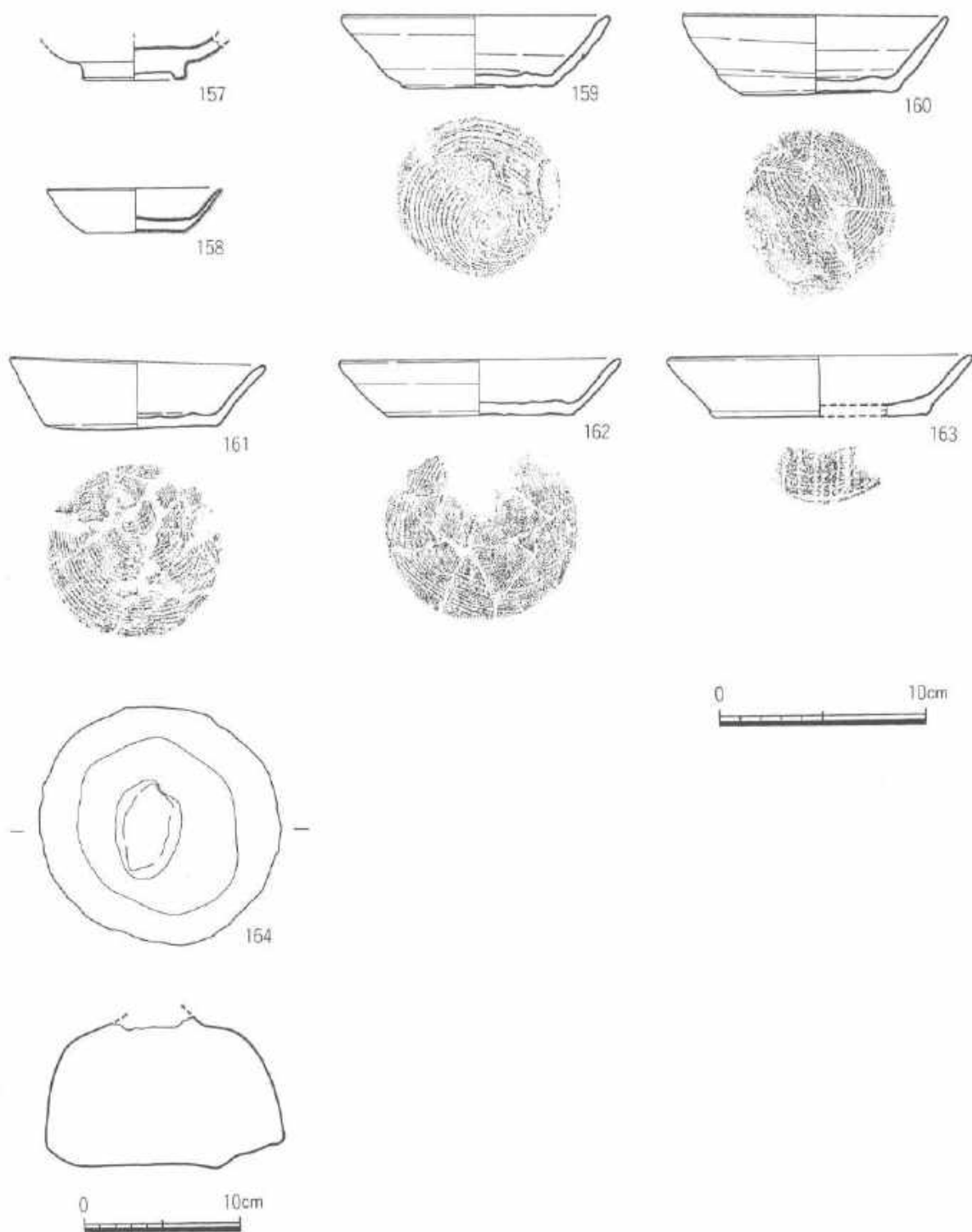
第74図 E-SK2遺構実測図 (1/20)

小結

5号墳の時期について

5号墳は、墳形及び墳丘規模が削平のため確認できておらず、さらに出土遺物も皆無であったため、時期の決定が困難であるが、幸い主体部は完存していた。主体部は、長大な側版で、小口板を挟む木棺墓で、棺床面には小礫を敷き詰める形態のものである。このような礫床を有す組合式木棺は、福岡県下では宗像地域に分布が密であり時期も4世紀末～5世紀前半代に限ら

れており、5号墳の時期も4世紀末～5世紀前半として問題はない。



第75図 E区集石墓出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第76図 E区集石墓出土銭拓影 (1/1)

第3章 まとめ

1. 古墳築造時期について

徳重本村遺跡では、7基の古墳と2基の周溝墓が確認されている。これらの遺構の築造年代を明らかにしその築造順序の決定を行ないたい。各遺構の時期については、各章で述べたため詳細は省くが、1・2号墳と方形周溝墓・円形周溝墓が前期初頭に、3・5号墳が前期末から中期初頭に、6号墳が中期、4・7号墳が後期に位置づけられる。1号墳出土小形丸底壺と2号墳および方形周溝墓・円形周溝墓出土の甕・二重口縁壺は、何れも布留Ⅰ式古段階（柳田Ⅱ-a期）に属するものであるが、各遺構出土土器には若干の時期差が見られる。1号墳出土小型丸底壺は、口縁部と胴部の比率がほぼ1対1となり口縁部の長大化が進行しておりやや新しい傾向を示す。2号墳出土二重口縁壺は凸状の平底底部や口縁部に円形浮文を有しており古相の特徴を示すが、底部径が比較的大きいため大幅な時間差をつけることは困難である。方形周溝墓出土甕や円形周溝墓出土壺も2号墳の土器と比して時期差はなく、ほぼ同時期といえる。したがって、1号墳は、2号墳・方形周溝墓・円形周溝墓に後出し、かつその時期差は小さいものと考えられる。次に、2号墳と方形周溝墓・円形周溝墓の関係であるが、出土遺物には時期差は見受けられない。また、2号墳と方形周溝墓には切り合い関係が無く、新旧関係は明らかにし得ない。しかしながら、方形周溝墓の周溝が2号墳の周溝に近接しつつも切り合わないことから意図的に遺構を避けていたことがうかがえ、2号墳が丘陵頂部平坦面中央を占有することを考慮するとほぼ同時期に両遺構の築造がなされたか、2号墳がやや先行して築かれたと考えられる。円形周溝墓は、周溝が2号墳の周溝を切っており、2号墳に後出するものである。方形周溝墓と円形周溝墓の先後関係は不明であるが、ほぼ同時期と見てよいと思われる。したがって、前期初頭における古墳の変遷は、2号墳→方形周溝墓・円形周溝墓→1号墳の順となる。次に築かれるのは、3・5号墳であるが、両古墳とも築造時期を示す遺物に乏しく、明確な時期を決定し難い。3号墳は、割竹形木棺の直葬を主体部としていることから、5世紀の前半を降ることはないと思われる。さらに、主体部出土滑石（緑泥石）製勾玉に石材・形態が類似するものが、5世紀代の古墳から出土する¹ことから3号墳は、4世紀末から5世紀の初頭に

位置付けられる。5号墳は、礫床を有する組合せ式木棺である。この種の棺の床面に礫を敷く埋葬法は、北部九州では宗像地域に集中して分布し、時期も4世紀末～5世紀中頃までと限定されるものである。礫床主体部に関しては、後述するが、5号墳の築造時期もこれらの例に漏れるものではなく、5世紀の前半段階であろう。したがって、根拠に乏しいが3号墳→5号墳との築造順が想定される。次に築造されるのは陶邑編年のTK216～208の坏蓋・脚付短頸壺が出土した7号墳で、さらにMT15期の坏身を伴う6号墳へと続く。4号墳は、遺物が皆無であるために築造時期を決定できないが、小型単室の横穴式石室であることから6号墳より先行する事は考え難く、6号墳に後出するものとした。したがって、全体の築造順は、2号墳→方形周溝墓・円形周溝墓→1号墳→3号墳→5号墳→7号墳→6号墳→4号墳となり、4世紀代に空白期間を持つもののⁱⁱ、徳重本村遺跡の古墳群は布留Ⅰ式古段階から6世紀中頃まで続く古墳群であるといえる。

2. 古墳3号墳主体部出土の勾玉について

3号墳主体部出土の勾玉について、石材の分析を福岡教育大学環境教育講座教授上野禎一氏に依頼した。分析は、勾玉検出時に生じた小片を資料に、X線粉末回析装置を用いて行い、勾玉の石材はクライノクロア（clinochlore）であるとの結果を得た。クライノクロア「 $(\text{Mg}, \text{Al}, \text{Fe})_{12}(\text{Si}, \text{Al})_8\text{O}_{20}(\text{OH})_{16}$ 」とは、粘土鉱物の緑泥石の1種で、主に雲母・角閃石・輝石など、Fe、Mgに富む有色鉱物が熱水変質作用（緑泥石化作用）により生成される鉱物である。

今回分析した資料は、何れも勾玉検出・取り上げ時に生じた粉末・小片を用いているため、出土勾玉44個体中2個体分しか分析を行なえていないが、他の勾玉も肉眼観察による限りでは、同一石材を使用していると考えられる。石材は乳白色を基調とし、淡い緑～青色が混入するので、表面は風化が激しく光沢は見受けられないものの、一見滑石を思わせる質感を持つ。石材の原産地に関しては、不明ながら緑泥石が緑泥片岩の主成分を成すことを考慮すれば、緑泥片岩を産すいずれかの地域に原産地を求めることができるであろう。資料とした2個体の勾玉の分析結果は、以下の通りである。

試料1.徳重本村SO-3-77

鉱物組合せ-clinochlore（クライノクロア）

試料2.徳重本村SO-3-11

鉱物組合せ-clinochlore（クライノクロア）+quartz（石英）

試料2から検出されている石英は、全体に占める割合が5%程度と少量で、不純物と考えられる。以上の結果から、徳重本村3号墳出土の勾玉は、緑泥石製勾玉であることが判明した。こ

の種の小型勾玉は、5世紀の初頭に多く知られているが、その多くは滑石製勾玉として報告されている。本資料も分析を行わず肉眼観察のみによって石材を決定していたなら滑石製勾玉として報告が行なわれていた可能性が高い。このような観点から、滑石製品として報告されている資料ⁱⁱⁱに関して再考の余地が考えられ、あわせて原産地を求める作業が必要になるであろう。

3. 釣川中流域における前方後円墳の系譜について

釣川中流域における前方後円墳は、近年の調査によって数例の新知見が得られ、前方後円墳の編年観も変容を余儀なくされている。特に徳重本村2号墳の発見は、当地域における古墳時代前期の前方後円墳系譜を研究する上で極めて重要な位置を占めると思われる。そのため、ここで今一度釣川中流域における前方後円墳の系譜について述べておきたい。

釣川中流域を含め宗像地域における前方後円墳系譜に関する研究は、柳沢一男^{iv}、花田勝広・池ノ上宏^vらによって触れられている。それによると、前期前方後円墳の出現は、東郷高塚古墳(64m集成4期)を以って当てており、それ以前の首長墳系譜は、遠賀町島津丸山古墳(56.5m集成2期)に求められていた。このような中で、近年釣川中流域では数基の前方後円墳が新たに発見・調査され、前方後円墳系譜の認識が変化しつつある。新たに発見された前方後円墳の概要は以下の通りである。

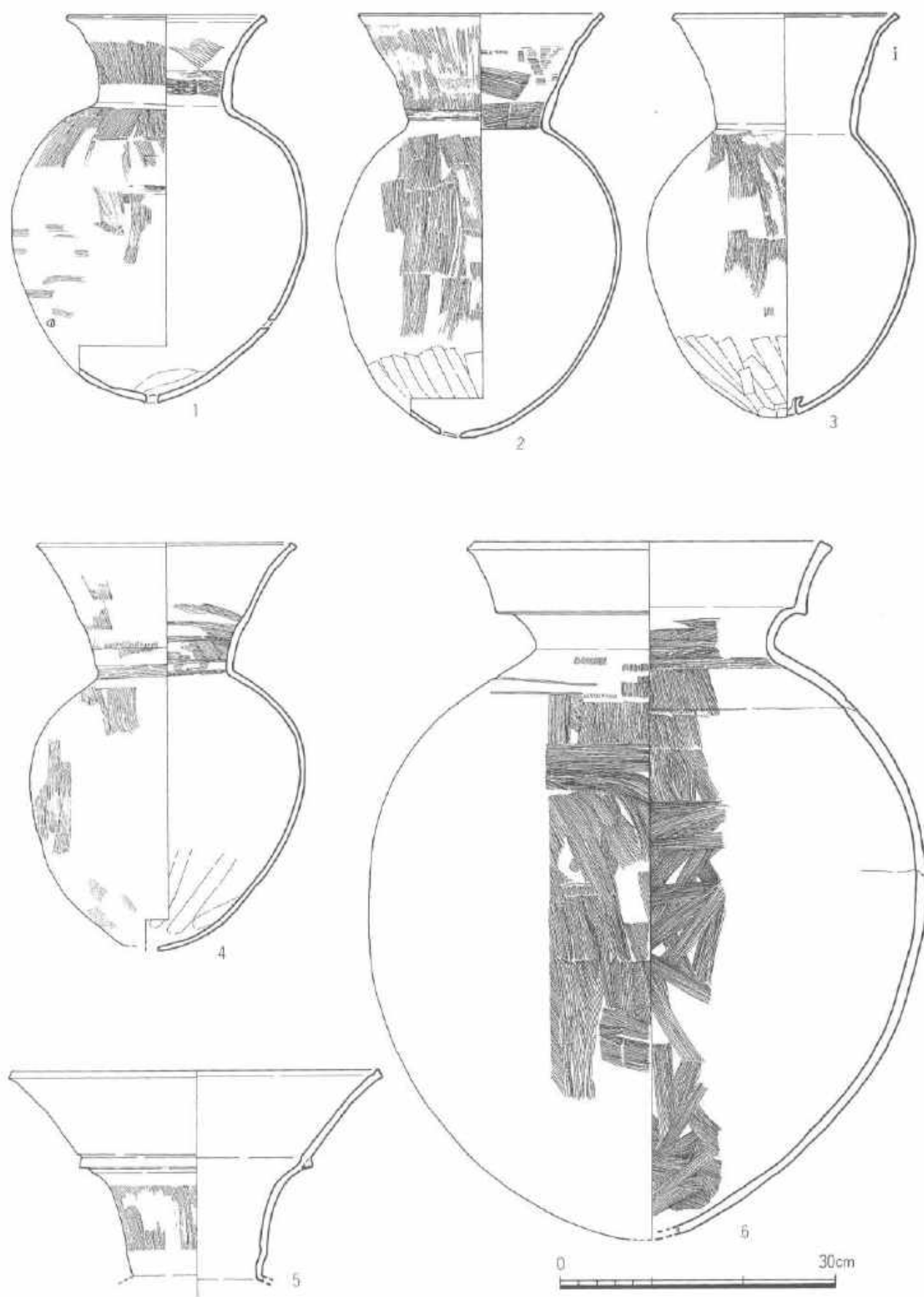
- 1 田久瓜ヶ坂1号墳 全長：30.7m 主体部：後円部に4基(粘土槨2・円筒棺・土器棺)
時期：3～4期 調査年度：1997年 文献：岡崇1999 田久瓜ヶ坂 宗像市教育委員会
- 2 徳重本村2号墳 全長：18.7m 主体部：後円部に1基(木蓋土壙墓)
時期：1期 調査年度：1999年 文献：本書報告
- 3 河東山崎古墳 全長：約30m 主体部：未調査 時期：3～4期 調査年度：未調査
- 4 田久貴船前1号墳(仮称) 全長：約50～60m 主体部：未調査 時期：3～5期?
調査年度：未調査
- 5 田久貴船前2号墳(仮称) 全長：約30m 主体部：未調査 時期：5～6期前後?
調査年度：未調査

これら5基の前方後円墳のうち、釣川中流域右岸地域に河東山崎古墳が、その他は左岸地域に分布している。田久瓜ヶ坂1号墳・徳重本村2号墳についての詳細は報告書が刊行されているためそれに譲るが、他の3古墳は、測量調査も行われておらず曖昧な点が多いので、現段階で判明していることを簡潔に述べる。河東山崎古墳は、釣川中流域右岸の丘陵頂部に立地し、盛土が薄く墳形が田久瓜ヶ坂1号墳に類似する。埴輪や葺石等は確認されていないが、墳形から田久瓜ヶ坂1号墳を前後する時期の築造と考えられる。田久貴船前古墳群は、釣川中流域左岸地域の川に向かい突出する丘陵上に位置する古墳群で、前方後円墳2基・円墳10基前後で構成される古墳群である。1号前方後円墳(50～60m)は、丘陵頂部に位置し、後円部が高く前方部が低く幅が狭いもので、後円部高は6m前後である。周溝は確認されていないが、前方部前面には、近接する円墳(方墳か?)との間に溝が確認されており、さらに墳丘裾周辺が平坦面

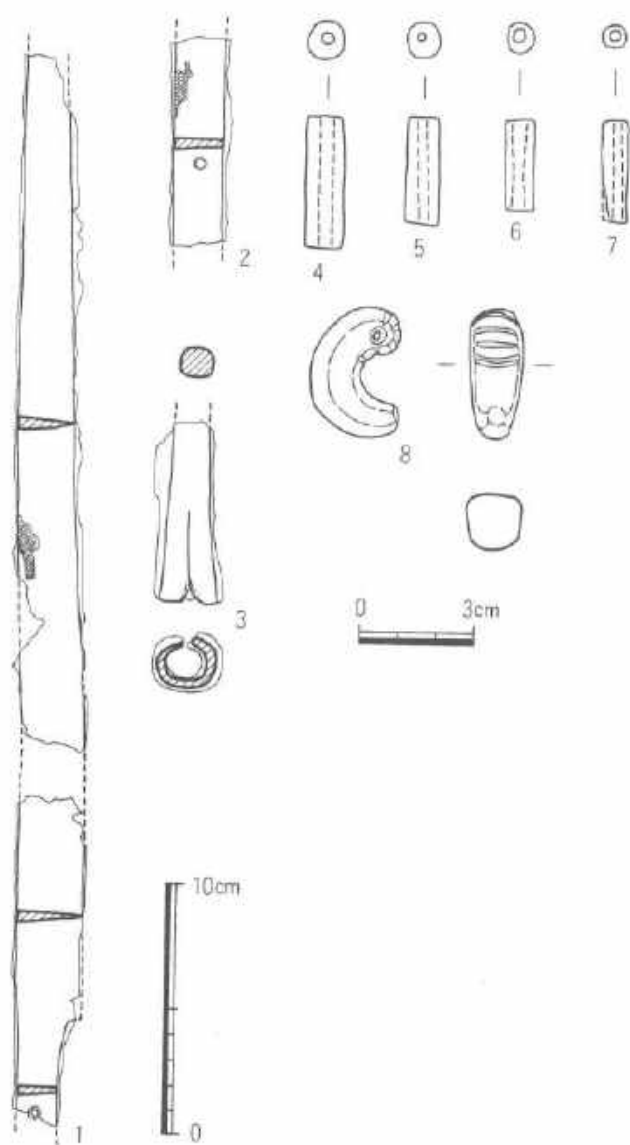
になっており周溝がめぐる可能性がある。また、後円部に隣接して周溝を有す小円墳が2基所在している。葺石・埴輪等は確認していない。時期は、不明であるが墳丘の形式から東郷高塚古墳に前後する時期（3～5期）が妥当と思われる。2号前方後円墳（30m）は、植林による削平で、墳丘の西半を欠損する。後円部と前方部の高低差は、1号墳に比すと差は小さく前方部が高まっている。葺石・埴輪等は確認されていない。時期は、不明であるが1号墳よりは後出すると思われ5～6期前後としたい。

この5基の前方後円墳を加え、釣川中流域における前方後円墳系譜を示すと、集成1～2期の徳重本村2号墳から3期の田久瓜ヶ坂1号墳（河東山崎古墳）、4期の東郷高塚（田久貴船前1号前方後円墳？）、5～6期前後と考えられる田久貴船前2号前方後円墳、9期の城ヶ谷3号・須恵クヒノ浦・相原E-1号・スベットウ・久原Ⅱ-3号、10期の徳重高田6号へという流れを追うことができる。今回の5基の前方後円墳によって、空白とされていた1～3期を埋める古墳が確認され、さらに4期5期にも新たな前方後円墳が加わったことになる。

釣川中流域の前方後円墳系譜を考える点で問題であったのは、東郷高塚以前と以後の空白期間であり、東郷高塚以前は、遠賀町の島津丸山古墳（1～2期）に、以後は津屋崎町新原奴山古墳群へという系譜が指摘されていた。しかしながら、島津丸山古墳と釣川中流域との間には四塚連山がそびえ地形的に隔絶している。したがって直接的に東郷高塚へと系譜を繋げるにはやや疑問が残っていた。徳重本村2号墳・田久瓜ヶ坂1号墳・河東山崎古墳という1～3期の小型～中型前方後円墳の発見は、東郷高塚という64mの前方後円墳を作りうる集団が他地域からの系譜によるものではなく、釣川中流域に前方後円墳を作り得る集団が古墳時代前期初頭に存在していたことを示し、やがてその集団は、徐々に集約され当地域最大の前期古墳である東郷高塚^{vi}を中心とする集団へと成長していったと考えられる。したがって、釣川中流域における古墳時代前期の様相は、東郷高塚の出現を大きな画期とし、高塚以前は、小規模前方後円墳が小平野単位の在地首長墳的な様相をもって築かれ、高塚の出現をもって釣川中流域は大きなまとまりとして結合していったといえよう。また、当地域の前期古墳、特に前方後円墳のあり方を見ると、時期を下る毎に、釣川下流域に規模を拡大しながら移動している様子が伺えるが、中期以降に沿岸部に築かれる前方後円墳群へとつながるかどうかは、田久貴船前古墳群の時期問題を含めてなお検討を要する課題である。



第77図 東郷高塚古墳出土土器実測図 (1/6)



第78図 東郷高塚古墳出土鉄器・玉類実測図 (1/2・1/3)

宗像地域では、神湊井牟田古墳群の15号墳（5C前半）第1主体竪穴式石槨内から類似する勾玉とガラス玉が検出されている。

白石康弘 1995 神湊井牟田古墳群Ⅲ 玄海町文化財調査報告書第3集 玄海町教育委員会

ii 調査対象外の同一丘陵上に多数の古墳が確認されているため、今後空白期間がうめられる可能性がある。

iii 参考資料として、粕屋郡須恵町若杉山採集の滑石と思われる石材を分析したところ、その鉱物組合せは、クライノクロア+角閃石で、角閃岩が風化してクライノクロアが生じているとの鑑定結果を得た。しかしながら、産地の同定には至らなかった。この結果、若杉山は石材原産地の有力な候補の1つであるといえる。

iv 柳沢一男 1992 前方後円墳集成 九州編 第1章筑前 山川出版社

v 池ノ上宏・花田勝広 1999 筑紫・宮地嶺古墳の再検討 考古学雑誌第85巻 第1号

vi あるいは、田久貴船前1号前方後円墳が、東郷高塚に先行する可能性がある。

表1.徳重本村遺跡古墳一覧表

単位(cm)

古墳番号	区	墳形	墳丘規模 (全長×墳高)	主体部	主軸方向	墓壇規模 (長軸×短軸×深さ)	埋葬坑・玄室 (長軸×短軸×深さ)	木棺・土槨 規模(長軸×短軸)	時期	備考
1号墳	C区	陸橋付方墳	15×12.5×2.2	割竹形木棺	N-63° -W	3.39×1.56 ×0.32	-	2.82×0.5	布留式古相	
2号墳	B区	前方後円墳	18.8×2.7	木蓋土墳墓	N-44° -W	2.5×2.2 ×0.5	1.38×0.39 ×0.49	1.35×0.41	布留式古相	
3号墳	D区	円墳	13×2.8	割竹形木棺?	N-85° -E	4.60×2	-	3.65×(0.67 ~0.44)	4世紀末~ 5世紀初頭	
4号墳	D区	不明	不明	横穴式石室	不明	2.45×(1.5 +α)× 0.38	1.13×(0.6 +α)×0.38	-	6世紀	
5号墳	E区	不明	不明	組合式木棺	N-56° -W	4.97×2.53 ×0.9	-	4.36×0.7	4世紀末~ 5世紀初頭	碑床
6号墳	B区	円墳?	約10m	竪穴系横口式 石室	N-58° -W	3.27×2.25 ×0.46	1.95×0.87 ×0.46	-	6世紀前半	
7号墳	B区	円墳	約10m	第1主体部木 棺墓?	N-68° -W	(1.90+α) ×0.88× 0.52	-	(1.82+α) ×0.72	5世紀後半 TK208	
				第2主体部木 棺墓	N-26° -W	2.23×1.16 ×0.62	-	1.5×0.52	5世紀後半 TK208	

表2.徳重本村遺跡出土鉄器観察表

()は残存長 単位(cm)

挿図番号	種類	器種	出土遺構	出土地点	法量	備考
17図-1	鉄器	有袋鉄斧	SO2	後円部南西側旧表土直下	長9.6幅(刃部)5.0(基部)4.2 厚さ1.7~0.75重さ130.11g	
17図-2	鉄器	有袋鉄斧	SO2	後円部南西側旧表土直下	長7.4短軸(刃部)(2.4)基部2.2 厚さ1.2重さ50.46g	
17図-3	鉄器	ヤリガンナ?基部	SO2	盗掘穴内	長18.11幅1.35厚さ0.35重さ12.43g	刃部欠損
36図-1	鉄器	直鍔	SO1	主体部出土鉄器No.2	長13.6幅3.5厚さ0.4重さ35.3g	
36図-2	鉄器	刀子	SO1	棺外副葬品刀子No.1	長(9.85)幅(刃部)1.2(基部)0.95 厚さ0.3重さ9.35g	
36図-3	鉄器	刀子	SO1	棺外副葬品刀子No.3	長(6.4)幅1.2厚さ0.2重さ5.2g	基部欠損
58図	鉄器	刀子	SO3	主体部1区小口粘土内	長(6.25)幅1.0厚さ0.25重さ7.84g	刃部先端欠損・基部欠損
30図	鉄器	鉄鍔	B-SK7		長(刃部)3.8(基部)3.0厚さ(刃部) 0.3(基部)0.2重さ6.9g	基部欠損

表3.徳重本村遺跡C区SK64出土鉄滓観察表

単位(cm)

挿図番号	種類	出土地点	法量
49図-3	梔型滓	No.4	長軸7.4短軸4.7幅1.8重さ134.5g
49図-4	梔型滓	No.1	長軸6.0短軸4.9幅2.8重さ96.3g
49図-5	梔型滓片	No.3	長軸6.1短軸3.9幅3.9重さ103.1g
49図-6	梔型滓?	No.2	長軸6.9短軸5.4幅3.3重さ158.4g
49図-7		No.5	長軸5.1短軸4.45幅2.7重さ96.4g
49図-8		No.7	長軸4.3短軸3.7幅2.0重さ38.4g
49図-9		No.6	長軸4.6短軸3.7幅2.1重さ46.7g
49図-10		No.8	長軸4.1短軸2.95幅2.05重さ23.05g
49図-11		No.9	長軸5.2短軸2.85幅2.3重さ32.6g

表4.徳重本村遺跡A区SP82出土ガラス玉計測表

[単位:長・孔径・厚みはcm,重量はg]

番号	長	孔径	厚み	重量	色調	備考	番号	長	孔径	厚み	重量	色調	備考
1	0.31	0.12	0.21	0.02	淡青		48	0.30	0.10	0.21	0.02	淡青	
2	0.30	0.12	0.18	0.02	淡青		49	0.31	0.15	0.19	0.01	淡青	
3	0.29	0.14	0.19	0.01	淡青		50	0.36	0.13	0.14	0.02	淡青	
4	0.29	0.13	0.24	0.01	淡青		51	0.30	0.13	0.19	0.02	淡青	
5	0.32	0.15	0.20	0.01	淡青		52	0.33	0.13	0.19	0.03	淡青	
6	0.34	0.17	0.16	0.01	淡青		53	0.37	0.10	0.18	0.02	淡青	
7	0.34	0.17	0.31	0.04	淡青		54	0.33	0.12	0.19	0.03	淡青	
8	0.29	0.17	0.18	0.01	淡青		55	0.32	0.07	0.23	0.03	淡青	
9	0.28	0.14	0.26	0.02	淡青		56	0.31	0.13	0.14	0.02	淡青	
10	0.32	0.14	0.17	0.01	淡青		57	0.29	0.10	0.24	0.03	淡青	
11	0.26	0.12	0.16	—	淡青		58	0.33	0.12	0.17	0.02	淡青	
12	0.32	0.12	0.20	0.02	淡青		59	0.33	0.15	0.23	0.03	淡青	
13	0.29	0.12	0.18	0.01	淡青		60	0.30	0.07	0.23	0.02	淡青	
14	0.30	0.10	0.20	0.01	淡青		61	0.30	0.13	0.26	0.03	淡青	
15	0.33	0.12	0.18	0.01	淡青		62	0.34	0.14	0.24	0.03	淡青	
16	0.30	0.18	0.20	0.02	淡青		63	0.30	0.10	0.18	0.03	淡青	
17	0.34	0.17	0.20	0.02	淡青		64	0.32	0.13	0.22	0.03	淡青	
18	0.34	0.14	0.23	0.03	淡青		65	0.36	0.11	0.21	0.03	淡青	
19	0.28	0.14	0.18	0.01	淡青		66	0.33	0.12	0.21	0.03	淡青	
20	0.27	0.08	0.26	0.03	淡青		67	0.33	0.10	0.23	0.03	淡青	
21	0.29	0.08	0.32	0.03	淡青		68	0.31	0.10	0.20	0.02	淡青	
22	0.24	0.10	0.15	0.01	淡青		69	0.32	0.15	0.25	0.03	淡青	
23	0.34	0.10	0.18	0.03	淡青		70	0.34	0.05	0.27	0.03	淡青	
24	0.27	0.15	0.14	0.02	淡青		71	0.30	0.07	0.25	0.03	淡青	
25	0.30	0.12	0.14	0.01	淡青		72	0.31	0.15	0.22	0.02	淡青	
26	0.30	0.10	0.17	0.02	淡青		73	0.32	0.10	0.25	0.03	淡青	
27	0.30	0.10	0.32	0.03	淡青		74	0.39	0.10	0.30	0.05	淡青	
28	0.28	0.10	0.17	0.02	淡青		75	0.32	0.14	0.23	0.03	淡青	
29	0.31	0.10	0.18	0.02	淡青		76	0.34	0.12	0.21	0.02	淡青	
30	0.34	0.09	0.20	0.02	淡青		77	0.29	0.10	0.21	0.02	淡青	
31	0.35	0.12	0.28	0.02	淡青		78	0.30	0.12	0.20	0.01	淡青	
32	0.32	0.09	0.24	0.03	淡青		79	0.26	0.09	0.22	0.01	淡青	
33	0.36	0.15	0.26	0.05	淡青		80	0.34	0.14	0.20	0.02	淡青	
34	0.30	0.12	0.25	0.03	淡青		81	0.33	0.10	0.45	0.07	淡青	
35	0.32	0.10	0.17	0.02	淡青		82	0.29	0.11	0.15	0.02	淡青	
36	0.28	0.08	0.24	0.01	淡青		83	0.30	0.10	0.16	0.02	淡青	
37	0.33	0.10	0.20	0.03	淡青		84	0.33	0.10	0.30	0.05	淡青	
38	0.27	0.10	0.18	0.01	淡青		85	0.34	0.10	0.29	0.05	淡青	
39	0.35	0.10	0.23	0.03	淡青		86	0.37	0.12	0.24	0.05	淡青	
40	0.28	0.10	0.14	0.01	淡青		87	0.28	0.10	0.09	0.01	淡青	
41	0.28	0.08	0.20	0.02	淡青		88	0.30	0.13	0.15	0.01	淡青	
42	0.28	0.10	0.11	0.02	淡青		89	0.28	0.10	0.15	0.01	淡青	
43	0.33	0.14	0.18	0.02	淡青		90	0.41	0.15	0.31	0.06	濃紺	
44	0.34	0.15	0.19	0.03	淡青		91	0.35	0.18	0.15	0.01	濃紺	
45	0.35	0.17	0.22	0.03	淡青		92	0.40	0.14	0.15	0.02	濃紺	
46	0.31	0.09	0.15	0.02	淡青		93	0.29	—	0.16	—	淡緑	破損
47	0.30	0.09	0.16	0.01	淡青								

表5. 徳重本村3号墳出土玉類計測表

(単位: 長・孔径・厚みはcm, 重量はg)

遺物番号	取上番号	種類	長	孔径	厚み	重量	色調	備考	遺物番号	取上番号	種類	長	孔径	厚み	重量	色調	備考
1	7	勾玉	1.00	0.15	0.40	0.32	緑灰		47	22	ガラス玉	0.37	0.14	0.27	0.06	淡青	
2	8	勾玉	0.95	0.16	0.20	0.21	緑灰		48	23	ガラス玉	0.45	0.15	0.42	0.11	淡緑	
3	9	勾玉	1.00	0.16	0.40	0.32	緑灰		49	24	ガラス玉	0.47	0.17	0.27	0.10	淡青	
4	10	勾玉	0.95	0.15	0.30	0.22	乳白		50	25	ガラス玉	0.48	0.20	0.40	0.13	淡青	
5	12	勾玉	0.92	0.15	0.35	0.20	乳白		51	26	ガラス玉	0.50	0.17	0.40	0.14	淡緑	
6	13	勾玉	0.98	0.17	0.31	0.26	乳白		52	27	ガラス玉	0.36	0.10	0.39	0.07	淡青	
7	44	勾玉	0.97	0.17	0.32	0.23	緑灰		53	28	ガラス玉	0.42	0.11	0.30	0.07	淡青	
8	45	勾玉	0.90	0.14	0.29	0.16	乳白		54	29	ガラス玉	0.28	0.10	0.15	-	淡緑	
9	46	勾玉	0.90	0.14	0.28	0.19	緑灰		55	31	ガラス玉	0.38	0.08	0.33	0.08	淡青	
10	48	勾玉	0.90	0.14	0.31	0.18	緑灰		56	32	ガラス玉	0.38	0.15	0.38	0.07	淡青	
11	49	勾玉	0.99	0.14	0.30	0.20	緑灰		57	33	ガラス玉	0.40	0.12	0.40	0.08	淡青	
12	52	勾玉	1.00	0.13	0.35	0.27	乳白	一部欠損	58	34	ガラス玉	0.39	0.18	0.29	0.05	淡青	
13	53	勾玉	0.91	0.16	0.30	0.22	緑灰		59	35	ガラス玉	0.51	0.16	0.40	0.15	淡緑	
14	54	勾玉	0.89	0.15	0.29	0.18	緑灰		60	36	ガラス玉	0.47	0.17	0.38	0.11	淡青	
15	55	勾玉	1.00	0.13	0.40	0.34	緑灰		61	37	ガラス玉	0.50	0.18	0.37	0.14	淡青	
16	56	勾玉	0.98	0.16	0.30	0.24	緑灰		62	38	ガラス玉	0.45	0.18	0.38	0.09	淡青	
17	57	勾玉	0.85	0.16	0.32	0.19	乳白		63	39	ガラス玉	0.50	0.15	0.40	0.13	淡青	
18	58	勾玉	0.94	0.15	0.30	0.23	緑灰		64	40	ガラス玉	0.45	0.12	0.50	0.15	淡青	
19	60	勾玉	0.90	0.17	0.32	0.19	乳白		65	41	ガラス玉	0.39	0.12	0.30	0.05	淡青	
20	61	勾玉	0.92	0.16	0.30	0.19	乳白		66	42	ガラス玉	0.45	0.12	0.28	0.07	淡青	
21	62	勾玉	1.01	0.15	0.37	0.29	乳白		67	81	ガラス玉	0.38	0.15	0.20	0.02	淡緑	ふるいにより出土
22	63	勾玉	0.97	0.15	0.23	0.17	乳白	劣化顕著	68	82	ガラス玉	0.45	0.11	0.25	0.07	淡青	ふるいにより出土
23	65	勾玉	0.90	0.15	0.33	0.22	緑灰		69	83	ガラス玉	0.38	0.11	0.25	0.03	淡青	ふるいにより出土
24	66	勾玉	0.88	0.15	0.31	0.20	緑灰		70	84	ガラス玉	0.48	0.16	0.45	0.13	淡青	ふるいにより出土
25	67	勾玉	1.01	0.14	0.30	0.20	乳白		71	85	ガラス玉	0.32	0.14	0.31	0.05	淡緑	ふるいにより出土
26	68	勾玉	1.01	0.13	0.35	0.28	乳白		72	86	ガラス玉	0.59	0.22	0.40	0.17	淡青	ふるいにより出土
27	69	勾玉	1.01	0.16	0.30	0.23	乳白		73	87	ガラス玉	0.41	0.16	0.20	0.05	淡青	ふるいにより出土
28	70	勾玉	0.90	0.13	0.31	0.18	乳白		74	88	ガラス玉	0.36	0.15	0.22	0.04	淡青	ふるいにより出土
29	71	勾玉	1.20	0.13	0.40	0.34	乳白		75	89	ガラス玉	0.50	0.18	0.33	0.11	淡緑	ふるいにより出土
30	72	勾玉	0.90	0.14	0.30	0.18	乳白		76	90	ガラス玉	0.37	0.11	0.18	0.05	淡緑	ふるいにより出土
31	73	勾玉	0.98	0.13	0.31	0.24	乳白		77	91	ガラス玉	0.38	0.12	0.15	0.03	淡緑	ふるいにより出土
32	74	勾玉	1.00	0.14	0.38	0.25	乳白		78	1	ガラス玉	0.47	0.20	0.36	0.11	淡青	
33	75	勾玉	0.99	0.18	0.31	0.26	緑灰		79	2	ガラス玉	0.48	0.18	0.49	0.16	淡青	
34	76	勾玉	1.00	0.13	0.36	0.28	乳白	一部欠損	80	3	ガラス玉	0.40	0.11	0.43	0.11	淡青	
35	77	勾玉	0.91	0.12	0.32	0.18	乳白		81	4	ガラス玉	0.48	0.16	0.30	0.09	淡青	
36	79	勾玉	1.00	0.14	0.32	0.26	乳白	ふるいにより出土	82	5	ガラス玉	0.35	0.18	0.20	0.03	淡青	
37	80	勾玉	1.00	0.14	0.40	0.30	乳白	ふるいにより出土		11	勾玉	0.98	-	0.30	0.21	乳白	破損、分析サンプル
38	6	ガラス玉	0.40	0.20	0.45	0.11	淡青			47	勾玉	0.98	0.15	0.30	0.19	緑灰	
39	14	ガラス玉	0.39	0.10	0.20	0.03	淡青			50	勾玉	(0.95)	-	0.31	0.24	乳白	欠損
40	15	ガラス玉	0.39	0.12	0.30	0.07	淡青			51	勾玉	0.94	-	0.35	0.23	乳白	欠損
41	16	ガラス玉	0.38	0.10	0.42	0.07	淡青			59	勾玉	0.90	0.15	0.30	0.18	緑灰	
42	17	ガラス玉	0.49	0.20	0.50	0.17	淡青			64	勾玉	(0.88)	-	0.38	0.21	乳白	欠損
43	18	ガラス玉	0.59	0.20	0.40	0.17	淡緑			78	勾玉	(0.82)	-	0.32	0.16	乳白	破損、分析サンプル
44	19	ガラス玉	0.60	0.21	0.42	0.17	淡緑			30	ガラス玉	0.30	0.10	0.36	0.05	淡緑	
45	20	ガラス玉	0.40	0.14	0.49	0.10	淡青			43	ガラス玉	0.47	0.17	0.40	0.11	淡青	
46	21	ガラス玉	0.42	0.18	0.43	0.11	淡青			92	ガラス玉	-	-	-	-	淡青	ふるいにより出土、破損

()内数値は残存長

表6. 徳重本村遺跡遺物観察表

〔〕数字は残存・復元値 単位cm

図版 番号	遺物 番号	登録 番号	種類	器種	表土 区	遺構 番号	法量①口径②器高 ③底径④最大径	形態技法の特徴	a 焼成 b 色調	備考
第5図	1	0098	土師器	坏 甕部	A	SP31	②(1.7)③(9.0)	内面ナデ・不定方向ナデ、外面ナデ・底面糸切り	a 良 b 橙白色	
第5図	2	0101	土師器	坏 甕部	A	SP55	②(1.35)③(8.2)	内面ナデ・底面のため調整不明、外面ナデ・底面糸切り	a 良 b 橙白色	
第5図	3	0100	土師器	小皿	A	SP32	①(8.2)②(1.3)③(6.0)	内面ナデ・不定方向ナデ、外面ナデ・底面ヘラ割リ	a 良 b 橙白色	
第5図	4	0099	土師器	碗	A	SP32	①(15.2)②(4.75)③(8.0)	底面のため調整不明	a 良 b 灰～暗灰色	
第5図	5	0106	土師器	鉢	A	SP67	①(23.4)②(7.0)③(25.3)	内外面ともナデ	a 良 b 灰色	
第5図	6	0094	土師器	坏	A	SD61	②(2.3)③(8.2)	内面ナデ、外面ナデ・底面糸切り	a 良 b 橙白色	
第5図	7	0095	土師器	坏	A	SD61	①(10.0)②(3.35)③(8.0)	内面ナデ・不定方向ナデ、外面ナデ・底面糸切り	a 良 b 橙白色	
第5図	8	0096	土師器	甕 甕部	A	SP6	②(1.85)③(高台径5.6)	内外面焼成、貫入あり・高台部削	a 良 b 青灰色、釉調緑灰色斑胎	削り出し高台見込みに砂目跡
第5図	9	0104	土師器	皿	A	SP67	②(1.4)③(12.0)	内面ナデ・不定方向ナデ、外面ナデ・底面糸切り	a 良 b 黄白色	
第5図	10	0097	土師器	小皿	A	SP15	②(1.1)③(7.7)	内外面焼成のため調整不明、底面糸切り	a 良 b 橙白色	
第5図	11	0102	土師器	小皿	A	SP57	①(8.0)②(1.2)③(6.6)	内外面ナデ・底面糸切り	a 良 b 橙白色	
第5図	12	0103	土師器	小皿	A	SP59	②(0.85)	内外面とも底化のため調整不明	a 良 b 橙白色	
第5図	13	0105	土師器	小皿	A	SP67	①(8.4)②(1.1)③(7.6)	内外面ナデ・底面糸切り	a 良 b 黄白色	
第18図	14	0112	土師器	甕 口縁部	B	SO2後門部北西側	②(5.2)	内面ナデ・外面2段の波状文・円形浮文・ナデ	a 良好 b 橙褐色	
第18図	15	0130	土師器	二重口縁甕	B	SK2	①(26.8)②(10.9)	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・波状文	a 良 b 内面にふい・橙色～にふい・黄褐色・外面浅黄褐色～褐色	口縁に波状文
第18図	16	0114	土師器	甕	B	SO2後門部北西側	②(5.1)	内外面とも底化のため調整不明	a やや不良 b 黄褐色	
第18図	17	0113	土師器	二重口縁甕 底面	B	SO2後門部北西側	②(4.1)③(5.8)	内面底化のため調整不明、外面平行文・タタキ・タテハケ・ナデ・またはミガキ	a 良好 b 内面にふい・黄褐色・外面黄褐色	
第18図	18	0111	土師器	甕 甕部	B	SO2後門部北西側 裾部内	②(4.1)③(7.8)	内面ヨコ・ナメ方向のハケ目、外面ヘラミガキ・裾部ハケ目	a やや良 b 黄褐色～黒褐色	
第18図	19	0108	土師器	甕 口縁部	B	SO2後門部南西側	①(12.4)②(7.0)	内面ナデ・ヘラケズリ、外面ヨコハケ・粗いソケ目	a 良 b 黄褐色	
第18図	20	0115	土師器	甕 口縁部	B	SO2後門部南西側 裾	①(17.0)②(4.1)	内面底化のため調整不明、外面ナデ	a 良好 b 橙褐色	口縁は外反する
第18図	21	0110	土師器	甕 口縁部	B	SO2後門部南西側 裾	①(23.0)②(7.7)	内面ヨコハケ・ヘラケズリ、外面ナデ・タテハケ	a 良 b 黄褐色	
第18図	22	0109	土師器	甕 甕部	B	SO2後門部南西側	②(9.7)	内面ナデ・外面ヨコハケ	a 良 b 黄褐色	
第18図	23	0121	土師器	甕 口縁部	B	SD10	①(17.0)②(5.9)	内面ナデ・ヘラケズリ、外面ナデ・平行タタキ	a やや不良 b 橙褐色	
第18図	24	0120	土師器	甕 口縁部	B	SD9	①(8.8)②(5.6)	内面ミガキ・後ナデ・ナデ、外面ナデ	a 良好 b 橙褐色	
第21図	25	0125	須恵器	坏 甕	B	SD24	①(13.7)②(4.5)	内面回転ナデ・不定方向ナデ・外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	a 良好 b 灰色	内面にヘラ記あり
第21図	26	0122	須恵器	坏 甕	B	SD24	①(12.1)②(5.7)③(14.8)	内面回転ナデ・不定方向ナデ・外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	a 良 b 灰色	
第21図	27	0127	須恵器	坏 甕	B	SD24西側海理土上層	①(12.6)②(4.9)③(15.4)	内面回転ナデ・不定方向ナデ・外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	a 良 b 赤褐色	
第21図	28	0143	須恵器	坏 甕	B	SK22	①(2.4)②(4.2)③(13.9)	内面ナデ・指ナデ・外面ナデ・ヘラケズリ	a やや不良 b 黄褐色	
第21図	29	0144	須恵器	坏 甕	B	SK22	①(13.0)②(13.9)③(15.2)	内面ナデ・外面ナデ・ヘラケズリ	a 良 b 緑灰色	
第21図	30	0126	土師器	甕 口縁部	B	SD24西側海理土中層	①(14.6)②(4.2)	内面ヨコハケ・ヘラケズリ、外面底化のため調整不明	a 良 b 橙褐色	
第21図	31	0145	土師器	甕	B	SK22	①(17.8)②(8.8)	内面ヨコハケ・後ナデ・ヘラケズリ、外面ナデ・ハケ目	a 良 b 黄褐色～暗褐色	
第21図	32	0147	土師器	甕	B	SK22	①(16.0)②(7.0)	内外面ともナデ	a やや良 b 暗黄～暗褐色	
第21図	33	0146	土師器	甕	B	SK22	①(16.0)②(4.4)	内面ナデ、外面ナデ	a やや良 b 黄褐色	
第21図	34	0149	土師器	甕 口縁部	B	SK22	②(15.0)	内面ナデ・ヘラケズリ、外面ヨコナデ・タテハケ	a やや良 b 黄褐色	
第21図	35	0150	土師器	甕?	B	SK22	②(23.2)	内面ナデ・ヘラケズリ、外面ナデ・タテハケ	a やや良 b 黄～赤褐色	
第21図	36	0124	土師器	甕 甕部	B	SD24	②(2.7)③(9.0)	内面ヘラケズリ、外面ナデ	a 良 b 橙褐色	底面に黄斑痕

図版番号	器物番号	登録番号	種類	器種	調査区	遺構番号	法量①口径②底径③最大径	形態技法の特徴	a 黄褐色 b 色調	備考
第21図	37	0148	土師器	注口付甕	B	SK22	①133.0②③12.0	内面ナデヘラケズリ後ナデ、外面ナデタテハケ	a 黄褐色 b 黄褐色	注口あり
第21図	38	0123	土師器	高杯	B	SK24	①115.0②13.0脚底径13.6	内面ナデ・脚部内面ヘラケズリ外面ナデ・指頭圧痕	a 黄褐色 b 黄褐色	口縁付近黒斑あり
第24図	39	0119	須恵器	脚付短頸甕	B	SO7周溝	①9.6②16.4③19.1脚底径14.5	内面ナデ外面3条の波状文・回転ヘラケズリ	a 黄褐色 b 黄褐色	脚部4方向スカシ
第24図	40	0128	須恵器	片蓋	B	SO7周溝	①12.3②4.6	内面回転ナデ・不定方向ナデ外面回転ナデ・回転ヘラケズリ・口縁部カキメ	a 黄褐色 b 黄褐色	
第24図	41	0129	土師器	甕	B	SO7周溝	②122.3③④7.0	内面ケズリ・ナデ、外面タテハケ	a 黄褐色 b 黄褐色	
第32図	42	0131	青磁(龍泉窯系)	甕	B	SK5	①16.0②6.8高台径5.3	内面龍釉・菊花文、外面龍釉・高台原胎	a 良好 b 龍潤茶褐色・龍胎青灰色	
第32図	43	0304	青磁(龍泉窯系)	小碗	B	SK5	①12.8②5.25高台径4.2	内面龍釉・花文、外面龍釉・殺付肉釉カキトリ	a 良好 b 龍潤茶褐色・龍胎青灰色	
第32図	44	0132	青磁(龍泉窯系)	小皿	B	SK5	①10.3②2.5③2.8	内面龍釉・見込みに花文、外面龍釉・底面釉カキトリ	a 良好 b 龍潤茶褐色・龍胎青灰色	
第32図	45	0134	青磁(平安窯系)	小皿	B	SK5	①10.4②2.2③4.6	内面龍釉・外面龍釉・底面釉カキトリ	a 良好 b 龍潤茶褐色・龍胎青灰色	
第32図	46	0133	土師器	鉢	B	SK5	①132.4②12.7	内面ヨコハケ・ナデ、外面ナデ	a 良好 b 黄褐色	内面底部に炭化物あり
第35図	47	0161	土師器	小型丸底壇	C	SO1主体部上蓋土内	①11.0②5.7	内外面ともナデ	a 良好 b 黄褐色	
第38図	48	0283	弥生土器	甕 口縁部片	C	SU12土層	②(2.0)	内面ナデ・ハケ目、外面ハケ目・口縁部無目	a 良好 b 内面黄褐色外面赤褐色	
第38図	49	0279	弥生土器	甕 口縁部片	C	SU12土層	③(2.9)	内面ナデ・ハケ目、外面ハケ目・口縁部無目	a 良好 b 黄褐色	
第38図	50	0284	弥生土器	甕 口縁部片	C	SU12土層	⑤(3.0)	内面ハケ目、外面ハケ目・口縁部無目	a 良好 b 内外面黄褐色	
第38図	51	0289	弥生土器	甕 口縁部片	C	SU12最下層	②(5.1)	内面ハケ目、外面ハケ目・口縁部無目	a 良好 b 内外面黄褐色	
第38図	52	0286	弥生土器	甕 底部	C	SU12最下層	②(6.3)③(6.3)	内面風化のため調整不明、外面ハケ目	a 良好 b 内面黄褐色外面赤褐色	
第38図	53	0291	弥生土器	甕 底部	C	SU12最下層	②(5.4)③(8.3)	内面ナデ、外面ハケ目	a 良好 b 内面黄褐色外面赤褐色	
第38図	54	0276	弥生土器	甕 底部	C	SU12土層	②(12.0)③(7.9)	内面風化のため調整不明、外面ハケ目	a 良好 b 内面黄褐色外面赤褐色	底面に穿孔あり
第38図	55	0285	弥生土器	甕 口縁部片	C	SU12最下層	②(5.1)	内面ナデ外面風化のため調整不明	a 良好 b 内面赤褐色外面黄褐色	
第38図	56	0287	弥生土器	甕 口縁部片	C	SU12最下層	②(3.9)	内外面とも風化のため調整不明	a 良好 b 内面赤褐色外面黄褐色	
第38図	57	0280	弥生土器	甕 胴部片	C	SU12土層	②(3.2)	内外面とも風化のため調整不明	a 良好 b 内外面黄褐色	無釉羽状文
第38図	58	0290	弥生土器	甕 底部	C	SU12最下層	②(3.3)③11.8	内面風化のため調整不明、外面ハケ目	a 良好 b 内面黄褐色外面赤褐色	
第42図	59	0176	土師器	甕 口縁部	C	SC23周壁溝	①(11.8)②(6.2)	内面ヨコハケ外面ナデ・タテハケ	a 良好 b 内面黄褐色外面黄褐色	
第42図	60	0174-1	土師器	甕 口縁部	C	SC23周壁溝	①14.3②(7.1)	内面ヨコハケ・ナデズリ、外面ヨコナデ・タテハケ	a 良好 b 黄褐色	
第42図	61	0175	土師器	甕 口縁部	C	SC23周壁溝	①(15.4)②(9.1)	内面ヨコナデ・ナデズリ、外面ヨコナデ・タテハケ	a 良好 b 黄褐色	
第42図	62	0173	土師器	甕	C	SC23周壁溝	①10.1②12.0③(12.3)	内面ナデ、外面ナデ・タテハケ	a 良好 b 内面黄褐色外面黄褐色	
第42図	63	0177	土師器	甕 口縁部	C	SC23周壁溝	②(9.6)	内面ヨコハケ、外面ナデ・タテハケ	a 良好 b 内面黄褐色外面黄褐色	
第42図	64	0174-2	土師器	甕 底部	C	SC23周壁溝	②(8.4)	内面ナデ・外面一部ハケ目・風化のため調整不明	a 良好 b 黄褐色	外周底部に黒斑あり
第42図	65	0179	土師器	鉢	C	SC23周壁溝	①(14.2)②(6.0)	内外面とも風化のため調整不明	a 良好 b 黄褐色	
第42図	66	0173	土師器	甕	C	SC23周壁溝	①14.0②5.3	内外面ともミガキ	a 良好 b 黄褐色	
第42図	67	0178	土師器	甕	C	SC23周壁溝	①(12.0)②(4.8)	内外面ともナデ	a 良好 b 黄褐色	
第42図	68	0180	土師器	甕	C	SC23マダ	①13.5②(4.15)	内面ナデ外面ミガキ・風化のため調整不明	a 良好 b 黄褐色	
第42図	69	0171	土師器	甕 把手のみ	C	SC23		指調整	a 良好 b 黄褐色	
第43図	70	0181	須恵器	坏身	C	SC25	①(14.0)②(4.5)		a 良好 b 黄褐色	
第43図	71	0188	須恵器	坏身 片	C	SC27	①(17.8)②(4.7)	内外面とも回転ナデ	a やや良好 b 灰白色	
第43図	72	0187	須恵器	坏蓋 片	C	SC27	③(1.9)	内面回転ナデ外面回転ナデ・ナデズリ	a 良好 b 黄褐色	
第43図	73	0182	土師器	小形丸底甕	C	SC27H面	①8.0②9.2	内面風化のため調整不明、外面風化のため調整不明	a 良好 b 赤色	
第43図	74	0184	土師器	小形丸底甕	C	SC27	①(6.8)②(9.2)	内面ヨコナデ・ナデ、外面ヨコナデ・ハケ目後ナデ	a 良好 b 黄褐色～淡赤褐色	

図版 番号	遺物 番号	登録 番号	種類	器種	調査 区	通稱 番号	数量①口径②高さ ③底径④最大径	形態技法の特徴	a 焼成 b 色調	備考
第43図	75	0185	土師器	高杯	C	SC27	①12.0~12.8② (9.5)	内面ヨコハケ後ナデ・ハケ目後 不定方向ナデ、外面ナデ	a 良 b 黄褐～赤褐色	口縁部に黒底あり
第43図	76	0183	土師器	高杯	C	SC27	①(20.0)②(5.5)	内面ヨコナデ、外面ハケ目後 ヨコナデ	a 良好 b 赤褐色	
第43図	77	0185	土師器	高杯	C	SC27	②(5.0)	内外面とも黒化のため調整不明	a 良 b 赤褐色	
第43図	78	0190	土師器	甕 口縁部	C	SC28	①(18.0)②(4.5)	内外面とも黒化のため調整不明	a やや良 b 内面暗黒褐色 外面赤褐色	
第43図	79	0191	土師器	甕 口縁部	C	SC28	①(16.0)②(6.2)	内面ケズリ後ナデ 外面ヨコハケ後ナデ・ナデ	a やや良 b 内面暗褐色～ 黒褐色外面赤褐色	
第43図	80	0192	土師器	高杯	C	SC30	①(12.0)②(4.8)	内面ミガキ、外面ナデ・ハケ目 後ミガキ	a 良 b 黄～赤褐色	
第43図	81	0194	土師器	甕	C	SC31	①(10.8)②(5.3)	内面指ナデ・ヘラケズリ 外面指ナデ・ハケ目	a 良好 b 黄～赤褐色	
第43図	82	0193	土師器	高杯	C	SC31	①(11.4)②(9.0)	内外面とも黒化のため調整不明	a 良 b 赤褐色	
第43図	83	0195	土師器	甕	C	SC32	①(13.0)②(4.8)	内面ナデ・ヘラケズリ 外面ナデ?	a 良 b 赤褐色	
第43図	84	0196	土師器	手づくね土器	C	SC32	①4.2②3.9③5.1	指調整	a 良 b 灰褐色～黒褐色	
第43図	85	0197	土師器	鉢	C	SC33カ マド	①(11.0)②(3.6)	内面ハケ目後指ナデ 外面ハケ目後ナデ	a 良好 b 褐色	
第43図	86	0198	土師器	甕	C	SC33	①(11.8)②(4.8)	内面ナデ、外面ナデ	a 良好 b 赤褐色	
第45図	87	0237	須恵器	坏母片	C	SK61	②(3.4)	内外面とも回転ナデ	a 良 b 灰色	
第45図	88	0240	須恵器	坏	C	SK61	①14.1②3.25③ 9.9	内面回転ナデ・不定方向ナデ、 外面回転ナデ、底部回転ヘラ ケズリ・板状底	a 良好 b 灰色一部灰黄色	内外面に火だす き痕あり
第45図	89	0230	須恵器	坏	C	SK61	①(13.8)②4.2③ (11.0)	内面ナデ・不定方向ナデ、外面 ナデ底部工具痕	a 良 b 灰白色	内面に火だす 痕あり
第45図	90	0224	須恵器	坏	C	SK61	①(14.8)②3.8③ (12.0)	内外面とも回転ナデ底部工具 痕	a 良 b 灰白色	外面に火だす 痕
第45図	91	0243	須恵器	坏	C	SK61	①14.5②3.8	内面回転ナデ・不定方向ナデ、 外面回転ナデ、底部回転ヘラ ケズリ後ナデ	a 良好 b 灰色	
第45図	92	0236	須恵器	坏	C	SK61	①14.3②4.2③ 10.5	内面回転ナデ・不定方向ナデ、 外面回転ナデ底部工具痕	a 良 b 灰色	内外面に火だす き痕あり
第45図	93	0235	須恵器	坏	C	SK61	①(14.0)②3.65③ 10.0	内外面とも回転ナデ底部工具 痕	a 良 b 灰色	内外面に火だす き痕あり
第45図	94	0242	須恵器	坏	C	SK61	①14.0②4.1③9.2	内面ヨコナデ・不定方向ナデ、 外面ヨコナデ底部回転ヘラ ケズリ後ナデ	a 良好 b 灰色	内外面に火だす き痕あり
第45図	95	0217	須恵器	坏	C	SK61	①(15.0)②(4.8)	内面ナデ・不定方向ナデ、外面 ナデ・回転ヘラケズリ	a 不良 b 黄灰色	
第45図	96	0241	須恵器	坏	C	SK61	①11.9②4.1高台 径7.7	内面ヨコナデ・不定方向ナデ、 外面ヨコナデ底部回転ヘラ ケズリ後ナデ	a 良好 b 灰色	
第45図	97	0244	須恵器	坏	C	SK61	①18.8②5.55高台 径11.2	内面回転ナデ・不定方向ナデ、 外面回転ナデ、底部回転ヘラ ケズリ後ナデ	a 良好 b 内面灰白色外面 灰色	
第45図	98	0225	須恵器	坏	C	SK61	①(14.2)②3.95高 台径(9.3)	内面ナデ・不定方向ナデ、外面 ナデ	a 良 b 灰色	貼り付け高台
第45図	99	0227	須恵器	甕	C	SK61	①(21.0)②2.25③ (18.3)	内外面ともナデ	a 良 b 灰白色	
第45図	100	0221	須恵器	甕	C	SK61	①(16.6)②2.6③ (14.2)	内面ナデ、外面ナデ・回転ヘラ ケズリ	a 良好 b 内面灰黄色外面 灰黄色一部にぶい褐色	
第45図	101	0238	須恵器	高杯	C	SK61	①13.7②9.6脚端 径10.6	内面回転ナデ・不定方向ナデ、 外面回転ナデ	a 良 b 暗灰色	
第45図	102	0226	須恵器	鉢	C	SK61	①(24.0)②(8.0)	内外面ともナデ	a 良 b 内面暗灰色外面灰 色	体部に2条の沈 線が走る
第45図	103	0231	須恵器	甕	C	SK61	②(13.7)	内面回転ナデ、外面回転ナデ 回転ヘラケズリ		外面に線刻 「田」?あり
第46図	104	0239	須恵器	甕	C	SK61	①20.6②(34.1)③ 33.6	内面ナデ・同心円文タタキ、外 面ナデ・平行文タタキ	a 良 b 内面灰褐色外面灰 色	口縁ややひずむ
第46図	105	0232	須恵器	甕 口縁部	C	SK61	①(21.0)②(8.8)	内面ナデ・同心円文タタキ、外 面ナデ・平行文タタキ	a 良 b 青灰色	
第46図	106	0229	須恵器	甕 口縁部	C	SK61	①(19.0)②(6.0)	内面ナデ・同心円文タタキ、外 面ナデ・ハケ目?	a やや良 b 暗灰色	
第47図	107	0216	須恵器	長頸壺 胴部	C	SK61	②(26.8)③(19.2)	内面ナデ、外面ナデ・ヘラケズ リ後ナデ	a 良 b 暗灰色	頸部に2条、3 条、体部に1条 の沈線が走る
第47図	108	0219	須恵器	長頸壺 胴部	C	SK61	①(12.5)②20.8高 台径(10.9)③(9.0)	内面ナデ、外面ナデ・静止ヘラ ケズリ	a 良 b 暗灰～灰色	
第47図	109	0220	須恵器	甕	C	SK61	①9.7②22.8③ 11.8④20.6	内面ナデ、外面ナデ・静止ヘラ ケズリ	a 良 b 灰～暗灰色	
第47図	110	0228	須恵器	甕 底部	C	SK61	②(7.6)③(13.6)	内面ナデ・不定方向ナデ、外面 回転ナデ・回転ヘラケズリ	a 良 b 灰色	
第48図	111	0252	須恵器	坏蓋	C	SK64	①(13.8)②4.1	内面回転ナデ・不定方向ナデ、 外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	a 良 b 灰白色	

図版 番号	遺物 番号	登録 番号	種類	部類	材質	遺物 番号	法量①口縁②高さ ③底径④最大径	形態技法の特徴	a 焼成 b 色調	備考
第48図	112	0257	須恵器	坏身 口縁部 片	C	SK64	②(2.9)	内外面とも回転ナデ	a 良 b 青灰色	
第48図	113	0253	須恵器	渠瓶把手	C	SK64	②(5.3)	内面ナデ・不定方向ナデ、外面 自然釉のため調整不明	a 良 b 青灰色	
第48図	114	0249	須恵器	蓋	C	SK64	①(15.4)②7.5上端 部径4.1	内面回転ナデ、外面回転ナデ・ 回転ヘラケズリ後ナデ	a 良好 b 内面灰白色外面 黒灰色	舞込部口か？
第48図	115	0255	土師器	甕 口縁部	C	SK64	①(16.8)②(3.6)	内外面とも風化のため調整不 明	a 良 b 褐色	
第48図	116	0250	土師器	甕 口縁部片	C	SK64	②(7.3)	内面ナデ・ケズリ、外面ナデ・タ テハケ	a 良 b 褐色	口縁スス付着
第48図	117	0248	土師器	鉢	C	SK63 外面	①(22.4)②(6.5)	内面ナデ外面風化のため調整 不明	a 良 b 褐色	
第48図	118	0254	土師器	甕	C	SK64	②(8.0)	内外面とも風化のため調整不 明	a 良 b 黄褐色	
第48図	119	0251	土師器	甕	C	SK64	①(13.0)②(5.3)	内外面とも風化のため調整不 明	a 良 b 褐色	
第48図	120	0256	土師器	把手	C	SK64	③(12.3)	内外面とも風化のため調整不 明	a 良 b 褐色	
第49図	1	0268	土師器	鑿刻口	C	SK64	残存長6.3幅7.1厚 さ1.8	内外面板状工具によるナデ	a 良 b 黄褐色	
第49図	2	0258	土師器	鑿刻口	C	SK64	残存長2.7幅4.8厚 さ1.65	内外面ナデ	a 良 b 内面黄褐色、外面 暗青灰色	外面強く熱を 受ける
第51図	121	0396	青磁	甕 甕部	C	1号集石	②(3.4)高台径5.6	内面施釉内底見込み釉カキト リ、外面体部上半施釉下半露 胎、内外面に片彫り風の沈線	a 良好 b 釉潤青灰色磁胎 灰白色	
第51図	122	0399	青磁	甕	C	1号集石	②(3.6)高台径5.6	内面施釉内底見込み釉カキト リ・放射状の筋目、外面上半施 釉下半露胎	a 良好 b 釉潤緑灰色磁胎 緑灰色	
第51図	123	0411	青磁	甕 甕部	C	2号集石	②(4.8)高台径 (6.0)	内面施釉・櫛による点線文、外 面上半施釉下半露胎・ヘラ状施 文具による片彫り風の沈線	a 良好 b 釉潤緑灰色磁胎 灰白色	
第51図	124	0417	青磁	甕 口縁～体 部	C	2号集石	①(15.0)②(5.5)	内面施釉・沈線・筋状及びヘラ 状の施文具により花文を施す	a 良好 b 釉潤緑灰色磁胎 灰白色	
第51図	125	0412	青磁	甕 甕部	C	2号集石	②(3.2)高台径5.6	内面施釉・貫入・草花文？外面 露胎	a 良好 b 釉潤緑灰色磁胎 灰白色	
第51図	126	0389	青磁	甕	C	1号集石	①(14.95)②(3.4)	内外面とも施釉外面に透入文	a 良 b 釉潤青緑色磁胎灰 色	
第51図	127	0390	青磁	甕	C	1号集石	②(2.8)	内外面とも施釉外面にヘラ状 の施文具による片彫り風の沈 線	a 良好 b 釉潤青灰色磁胎 灰白色	
第51図	128	0416	青磁	小甕	C	2号集石	①(11.2)②6.3高台 径3.6	内外面とも施釉外面細広のに ぶい透入文	a 良 b 釉潤	
第51図	129	0405	白磁	甕	C	1号集石	①(16.8)②(4.5)	内面施釉、外面上半施釉下半 露胎	a 良好 b 釉潤青灰白色磁 胎灰白色	
第51図	130	0410	白磁	甕 甕部	C	2号集石	②(6.75)	内面施釉、外面露胎	a 良 b 釉潤青灰白色磁胎 淡灰白色	
第51図	131	0414	白磁	甕 甕部	C	2号集石	②(2.7)高台径6.0	内面施釉、外面上半施釉下半 露胎	a 良 b 釉潤青灰白色磁胎 淡灰白色	
第51図	132	0413	青磁	甕	C	2号集石	①(10.0)②2.6高 台径(4.0)	内外面施釉・割入あり	a 良好 b 釉潤緑灰色磁胎 灰白色	
第52図	133	0419	須恵器	坏身	C	2号集石	①(10.8)②(3.1) 受け部径(12.4)	内面回転ナデ・不定方向ナデ、 外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	a 良 b 青灰色	
第52図	134	0398	須恵器	甕 口縁部片	C	1号集石	②(6.0)	内外面ともナデ	a 良好 b 暗青灰色	
第52図	135	0394	須恵器	平胎 片	C	1号集石	②(8.6)	内面ナデ外面ナデ・カキ目	a 良好 b 青灰色～暗灰色	頸部にヘラ記号 あり
第52図	136	0392	須恵器	長頸甕 甕部	C	1号集石	②(14.8)高台径 11.2③(18.2)	内面回転ナデ・ナデ、外面カキ 目・回転ナデ・ヘラケズリ	a 良好 b 内面灰白色外面暗 灰～灰色	
第52図	137	0397	須恵器	甕	C	1号集石	①(18.4)②(5.7)	内面回転ナデ・回転ヘラケズリ 外面回転ナデ	a 良好 b 青灰色	
第52図	138	0393	須恵器	鉢 口縁部片	C	1号集石	②(7.2)	内外面とも回転ナデ	a 良好 b 青灰色	注口あり
第52図	139	0391	須恵器	鉢	C	1号集石	①(27.8)②10.8 (9.0)	③内面横、斜め上方向の仕上げ ナデ外面回転ナデ表面素切り	a 良好 b 灰色	
第52図	140	0407	瓦器	甕	C	1号集石	②(2.3)高台径(8.0)	内外面風化のため調整不明	a 良 b 黄灰色～暗灰色	
第52図	141	0406	須恵器	甕 甕部	C	2号集石	②(3.2)高台径6.0	内面ナデ外面板状工具による 調整	a 良好 b 青灰色	口縁に回転時計 回り・黒り付け 高台
第52図	142	0401	土師器	甕	C	1号集石	③(17.0)②(5.0)	内外面とも風化のため調整不 明	a 不良 b 黄灰色～灰色	内外面にスス付 着
第52図	143	0415	土師器	高坏 甕部	C	2号集石	②(6.7)	内面ケズリ外面ナデ	a 良 b 褐色	
第52図	144	0403	土師器	把手	C	1号集石	②(8.9)	内面ケズリ外面指調整	a 良好 b 褐色	
第52図	145	0418	土師器	鉢 口縁～体 部	C	2号集石	①(29.4)②(10.1)	内面横、斜め方向ハケ目、外面 タテハケ	a 良好 b 黄褐色	
第53図	146	0404	瓦	平瓦	C	1号集石	厚さ2.5	内面布目肌、外面細目タタキ	a 良好 b 緑灰色	
第53図	147	0402	石罫	滑石罫石罫片	C	1号集石	②(10.1)		b 青灰～灰白色	
第53図	148	0400	石罫	滑石罫石罫片	C	1号集石	②(13.6)			
第53図	149	0388	石罫	滑石罫石罫片	C	1号集石	②(4.3)		b 暗緑色～緑灰色	

図版 番号	遺物 番号	登録 番号	種類	器種	調査 区	遺構 番号	法量①口縁②器高 ③底径④最大径	形態技法の特徴	a 焼成 b 色調	備考
第53図	150	0409	石駒	滑石製石駒片	C	2号集石	②(9.0)		b 青灰～灰白色	
第53図	151	0395		滑石製石駒の 断面片	C	1号集石	②(7.0)		b 暗青灰色	穿孔あり
第53図	152	0421	石駒	滑石製石駒片	C	2号集石	②(3.4)		b 青灰色	外面スス付着
第53図	153	0420	石駒	滑石製石駒片	C	2号集石	②(5.9)		b 青灰～灰白色	外面スス付着
第53図	154	0406	石駒	滑石製石駒片	C	1号集石	②(3.0)		b 青灰色	外面スス付着
第60図	155	0294	土師器	高杯 脚部	D	S03墳根 出土	⑤(7.2)	内面ケズリ、外面ナデ	a 良 b 黄褐色	
第60図	156	0293	瓦	平瓦	D	墳根出土	長・側面(12.0)側面 (6.8)厚さ2.0	内面布目煎、外面タタキ		
第75図	157	0302	青磁	碗	E	集石墓	②(2.1)高台径5.0	内外面施釉露胎	a 良好 b	
第75図	158	0296	白磁	小皿	E	Ⅲ-2号墓	①(8.8)②(2.1)③(5.0)	内外面とも施釉底面釉みキトリ・糸切り	a 良好 b 釉調灰青色透胎 灰白色	
第75図	159	0297	土師器	皿	E	Ⅲ-2号墓	①(13.3)②(4.0)③(7.6)	内外面とも風化のため調整不 明	a 良好 b 黄褐色	
第75図	160	0295	土師器	皿	E	Ⅲ-2号墓	①(13.0)②(4.0)③(7.4)	内外面ともナデ	a 良 b 黄褐色	
第75図	161	0298	土師器	皿	E	Ⅲ-3号墓	①(12.5)②(3.5)③(8.4)	内外面とも風化のため調整不 明	a 良 b 黄褐色	
第75図	162	0299	土師器	皿	E	Ⅳ-8号墓	①(13.8)②(2.7)③ 9.2	内面同布ナデ、外面同布ナデ、 底面ヘラ切り	a 良 b 黄褐色	
第75図	163	0300	土師器	皿	E	Ⅳ-8号墓	①(15.0)②(2.9)③ (16.2)	内外面同布ナデ底面ヘラ切り 釉薬剥落痕	a 良 b 黄褐色	
第75図	164	0301	砂岩製	五輪塔(空輪)	E	Ⅱ群集石 中	直径15.5残存高 9.6	風化進む		

図版

図版1



徳重本村遺跡周辺の航空写真（昭和53年撮影）



(1) A-3区全景 (上から)



(2) A-4区全景 (上から)



(1) 2号墳全景



(2) 2号墳南北土層



(3) 2号墳後円部西側土層



(4) 2号墳後円部東側土層



(5) 2号墳くびれ部東側周溝土層



(1) 2号墳くびれ部周溝



(2) 2号墳主体部



(3) 2号墳主体部木蓋密閉粘土



(4) 2号墳後円部盛土内鏡出土状況



(5) 2号墳後円部鉄斧出土状況



(6) 方形周溝墓全景



(7) 方形周溝墓主体部



(8) 2号墳後円部全景



(1) 6·7号墳全景



(2) 6号墳全景



(3) 6号墳主体部



(4) 6号墳周溝遺物出土状況①



(5) 6号墳周溝遺物出土状況②



(1) 7号墳全景



(2) 7号墳第1主体部



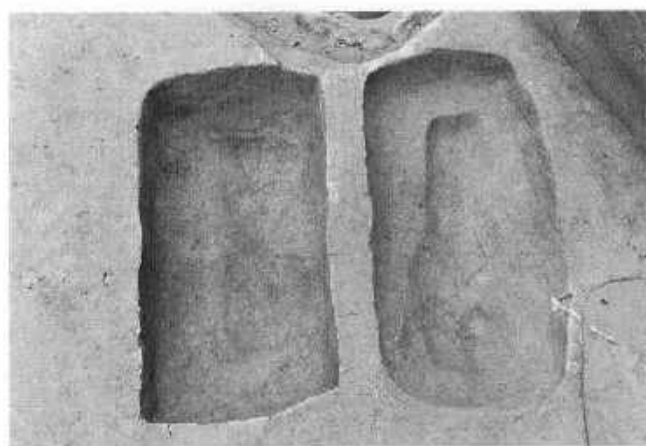
(3) 7号墳第2主体部



(4) 7号墳周溝遺物出土狀況



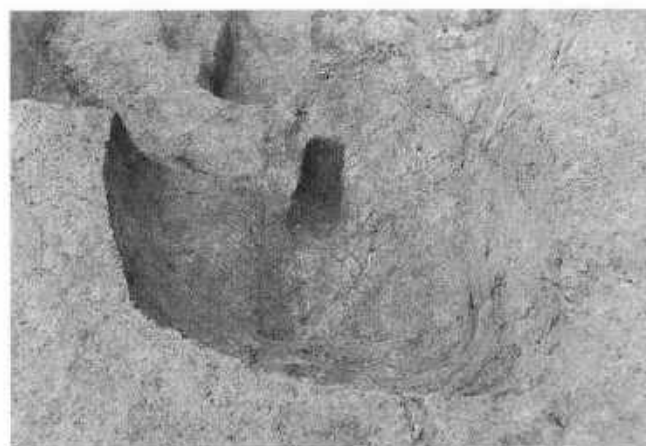
(5) B区SK18



(6) B区SK14・15



(7) B区SK21



(8) B区SK20



(1) B区SK16



(2) B区SK17



(3) B区SK7



(4) B区SK7鉄鏃出土状況



(5) B区SK11蓋石除去前



(6) B区SK11蓋石除去後



(7) B区SK5



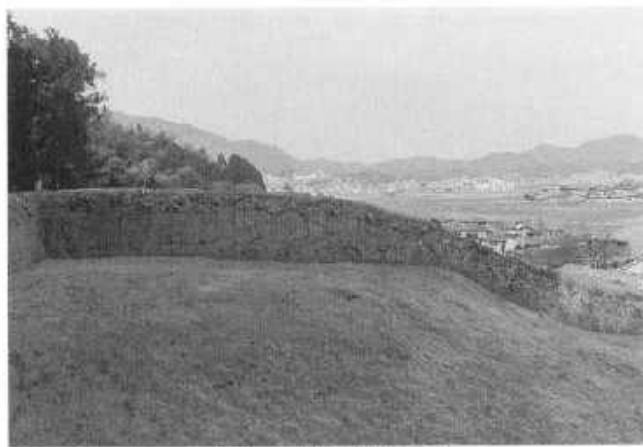
(8) B区SK5遺物出土状況



(1) 1号墳全景



(2) 1号墳東側土層



(3) 1号墳西側土層



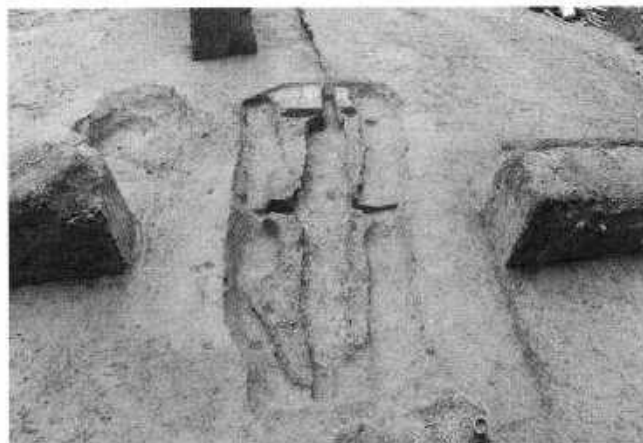
(4) 1号墳南側土層



(5) 1号墳北側土層



(1) 1号墳陸橋部



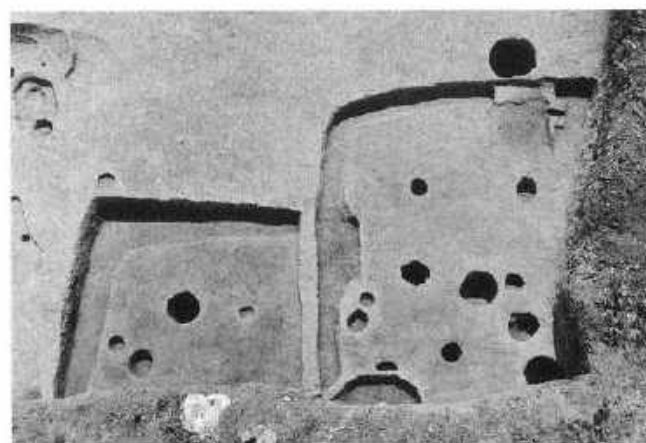
(2) 1号墳主体部



(3) 1号墳主体部鉄鎌出土状況



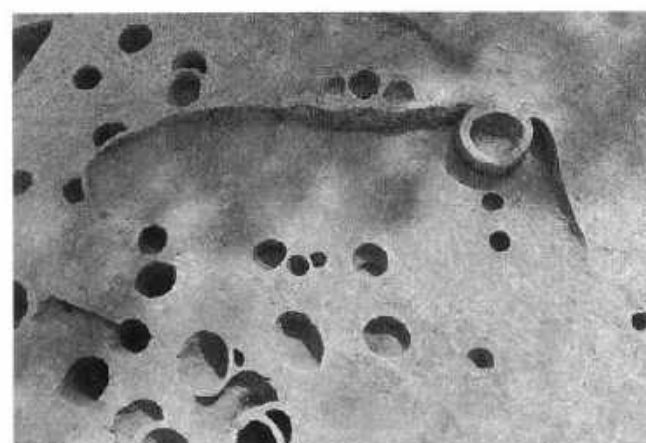
(4) C区SU12



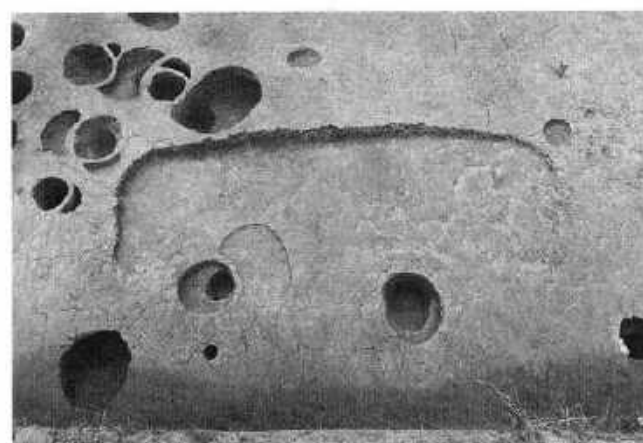
(5) C区SC22・23



(6) C区SC24~28



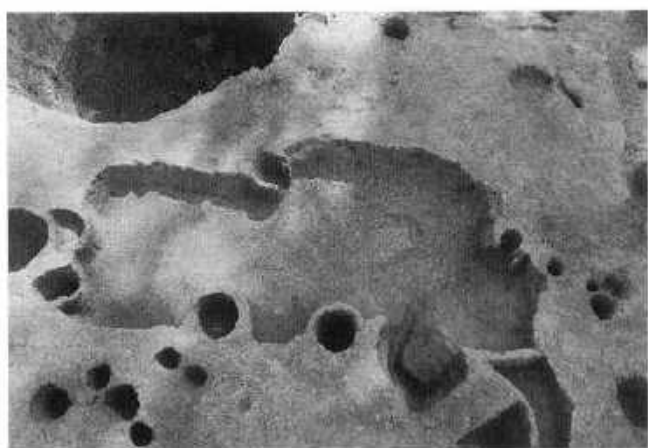
(7) C区SC30



(8) C区SC31



(1) C-2区全景



(2) C区SK61



(3) C区SK61遺物出土状況



(4) C区SK64



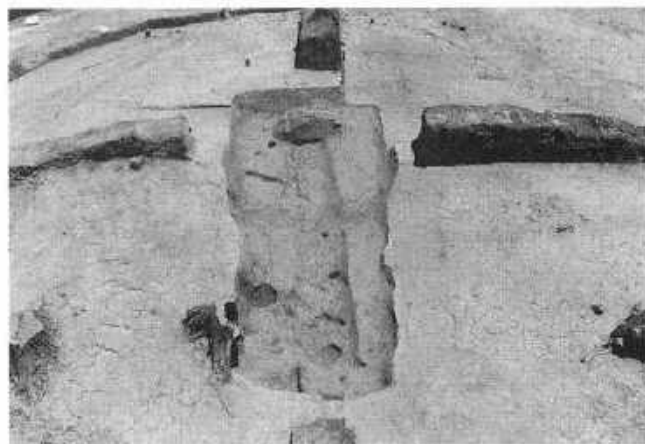
(5) C区1・2号集石遺構



(1) 3号墳全景



(2) 3号墳東西土層



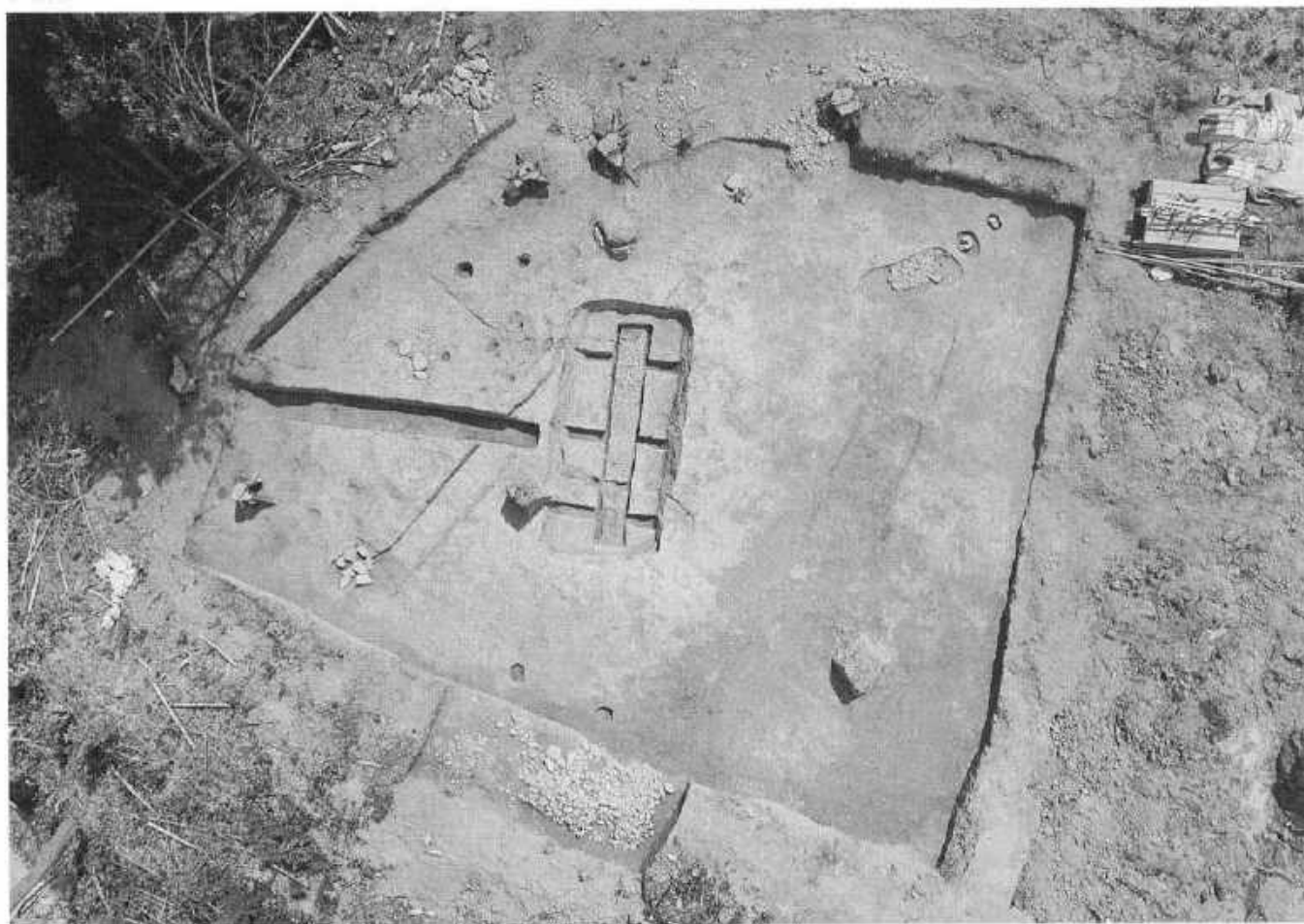
(3) 3号墳主体部



(4) 3号墳主体部勾玉出土状況



(5) 4号墳全景



(1) 5号墳・E区集石墓全景



(2) 5号墳主体部磔床検出状況



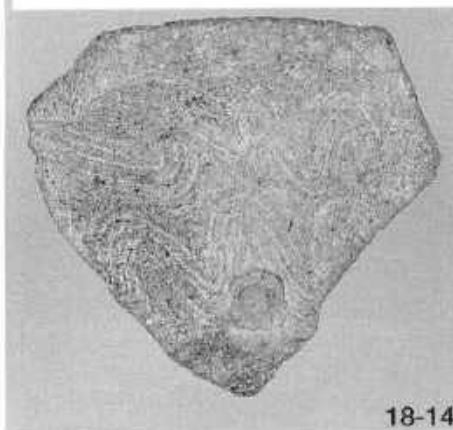
(3) 5号墳主体部磔除去後



(4) E区I-2号墓



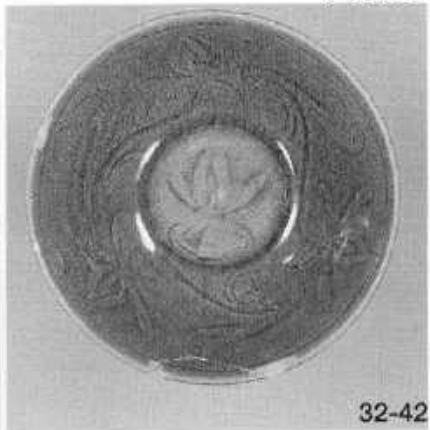
(5) I-2号墓蓋石除去後



18-14



21-27



32-42



18-15



21-28



32-42



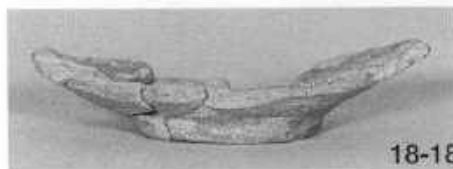
18-17



21-36



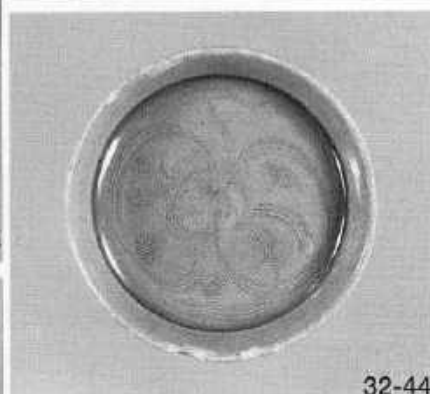
32-43



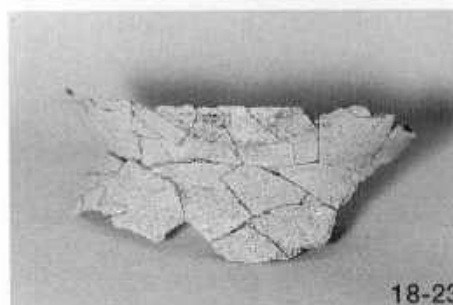
18-18



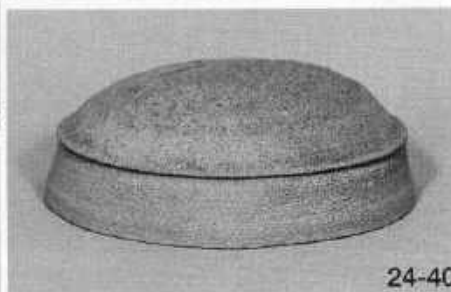
24-39



32-44



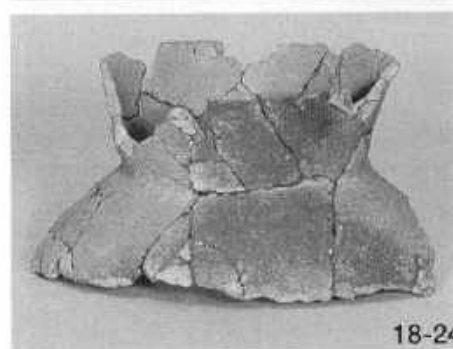
18-23



24-40



32-44



18-24



24-41



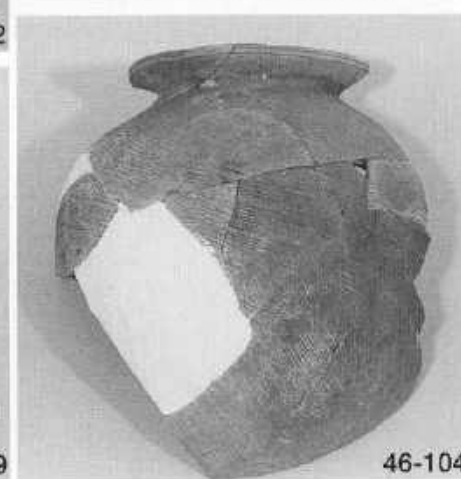
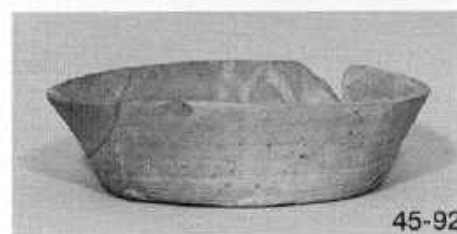
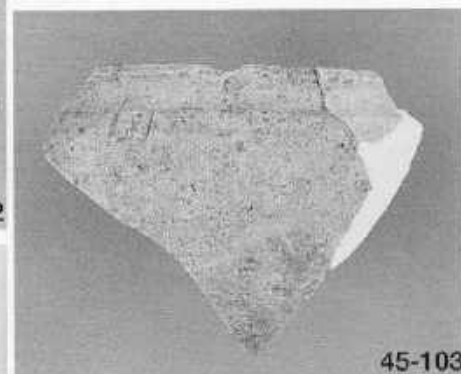
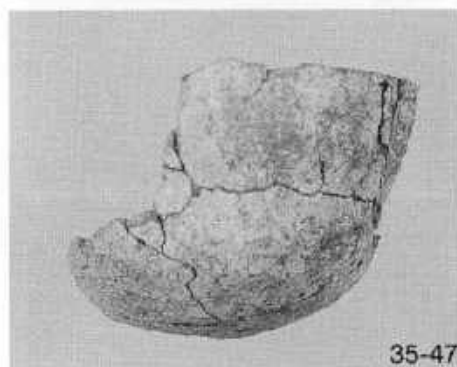
32-45

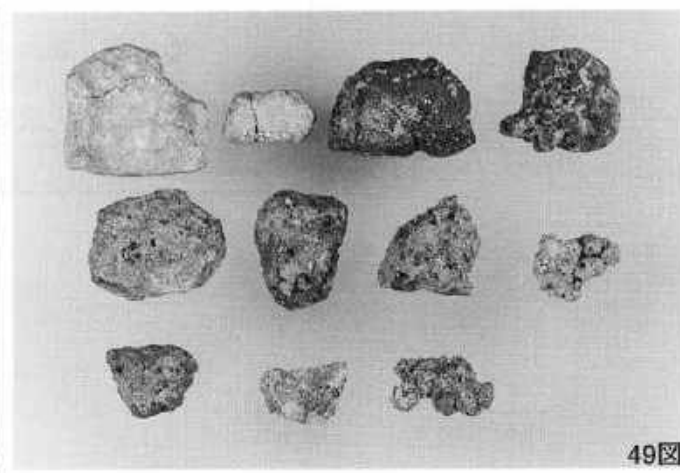
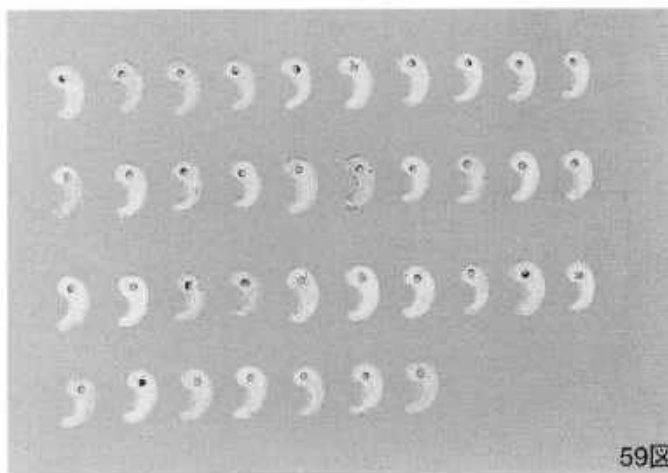
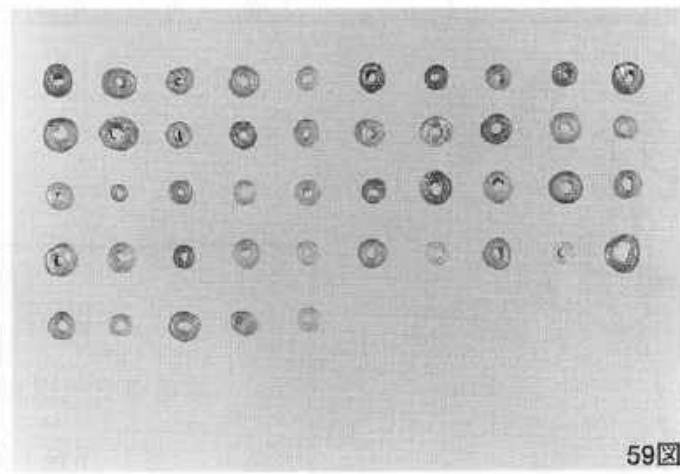
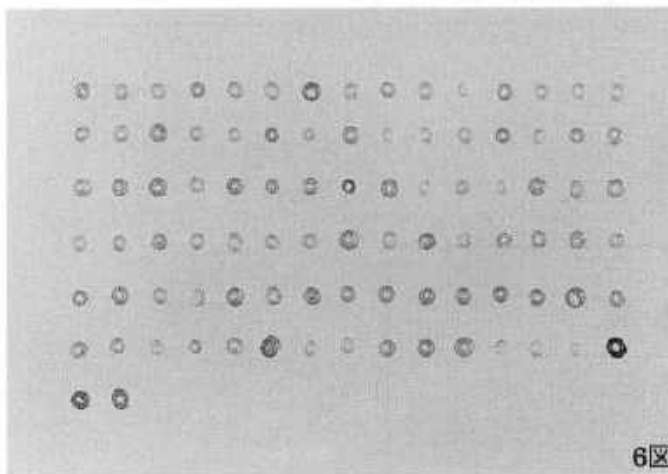
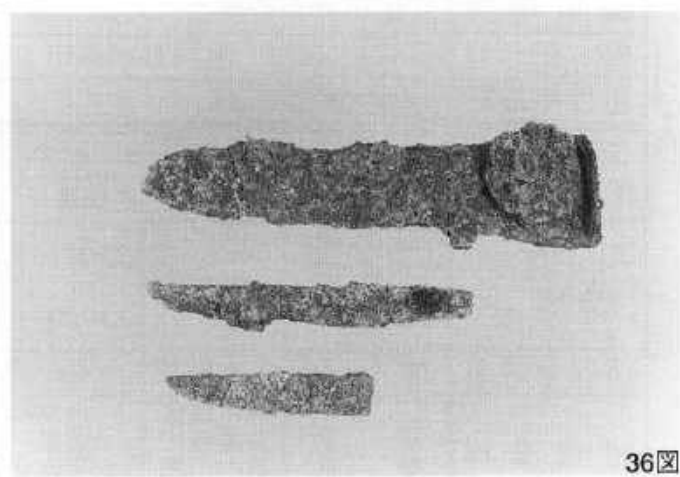
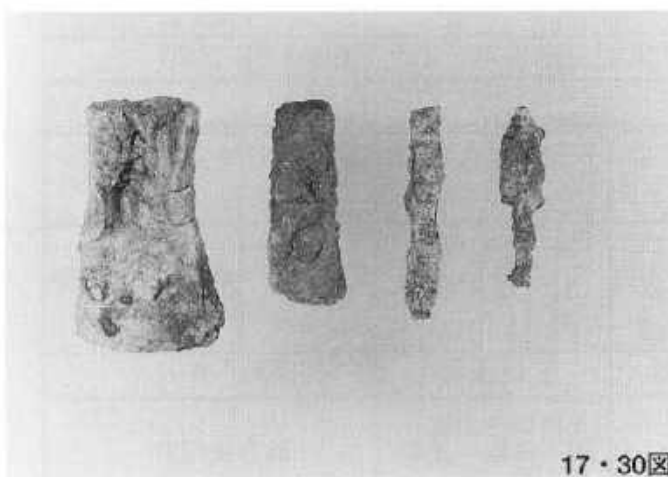
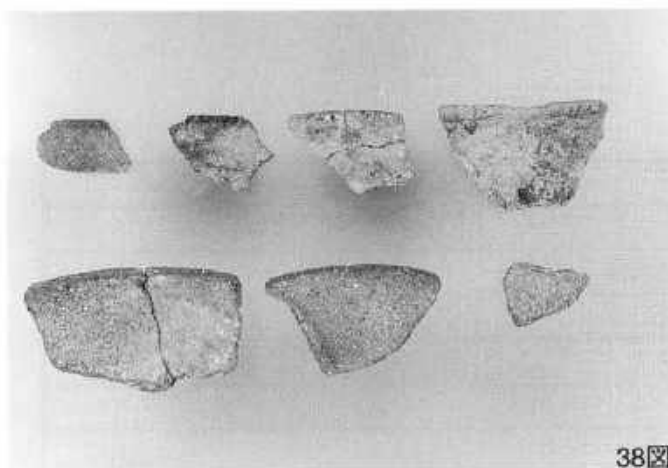


21-25



45-91





報 告 書 抄 録

フリガナ	トクシゲホンムラ							
書名	徳重本村							
副書名	福岡県宗像市徳重所在遺跡の発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	宗像市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	熊代昌之							
編集機関	宗像市教育委員会							
所在地	〒811-3492 福岡県宗像市大字東郷995番地 TEL (0940) 36-1540							
発行年月日	西暦2002年3月							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
トクシゲホンムラ 徳重本村	ムナカタシ オキアサ 宗像市大字 トクシゲ 徳重227-3	40220	330274 ～ 330290	33° 47' 29"	130° 35' 42"	平成10年12月 7日～平成13 年3月15日	3,050	県道徳重朝町線 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
徳重本村	墳集 墓落	弥生時代 古墳時代 古 中	土壇墓 古墳 住居 集石墓		土師器・須恵 器・磁器・鉄器 銅・鏡・玉		前方後円墳	

徳重本村

宗像市文化財報告書 第52集

平成14年3月

発 行 宗像市教育委員会

宗像市大字東郷995番地

印 刷 大成印刷株式会社



付 図 徳重本村事業計画図・調査区配置図(1/1000)